
リジェネレーター

翼紅助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リジエネレイター

【Nコード】

N2423U

【作者名】

翼紅助

【あらすじ】

二十一世紀初頭。技術発展は頭打ちとなり、人類の【進化】が止まった。停滞の時を迎える事に絶望していた人類の前に現れたのは、地球外機械生命体——エイリアンだった。

時は流れ、2050年。日本の、とある病室にて一人の少年が目覚めます。

第一話 白亜、目覚める

人々の新たな始まりを祝うかのように桜の花弁が舞い踊る。晴天から降り注ぐ陽光の中行われる軽やかな舞は儚き美しさに満ちていた。白い布団に包まれた少年は寝ぼけ眼で、窓越しにその様を眺めていた。やがて眩しそうに瞼をほとんど閉じ、視線を室内に向けた。

壁は茶色の木目調で統一されていた。無機質なパイプベッドの隣には小さな机があり、上には黄色の花が差されたガラスの花瓶が置かれていた。ベッドの向かい側には巨大な液晶モニター、部屋の所々にはクローゼットが備えられていた。

少年は軽く眉をしかめる。この異質な風景がその一因であった。

しかし、紐でベッドに括りつけられたプラスチックのファイル——「水瀬 白亜」という名前、初めて知る病院名、その他彼には理解できない文字と数字の羅列が記載されたそれによる影響力に比べれば些細なものであった。

部屋には少年以外の人間は存在しない。現在の状況を尋ねようがなかった。

「分からないよ……」

少年は気持ちをそのままぼそっと口にし、起きあがろうとした。しかし、筋肉痛のような痛みが鎖となって全身とベッドを繋いでいた。顔を歪め、横たわるしかなかった。

仕方なしになんとなく机に目を向けると、紙切れが置いてあるのに気づいた。重い手を伸ばし、なんとか目の前に持ってくる事ができた。

「……目が覚めたら、ナースコールでお呼びください」

紙切れに記された文字をそのまま声に出す。ナースコール——その数文字が、ここが病院であることを確信させた。枕元に転がる小さなスイッチこそまさにそれだった。少年はそれを手に取り、一瞬

ためらってからスイッチを押下した。無機質なアラームが鳴り、電話の保留音を思わせるメロディが数十秒間流れた後壁のスピーカーがぼつぼつと音を発した。

「おはようございます。お体は大丈夫ですか？」

看護師と思われる成人女性の落ちついた声が聞こえてきた。少年はどう返せばよいか迷ったが、スピーカー近くにマイクが取り付けられているのを発見した。

「体中が痛いです」

今の少年にはこう伝えるのが限界だった。

「分かりました。今担当医をお呼びしていますので、もう少しお待ちください」

看護師がこれで通信を終えようとしていたのを察して、少年は叫ぶようにマイクに声を叩きつけた。

「待ってください！」

「ど、どうしました？」

「その、あの、僕は、どうしてここにいますか？」

あまりに大雑把過ぎる質問だったが、スピーカーはすぐに反応を示した。

「そう言ったことも含め、これから担当医が説明いたしますので、落ち着いてお待ちください。後はよろしいですか？」

「はい……」

模範的な回答に、少年は不安に満ちた返事を返すしかなかった。

そしてスピーカーは途切れた。

少年が待った時間はわずか五分ほどであった。しかし、現状も分からず行動も起こせない彼にしてみればこの五分は一時間にも十時間にも感じられた。

病室にノック音が響く。少年は何とか半身を起こし、入室を許可する一言を返した。

ゆったりとした足取りで入ってきたのは、背の高い白衣をまとった女性だった。さらに機材を持った数人の看護師が後に続いて入っ

てきた。

「おはよう、『水瀬白亜』君」

「……おはようございます」

「体が痛むみたいね。でも、大丈夫。今から検査をして、終わったらお薬を出すから」

少年「水瀬白亜」は、女性の言葉など聞く耳を持たないと言わんばかりに揺れるように首を振る。女性は特に驚くでもなくその様を見つめていた。

「どうしたの？」

「名前が……違います」

「違うって？」

「『白亜』は合ってます。でも……名字が、違うんです。僕の名字は『秋月』です」

女性は軽く頷いて、納得していた。

「ええ、確かにあなたは『秋月白亜』という名前でした。でも、今はもう『水瀬白亜』なの」

「えっ……」

白亜は困惑の表情を浮かべた。

「どう、してですか」

僅かな静寂の後、女性は薄い紅色の唇を開いた。

「これから話すことは、あなたの過去についてよ。理不尽だと思われることも多いでしょうけど、落ち着いて聞いて」

空気も時間も止まってしまったかのように静かな廊下に、二つの足音が響きわたる。

「上田先生……よろしかったのでしょうか？」

壮年の女性看護師が話しかける相手は、先ほど白亜と対面していた女性だった。

「目覚めて間もない、しかも年端もいかぬ子供に真実を伝えたことが？」

看護師は沈黙で返した。

「確かに残酷ね。けど、彼を空白のまま放置する方がもっと残酷だと思うわ。やれることも思考すべきことも分からず、ただ時間を浪費し続けるのは苦痛でしょうし」

上田は淡々と続けた。

「本当はもっと伝えなければならぬことが山ほどあるの。今回伝えた情報量なんて、微々たるものよ」

「微々たる……」

看護師の言葉が途切れる。

「今の彼には多すぎるでしょうね。でも、彼が『人間』として生きていくには最低限必要なことなの」

二人はエレベーターの前に到着した。

「本当はこれだけ知っておけば、一般生活に支障はないのよ。むしろこれ以上は知って欲しくないのが本音。ただ、それは普通の人間に限った話。彼は――違う」

エレベーターの扉が開く。

「これを知らなければ、彼は生きていけない。それに――」

二人はエレベーターに乗った。そして、上田は「閉」のボタンを愛撫するように押し込んだ。

「伝えるのは、あの人たちとの約束だから――」

重厚な扉がゆっくりと閉じられる。廊下から人の気配は消えた。

一週間後――白亜は一人の女性に連れられて、住宅街をとぼとぼと歩いていた。

「体は大丈夫？」

女性が白亜の顔をのぞき込んで、そっと尋ねてきた。

「はい」

白亜は抑揚のない声で返した。

女性は上田ではない。そして白亜も会って間もない人物であり、これから寝食を共にする「家族」の一人、義母の小百合であった。

「もう少しで着くからね」

どこかで子供同士のはしゃぐ声が聞こえてきた。悩みなど感じられない喜々としたそれに、白亜は釈然としない感情を覚えた。

「ここらへんには白亜君と同じくらいの子もたくさん住んでるから、友達もたくさんできるわよ」

同じくらい——白亜は小百合に気づかれない程度に小さく呟いた。

「今日は日曜だから、綾も家にいると思うわ。お年頃でちよっと怖いかもしれないけど、どんどん頼っちゃっていいからね」

義姉の名前は未だに聞き慣れなかった。そもそも秋月姓だった頃は兄弟などいなかったため、姉というものがどういったものであるのか想像できなかった。

「あの……」

白亜は不安そうな声をあげた。

「何？」

小百合はおっとりとした眼差しで白亜を見た。

「その、綾……さんは何て呼んだらいいですか」

小百合は少し表情を固くした後、微笑んだ。

「お姉ちゃん、で平気よ。もしかしたら嫌がるかもしれないけどね」
そう言って笑う小百合の眉端は少し下がり気味だった。

間もなく、水瀬家の住居にたどり着いた。庭付きの一戸建てだった。周辺にも似たような住居が多く存在し、住民の裕福さを物語っていた。

「庭がある……」

白亜は目を丸くして言った。

「お庭見るのは初めて？」

「い、いいえ。前の僕の家にもあったから――」

白亜ははっとした顔で突然言葉を切り、目を伏した。

「……ごめんなさい」

謝罪する白亜を、小百合は心配そうに見つめていた。

「大丈夫よ。全然気にしてないわ。さっ、家に入りましょう」

小百合は扉を開けて、白亜に入るよう促した。彼は無言で、すっかり重くなってしまった足を動かした。

見慣れぬ玄関がそこにあった。スニーカーや革靴が等間隔に整列していた。

「綾いるみたいね」

視線の先には、こぢんまりとした黒のローファーが置かれていた。

「綾ー、ただいまー」

小百合は目の前の階段上部に向かって声を張り上げた。綾の部屋は二階にあるのだと、白亜は察した。

十秒と待たずに階段から気配がしてきた。

「おかえり」

淡い色で身を包む少女が姿を現し、温度の低い声を発した。

綺麗な人だ――綾を見た瞬間、白亜の脳裏に浮かんだただひたすらに純粹な感情である。闇夜を思わせる黒の長髪、ほっそりとした白い頬、レンズ越しに見える鋭い目。十代の少年を魅了するには十分過ぎるほどである。

「この子が前から話してた白亜君よ。今日から一緒に住むあなたの弟なんだから、仲良くしてあげなさいよ」

小百合はそう言った後、白亜に優しく瞳を向けた。言葉ではない挨拶の促進だった。

白亜はじつと綾を見た。彼女はどこか冷ややかな視線でこちらを眺めている。

背をしゃんと伸ばし、唇を締めて綾への目力を強くした。

「は、白亜です。よろしくお願いします」

言葉が終わるとともに、白亜は大きく頭を下げた。端から見ると、

プロポーズでもしているかのような姿であった。

「よろしく」

抑揚のない返事が返って白亜が頭を持ち上げた時には、綾の姿は消えていた。

「ごめんなさいね。冷たい子でしょう？」

困ったような笑みに、白亜は大きく横に首を振った。

「そ、そんなことないです……」

「昔はもっと明るい子だったんだけどね……って、これは綾の前では言っちゃ駄目よ」

小百合は口元にすっと人差し指を伸ばした。

「私の前だからあんなかもしれないけど、あなたと二人きりならもしかすると優しくなるかもしれないわね。だから、あの子とよろしくね」

そう言って微笑を浮かべる小百合はどこか寂しそうに見えた。しかし、白亜はそれが何を意味するのか理解できなかった。

第二話 白亜、思い出す

その後、白亜はこれから過ごす自室に案内された。必要な家具は一式揃っており、どれも新品に見えた。何より白亜が安堵を感じたのは、ここが病室ではないことだった。

ベッドのふもとに黒光りする箱が鎮座していた。

「これって……」

「ええ、ランドセルよ。これで明日から普通に登校できるわよ」

登校。確かに上田から聞いた話では、今の自分は小学生である。

それが何故か釈然としなかった。

「もう手続きは済ませてあるから、心配しないで。それに、明日は一緒に行つてあげるわよ」

白亜は固い笑顔で返した。

一通り室内を案内された後、リビングにやってきた。

「お昼ご飯まで時間があるけど、どうする？　そこでテレビでも見る？」

白亜は頷き、ソファにすっと腰掛けてテレビの電源を入れた。病院にあったモニターほどではないにせよ、なかなか高価そうなテレビであった。

映し出されたのは、ごく普通のニュース番組だった。

『——ヒロイックなデザインを取り入れ、かつ性能も申し分ないというシリウス社自慢の新型A2。LGOの関係者によると、へバニラに変わって運用を始める予定だということです。果たしてダンデライオン社はどのような対抗馬を持ち出してくるのか、注目が集まっています——』

聞き慣れた言葉が出てきて安心すると同時に、目の前に映し出されるパワードスーツの姿によって胸の高まりが大きくなった。

「白亜君もやっぱりA2好き？」

炒め物の匂いがリビングに伝わってくる中、小百合が話しかけてきた。

「えっと……はい」

白亜は少し照れくさそうに返事をした。

「男の子だもんね。分かるわよ」

白亜は小百合とわずかばかり打ち解けたような感覚を覚えた。

アナウンサーは既に次の原稿を読み始めていた。

『――にて、女子中学生が倒れているのを住民が発見し病院に搬送されましたが、間もなく死亡しました。被害者の体にはえぐられたような深い傷があることから、犯行はエイリアンによるものとして捜査が続けられています――』

白亜は唇をきゅっと噛んだ。

「エイリアン……」

白亜は不安混じり呟いた。

「最近が多いのよ、こういう事件。白亜君も気をつけてね」

白亜は「はい」と一言返事をした。

「LGOも対策はしてるみたいだけど、なかなか上手くいってないってお父さんが言ってたわ」

入院中、小百合から義父の総司はLGOの科学者であると聞かされていた。彼は実父の友人で、それが縁となって白亜はここに引き取られたという事らしい。

「白亜君は、LGOのお仕事に興味がある？」

「はい」

「A2好きだものね。じゃあお父さんが帰ってきたら、色々聞いてみるといいわよ。きっと喜んで教えてくれるから」

「はい」

小百合の弾むような声を聞き、白亜はソファに預ける体重を増やした。

初めて水瀬家で食べる昼食はチャーハンだった。

「お夕飯豪華にするから、と思って軽めにしたんだけど色々入れすぎちゃったかしら」

小百合はくすくすと笑った。チャーシュー、かにかまぼこ、貝柱、人参、ネギ、レタス——確かにチャーハンの色彩が鮮やかである。隣に座る綾は「いただきます」と一言述べたきり無言でチャーハンを口に運んでいる。誰とも視線を合わせようとしない。その威圧的な様は、その場の人間から言葉を失わせるに十分な力を秘めていた。

白亜も食べ始めた。確かに美味しかった。過去に高級中華料理屋で食べたものと甲乙つけ難いほどであった。しかし、何故か満足することはできなかった。

「それじゃあ明日の準備をしておきましょうか」

小百合は皿を片づけながら言った。

「綾、手伝ってあげなさい。必要なものはこれに書いてあるから」一枚のプリントを綾に手渡した。綾は返事もなく受け取った。

「来て」

投げ捨てるような言葉で、白亜を促した。

二人は二階に向かった。白亜の部屋までのわずかな間に、会話はなかった。白亜は精神的に窒息感を感じていた。

部屋の前にたどり着いた時、白亜は意を決して口を開いた。

「あの」

綾が足を止める。肩胛骨まで伸びたなめらかな黒髪が軽く舞った。

「何」

白亜に振り向くことなく答えは返ってきた。

「あの、何て呼んだらいいですか」

白亜はハキハキと明るく話しかけた。しかし、その顔は緊張で強ばっていた。

数秒の間。不安を感じずにいらなかった。

「何でも」

喜怒哀楽の感じられない返答だった。

白亜は伏し目で悩んだ。間もなく綾の背中を見つめた。

「じゃあ、綾お姉ちゃ——」

「ていうか、話しかけないで」

綾の言葉を理解するのに五秒とかからなかった。体から血の気が引いていくのを感じた。

「化物」

軽蔑——それ以外に例えようのない一言だった。綾は白亜の部屋に入ってしまった。

白亜は眉間にムズムズとした違和感を覚え、一步も動けなくなつた。涙腺がゆるんで涙がこぼれそうになるのを、目をぎゅっと閉じることでも必死にこらえた。

嘘だと思いたかった上田の話を、否が応でも思い出さずにいられなかった——

##

「水瀬君、君はここで目覚めるまでの記憶がある？」

目覚めて間もない白亜に、上田は問いかけた。

「えっと……学校から帰ってきてからおつかいに出かけて、それで……それで……」

白亜は目をつぶり、懸命に脳内を探った。しかし、それ以上の事柄を思い出すことはできなかった。

「思い出せない？」

白亜はこくんと頷いた。

「でしうね」

上田は顔色一つ変えることなく、白亜を見つめていた。

「結論から言います。あなたは、一度死にました」

切り取られたような空白の時間が生まれる。白亜は上田の言葉を何一つ理解できなかった。

「死ん、だ……って」

「ええ。おつかいの帰り、あなたは車に跳ねられて死亡したのよ」
突然の非現実。理解できるわけがなかった。

「嘘だ」

「信じられない話でしょうね。その様子では、衝突時の記憶は残っていないでしょうし」

上田は微笑を浮かべた。

「御両親が、どんな職業に就いてるか知ってる？」

混乱収まらぬ白亜は唾を飲み込んだ。唾液は、ようやく一言二言
呟ける程度の潤いを施した。

「医者、です」

「そうよ。そして私はあなたの御両親と同じ職場、『LGO』で働
いていたわ」

「え……」

白亜は耳を疑った。彼が知る限り、両親は有名病院の医師である。
LGO (Life Guard Organization) は
文字通り地球の生命を守るための組織であり、地球に襲来した有害
なエイリアンと日夜戦い続けている。なぜ両親はそのような組織で
働いていたのか——混乱は免れられなかった。

上田は力強い視線で白亜を捉える。

「私たちは、死んだ人間を生き返らせる研究をしていました。その
結果を生かし、あなたを生き返らせたのよ」

白亜の狼狽ぶりは激しいものとなった。

「意味が分かりません！ そんなことできるわけな——」

「ええ、無理よ。そんなものは漫画やゲームの中だけですもの」

上田はそつと瞼を閉じた。

「表向きには、ね」

瞼とともに、細身の唇が開いた。

「人間を生き返らせる研究、それは秘密裏に行われていたのよ。決
して表沙汰になってはいけなかった」

「なんで」

白亜は搾り出したような声で疑問をぶつける。

「人間は一度死んだら生き返ってはいけないからよ」

矛盾交じりの即答だった。

「わけが分からないよ!」

上田は溜息を一つ吐いた。

「じゃああなたでも分かりやすく教えてあげるわ。『とにかく』駄目だからよ」

大人だけが使える魔法の言葉——とにかく。白亜も幾度か聞いた言葉である。それから学んだことは、これ以上は何を言っても無駄だということである。

白亜はすっかり不機嫌になり、閉口してしまった。

「あなたが死亡してから数日後、『リジェネレート』は完成しました……あなたのお父さんのおかげだね。まるであなたを生き返らせるため、と言わんばかりの奮闘ぶりだったわ」

聞いたこともない単語、父が自分のために頑張っていたかのような言い回し——どう反応したらよいのか分からなかった。ただ分かったのは、謎の単語が自分が生き返ったのと関係していることである。

「そして、あなたを含めた幾人の遺体に『リジェネレート』を移植した。そこまでは良かった」

上田の面持ちが沈痛なものへと変わっていく。

「間もなく、正体不明の集団に研究所は襲撃された。あなたたち献体と私を含む数人の所員は脱出に成功した。でも、他の所員は——」
言葉が一旦途切れ、上田の唇が小さく歪む。

「でも、他の所員は……未だに身元が確認されていないわ」

白亜は伏し目で自身の手を見た。少し冷たく感じるも、血の通った両手がそこにあった。再び上田の顔を見る。

「お父さんと……お母さんは？」

「……息子を水瀬博士に預けてほしい——最後に別れる時、御両親

はそう約束してきたわ。以降、二人の消息は不明」

上田は仮面のような笑顔を作った。

「でも、死亡が確認されたわけではない。きっと御両親はあなたの元に帰って来るはずよ。だから」

手に温もりを感じると同時に、上田との距離がわずかに縮んでいた。

「生きて。あなたの御両親がくれたもう一つの命を大切に」

白亜はある程度分別がつく年頃である。こういう場合、両親の死は確実なものだと認識できた。しかし、作りものとはいえ希望を感じさせる笑顔、狼狽によってすっかり冷え切った手を包む温もりは上田の激励により強い説得力を与えた。

「はい」

完全に納得したわけではないものの、その一言は確かに心から素直に発せられたものであった。

##

気づけば、暗い部屋の中ベッドに潜っていた。

明日の準備を終えた後は、ぼんやりと教科書をめくり、飽きればテレビに没頭した。それ以外にやりたいことも、やる気力もなかった。

小百合が腕を振るい作ってくれた豪華な夕食もただ胃に詰め込むだけだった。彼様を察して苦笑いを浮かべる小百合に申し訳ない気持ちでいっぱいになるも、どうしようもなかった。

綾は変わらず白亜を避け続けた。総司は残業で、起きている間には帰ってこなかった。

「化物」

静寂の中、自身を苦しめる言葉を呟く。

人間を生き返らせる研究、そして「リジェネレート」――それを知るのはLGOに所属する一部の人間、生き返った人間の親族のみ

であると上田から聞かされた。つまり、綾も知っているということである。道理の通った暴言だった。

「そう、だよな」

昔友人とプレイしたアクションゲームを思い出した。それは死んだ人間がゾンビとなって襲い掛かってくるものであった。

「僕も、ゾンビなんだよね」

先ほど浴室にて、自身の肢体を確かめた。全身は傷跡一つ残っておらず、むしろ生前よりも張りの良い皮膚が広がっていた。グロテスクなゾンビとはほど遠い姿だった。

「きれいなゾンビ、なんだ」

諦めるように瞳を閉じる。

「化物、なんだ」

肺の空気を出し切った後、新鮮な空気で満たす。自身でも驚くくらい穏やかにそれを繰り返し、深遠の闇に落ちていった。

第三話 白亜、誘われる

「さ、自己紹介してくれ」

公立第三小学校、六年三組。二十世紀末期から作りも風景も変わらぬ教室。生徒の視線は教卓横に集中していた。

「っ、水瀬白亜です。よろしくお願いします」

どこか頼りなさそうな若手男性教師の横で、白亜は直立していた。挨拶が終わるなり、ぎくしゃくとした動作でお辞儀をした。腰は素晴らしい直角を描いた。

「よろしくー！」

「よろしくねー！」

明るい声援で迎えられ、ほっと安堵した。

「みんな質問はあるだろうが、緊急の連絡があるからそれは休み時間にしてほしい。じゃあ水瀬、あそこの空いてる席に座ってくれ」担任の示す先は、中列の窓際だった。白亜は一言返事をしてすぐに向かった。

クラスメイトの大半がちらちらと白亜に視線を送ってきた。白亜の隣の席に座っている生徒もその一人だった。

「っ……！」

白亜が視線に気づき目を向けると、恥ずかしそうに担任の方へ顔を背けた。

黒髪の女子だった。前髪はほぼ真っ直ぐ揃えられ、全体的な長さは肩ほど伸びていた。そして、細身のフレームで構成された眼鏡をかけており、服装は年相応のものではあるものの他の女子生徒に比べれば地味ではあった。「おとなしそう」以外の印象が浮かばなかった。

不思議に思いながらも、席に着いた。

「昨夜、学校の周辺で怪我人が出た。犯人はエイリアンだと言われている」

教室内がざわめき始める。

「なので、事件が解決するまで放課後の居残りは禁止となった。一日の授業が終わり次第、すみやかに帰るように。間違ってもエイリアンを見たいなんて思うなよ。もし放課後校内にいるのを見つけたら、反省文を書かせるからな」

緊急の連絡はそれだけだった。その後はごく一般的な連絡事項が続き、ホームルームは終了した。

一時限目が終わるなり、白亜の周囲に生徒が集まってきた。今まで経験した事がないだけに、白亜はとても驚いた。

「水瀬君って前はどこに住んでいたの？」

「勉強とスポーツ、どっちが得意なの？」

「好きな遊びってなーに？」

「前の学校で女の子にモテたでしょー？」

生徒の大半は女子だった。皆が黄色い声を上げて白亜に大量の質問をぶつける。

「えーっと、勉強もスポーツもまあまあできるよ、えーそれで、女の子とはみんな仲良くしてたよ、でーえーっとなんだっけ……漫画もゲームも好きで、それでー……えーと……あー……そうそう、前は――」

てんてこ舞いだった。

怒濤の休み時間が終わり、二時限目が始まった。白亜はお腹の底から大きく息を吐き出した。

そして二時限目が終わり、再び女子生徒に囲まれた。白亜はまた息を吐き出さざるをえなかった。

そんな状態は給食の時間までも巻き込んで続けられた。幾人の女子生徒が自己紹介をしてきたが、到底覚えきれるものではなかった。今日の白亜には、給食を味わう権利を与えられなかった。

「はぁ………」

昼休み。ようやく白亜は解放され、話し疲れて机に突っ伏した。

「おい、水瀬」

男子の声が聞こえ、白亜はむくりと起きあがる。今度は五人の男子に囲まれていた。

「ん……何？」

「サッカー、しようぜ」

短髪の一人が笑顔でサッカーボールを叩きながら誘ってきた。ずっと拘束されて節々を解したかったので、誘いに乗ることにした。

「うん、い——」

「待ちなさいよ」

白亜の言葉を遮ったのは、強気な女子の声だった。誰もがその方向に顔を向けた。

「げっ、美月」

短髪の男子が不満そうに声を漏らす。他の男子も同様だった。

美月と呼ばれた女子は特に気にするでもなく、白亜と男子たちの間に割って入った。長いポニーテールが印象的で、女子の中でも身長は高い方だった。

「転校生君、そんなやつよりもあたしと遊びましょうよ」

先ほどと変わらぬトーンで話しかけてきた。

「おい美月、水瀬は俺たちとサッカーするんだぞ」

そうだそうだと男子は騒ぎ始める。

美月はそれを見ても顔色一つ変えなかった。

「水瀬、こいつには気をつけろよ。すげー性格悪い——」

「二組の早川さんの水着」

美月は突然脈絡のない言葉を発した。短髪の男子は話すのをやめたかと思うと、ぴたりと体の動きが止まってしまった。よく見ると、目の焦点が合っていない。

「な、なんか水瀬のやつ女子に囲まれて疲れてるみたいだし、誘うのやめとこうぜっ」

短髪の男子の声は震えていた。

「どうしたんだよ」

「なんか震えてるぜ。大丈夫かよ」

美月の言葉の意味を知る男子はいなかった。

「い、いこーぜ」

短髪の男子はぎこちない早歩きで教室を出ていった。他の男子も白亜を横目に後に続いていく。

「なーにびびってんだか」

美月は邪な笑みを浮かべ、白亜を見下していた。

「あたしは陣野美月。よろしくね」

そう言うなり、右手を差し出してきた。どう見ても握手を求めている。

「よ、よろしく」

すげー性格悪い——短髪の男子が言いかけた言葉が気になるものの、白亜は右手で握手をした。

「つっ——」

右手に強い圧迫感を覚え、痛みを発した。思わず手を引っ込めてしまう。

「あはは、ごめんごめん」

美月は悪気などないと言わんばかりに破顔した。

「きれいな手ね。女の子みたい」

女の子という言葉に、白亜はむっとして眉間にしわを寄せた。

「へー、そういうの気にするんだ。かわいいじゃない」

再び精神を逆撫でされ、美月をじっと睨んだ。

「はいはい、ごめんごめん」

気持ちのこもっていない謝罪だった。白亜はすっかり呆れてしまい、目を逸らした。

「せっかかうちに転校したんだもの。仲良くしましょうよ」

その機会を失わせようとしているのはそっちじゃないかと問いつめたくなったが、押し止めた。

「ねえ、放課後暇？」

昼の誘いかと思いきや、聞かれたのは放課後の予定だった。思わぬ問いに、白亜は一瞬戸惑った。ふと、今朝の担任の連絡を思い出す。

「……もしかして、エイリアンと関係ある？」

美月は一瞬ぽかんとするが、すぐに笑顔になった。

「馬鹿じゃないの、男子じゃあるまいし」

どうしてこう精神を逆撫でするような言い方しかできないのだろうと、不満を覚えずにはいられなかった。

「違うわ。ちょっと付き合ってほしいところがあるのよ」

胸の鼓動が少し早くなる。それは恋心からくるものではないのは確かであった。

「お、お金全然持ってないよ」

「はあ？」

美月の眉がつり上がった。

「言いたいことは分かるわよ。どうせ金づるにさせられる、とか思ってるんでしょ？」

凶星故に、視線が定まらない。

「今日は違うわよ」

引っかかる部分こそあるものの、とりあえず安堵した。

「神風神社」

「かん……なぎ？」

周辺の地理には詳しくなかったが、少なくとも騒がしそうな場所ではないことは理解し、同時に恐怖も生まれた。

「神社ってことは人があまりいないの？」

「そうね。正月とかお祭りの時はたくさん来るけど」

「……何するの？」

美月の目つきが陰しくなる。

「少なくともあんたをサンドバッグにするようなことはしないわよ」

「……ごめん」

この女子には隠し事は通用しない——初日からいい勉強になった。

「ちょっと会ってほしい子がいるのよ」

「え？」

「あんたの知ってる子」

「知ってる？」

白亜は必死に考えた。転校して間もないはずなのに、知ってる人間などいるのだろうか。水瀬家の人間を思い出したが、美月は白亜の家庭事情をまだ知らないはずだ。そもそも「子」と言っているの
で、同年代の人間に違いない。ならば尚更知るはずがない。だんだんと脳が重くなってきた。

美月が呆れたように溜息を吐く。

「……その様子だとクラスの名前さえまともに覚えてないみたいね。まあ会えば分かるんじゃない？ で、どうするの？」

義母はパートで夕方にならなければ帰ってこない。このまま帰っても、綾と二人きりになる可能性が高い。それはなるべく避けたかった。

「……うん、いいよ」

抑揚を抑えた声で、誘いを受けた。

「よし、決まりね。五時限目終わったらそっち行くから」

美月は嬉しそうに笑った。

ようやく解放されると思い、白亜は席を立ち上がった。

「じゃあ、僕は校庭に――」

「は？」

しかし、笑顔が一転する。嫌な予感がした。

「え、これで終わりじゃ――」

「何言ってるの。こんだけならいちいち須田からあんたを奪うようなことはしないし」

どうやら短髪の男子は須田というらしい。

「五時限目って算数じゃない？」

「うん」

「実は宿題が出てて、解けない問題があってさあ」

「うん」

「手伝ってほしいのよね」

心配は杞憂に終わり、ほっと胸を撫で下ろした。

「それぐらいだったらいいよ」

「それぐらいって……どのぐらいなら駄目なのよ」

「あはは」

「まあいいわ。教科書とノート取ってくる」

美月が自身の机に戻っていった。

転校早々、やばそうなのに捕まってしまったのではないか——そう思うと重い溜息を吐かずにいられなかった。

その後、美月の宿題を手伝った。せいぜい一、二問程度かと思いきや、全体の五割以上の問題に手をつけていなかった。眩暈を覚えた。

第四話 白亜、友達を作る

五時限目が終わるなり、またもや女子が集まってきて各々が下校を申し出てきた。

「ごめん、陣野さんと約束してて」

嬉々とした雰囲気が一転し、女子は揃って互いを見合わせ乾いた笑いを浮かべた。

「そうなんだ、ごめんね」

「じゃあまた明日ね」

あつという間に女子は去っていった。

「あの子たちも好きねえ」

タイミングを見計らったように美月が声をかけてきた。

「ほら、行くわよ」

そう言うなり教室から出て行った。白亜は慌ててランドセルを背負い、ついていく。

晴天の下、多くの生徒に紛れながら校門を出て住宅街を進んでいく。

「早くしなさいよ。時間が無くなるわ」

ずんずんと歩いていく美月に急かされた。こういう場合、何かしら会話をしながら向かうものではないのかと疑問に思いつつも無言で従うしかなかった。

幾つかの道路を渡り、見慣れぬ住民と建物を横目にひたすら歩き続けた。次第に家々の数は減り、人気も少なくなってきた。

美月が足を止めた。

「ここよ」

眼前には石造りの階段が存在し、両側には濃緑の木々が茂っていた。小ぢんまりとしているものの、神社らしい光景だった。

「上って」

再び美月が歩き始めた。質問の時間すら与えられなかった。

清掃され見栄えの良い石段を一步一步踏み上がっていく。徐々に鳥居が見えてきた。

上り終え、紅が色あせた鳥居をくぐる。

「美月ちゃん？」

囁く様な声が聞こえた。目を向けると、竹箒を携えた巫女装束の少女がぽつんと立っていた。

「や、優希」

美月は片手を振り上げ、ざくばらんに挨拶を交わした。

「あれ、君って……」

きつちりと揃えられた前髪と眼鏡に既視感を覚えた。

「あ……」

少女は大きな瞳をぽちちりと開き、白亜を捉えていた。

「水瀬、君？」

はっと思い出した。少女は自分の隣に座っている、未だに会話もしておらず名前も確認していない女子だった。

白亜はどう声をかけるべきか悩んだ。

「あのさあ、まず自己紹介するのが筋ってもんじゃないの？」

美月は呆れたように目を細め、白亜を凝視した。

「そ、そうだね。僕は水瀬白亜。えーと、話すのは初めて……だね」
そわそわしながら紹介した。何故だか分からないが、胸の鼓動が早くなった。

間もなく少女はぎゅっと箒を握り締め、恥ずかしそうに口を開いた。

「神風優希、です」

ゆうき——一般的に男子に用いられる名前。可憐な姿とのギャップに愛らしさを感じずにいられなかった。

「でも、なんでこんなところに？」

優希は美月に問いかけた。

「決まってるじゃない。あんた、水瀬と話したかったんでしょ？だから連れてきたのよ」

誇らしげに胸を張る美月に対して、優希は頬をほんのりと染めて視線を彷徨わせた。

「べ、別に今じゃなくても、学校で話せるし……」

「無理ね。明日もきつと誰かしらに捕まるでしょうし。そうになったら絶対に声かけられないっしょ？」

優希は無言で俯いてしまった。

「つーわけで、ここなら外野もないしのんびり話せるから」

美月は優希の手を引き、賽銭箱の前に座らせた。

「ほら、あんたも」

きつと睨まれ、動かざるをえなかった。申し訳なさそうに優希の隣に腰を下ろした。

「よし、セッティング完了」

美月は満足そうに頬を緩め、振り返って石段へ歩き始めた。

「えっ！ ちょっと、美月ちゃん!？」

「じゃ、後は任せたー」

「そんなあ！」

美月が足を止める。

「水瀬」

「な、何」

「帰りは優希に案内してもらってね。んじゃ」

美月は再び歩き始め、あっという間に姿を消した。

そして、二人は無言で座り続けた。

境内は午後の陽気に包まれていた。緩やかな風は木々の影を優しく震わせ、繊細な音色を生み出した。

白亜は肺の空気をゆっくり吐き出し、吸い込んだ。自身の現実によって蝕まれた心が、徐々に浄化されていくようであった。むしろその現実すら消滅させてくれるのではないかと、思わずにいらなかった。

ずっとこのままでもいい。

そんな心地に包まれていた。

「あ、あのっ」

優希の声で一気に現実へ引き戻され、白亜は身を震わせた。

「な、何？」

「あの、ごめんなさい」

いきなりの謝罪。思い当たる事柄はなく、戸惑った。

「美月ちゃんに付き合わされて、私なんかのところに……」

白亜はゆっくりと首を横に振る。

「気にしないで。これから住む町のことを知っておきたかったし。それに」

一旦区切り、微笑を浮かべて優希をじっと見つめた。

「隣の席の女の子と、ちゃんとお話しておきたかったから」

優希のふっくらとした頬はすっかり紅潮し、瞳は大きく見開かれた。そして、顔を背けてしまった。

「あ、ありがとう……」

そう言って横目で白亜をちらりと見た。

「聞きたいことがあったら何でも聞いてよ」

答えられないこともあるけど、と心で付け足さねばならない状況にちくりと胸を痛めた。

「わ、私の方こそ何でも聞いていいよ」

少女の紅潮が収まり、顔を向けてくれた。たったそれだけのことなのに、白亜は嬉しくなった。

とは言いつつも、何を質問すべきか非常に悩んでしまい無言になった。優希も同様で、境内は静寂に包まれた。

「陣野さんとは友達なの？」

先に出たのは白亜だった。

「うん。幼稚園の頃からずっと」

「てことは、付き合い長いんだね」

「うん」

優希ははにかんだ。

「ちよつと不思議だな。陣野さんと神風さんって全く正反対に見えるけど」

「よく言われる。いじめられてるの？　とかつて」

互いにくすくすと笑い合った。

「美月ちゃんは誰にでもあんな感じだけど、本当は優しいんだよ。私って何やっても駄目だからみんなからかっってくるんだけど、美月ちゃんだけはいつも守ってくれた」

優希の言葉は信用できるものであった。気が弱そうな優希のためにわざわざ白亜との会話の場を用意するなど、並の付き合いでは有り得ないことだろう。

「いい友達だね」

「うん」

優希は満面の笑みを浮かべた。

「友達、か」

溜息混じりに呟いた。

「水瀬君にもいい友達っていた？」

「えっ」

一瞬しどろもどろになるも、すぐに落ち着いて口を開いた。

「僕、転校ばかりしてたからちゃんとした友達いないんだ」

嘘だった。転校など、これが初めてである。仲良くしていた友達だっただけでなくさんいた。しかし、もう会うことはできなかった。会ったとしても、気味悪がられるのは目に見えていた。

微笑しながら答えるも、優希の顔は徐々に曇っていった。もしやばれたのか思い、白亜は慌てた。

「あ、えっと、そんな顔しないで。もう慣れてるから」

苦し紛れに言葉を付け足した。しかし、優希に笑顔は戻らない。

彼女は視線を逸らし、何かに迷っている様子だった。

気まずい沈黙が続き、不安が押し寄せてくる。

「――じゃ駄目かな」

不安で麻痺した耳に、不完全な優希の声が聞こえてきた。

「え？」

「私が、水瀬君の友達になるのじゃ、駄目かな」

優希の声は震えていた。

「ううん、私だけじゃない。きっと、美月ちゃんだって友達になってくれる」

少女は必死な様で問いかけてきた。その瞳は白亜を捉えて離すことはなかった。

「……駄目かな」

喜びが心を満たしていくのを感じずにいらなかった。それは嘘がばれなかったことによるものではない。神風優希の優しさが与えてくれたものである。

「そんなことない！　すごく嬉しいよ！」

笑顔が自発的ではなく、本能的に表れた。すると、優希にも明るさが戻ってきた。

「ありがとう！」

心の底から感謝を述べる。

「……うん！」

優希は大きく頷いた。

その後、優希からいくつかの質問を受けた。白亜はどこから引越してきたのか、趣味は何であるか、勉強とスポーツのどちらが好きか、等々――昼間聞かれたことばかりだった。しかしあの時に比べてより多くの情報量を伝える意欲に満ちていた。もちろん、ある程度の嘘と隠蔽はあったが。

もちろん白亜からも質問を出した。

「ずっとこの町に住んでるの？」

「うん。生まれた時から」

「そうなんだあ。じゃあ町のこと色々知ってるの？」

「大体のことは知ってるよ。おいしいクレープ屋さんとか、可愛い

小物が売ってるお店とか、綺麗な景色が見える場所とか」

「へえー……。その、もし良かったら今度案内してもらいたいんだけど……いいかな？」

「うん、いいよ！ あと他にもね——」

気づいた頃には境内はほんのりと茜色に染まり始めていた。白亜は携帯電話を取り出し、時間を確認した。

「五時……もうこんな時間だ」

「あつという間だったね」

優希は寂しそうに言った。

「帰らなきゃ」

「うん。じゃあ、案内してあげる。と、その前に」

優希は小さな腰を上げた。

「私、着替えてくるね。さすがにこの服じゃ恥ずかしいから……ちよっと待っててね」

優希はふわりと巫女装束を舞わせて、小走りで駆けていった。その様を見て、紅と純白の衣装は優希のような女の子のために作られたのだと悟った。

「着替え……」

ぼそりと呟き、間もなく顔が火照った。木々を揺らす風は変わらずに柔らかかった。

十分と待たず、優希は戻ってきた。昼間の衣服を身につけていた。「お待たせ。じゃあ、行こう」

白亜は一つ返事とともに立ち上がった。

今朝、義母からメモをもらっていた。家から学校までの道順が記載されており、事細かに道中に存在する標識や店が明記されていた。よほどの方向音痴でない限り、迷うことはまずないであろう仕上がりのだった。

優希に地図を見せると、小さく何度も頷いた。

「ここからなら、商店街が近いね」

優希はちらりと白亜の顔を見た。

「ついてきて」

頷き返した。

優希の歩みは美月のそれとは異なり、ゆったりとしていた。おかげで慌てずについていくことができた。何より、その間会話に花を咲かせることができたのが嬉しかった。

間もなく商店街入り口にたどり着いた。帰りの学生や買い物に来た主婦でとても賑わっていた。

「ありがとう、神風さん」

「ううん、気にしないで」

優希はふるふると首を振った。

「じゃあ、また明日ね」

「うん」

優希は手を振りながら去っていった。

同じように手を振り返した。優希の姿が視界から消えるのを確認した後、方向転換し歩き出そうとした。

「あ……」

視界に見知った人間がおり、あちらも気づいたのか歩みを止めた。長い黒髪と端正な顔立ち、そして細身の眼鏡は今の白亜にとって畏怖の対象でしかなかった。紺のブレザーとスカート、黒のハイソックスを纏った姿は実に高校生らしく、小学生からすれば凛々しく見えた。しかし、今ではそれが恐怖を強める要因と化していた。

「――お姉ちゃん」

白亜は少女に向かって躊躇いがちに呟いた。

義姉である少女――綾は白亜に気をかけることもなく、無言で歩き始めた。その方向は、自宅への帰路だった。

一瞬悩むも、わずかに距離を置いて後をついていった。

綾の背中から「ついてくるな」と言わんばかりの威圧感が放たれていた。それでも、夕日が落ちかけている町中に留まるわけにはい

かずついていくしかなかった。

「――っ！」

背筋に冷水が伝うような感覚に襲われた。思わず後ろを振り向くも、そこには普通の人間が歩き回っている光景しかなかった。軽く頭を振り、再び歩き始めた。

「うーん、どうしようかしら」

夕食の支度をしている小百合が困ったように呟いた。テレビを観ていた白亜は、気になって台所を覗いた。

「人参買い忘れちゃったのよ」

白亜に気づいた小百合が問題を教えてくれた。

ここは自分が買い物に行くのを申し出るべきか、躊躇した。そうしているうちに、小百合は台所を出て行った。

間もなく綾を連れ、降りてきた。買い物は綾に頼んだのだろう。

「あ、そうだ。白亜君連れて行きなさい」

「え、何で」

めんどくさいのか不機嫌な綾の顔が、より色濃いものへと移り変わった。

「普段使ってるスーパーの場所を教えてあげるのよ。そうすれば、今度からは白亜君に頼めるしね」

綾は小百合の言葉に耳を貸していない様子で、靴を履き始めた。

「そういうわけだから白亜君、よろしくね」

笑顔に反対できるはずもなく、心を痛めながら従うしかなかった。

「あ、携帯忘れちゃ駄目よ」

小百合はリビングに置かれていた白亜の携帯電話を取ってきて、手渡した。青いストレート型のそれをポケットに入れ、既に玄関から出て行った綾を追いかけた。

住宅街はすっかり薄暗くなっており、人影も少なくなっていた。
「あっ」

思わずつまづきそうになった。足元を見ると、スニーカーの紐がほどけていた。

綾もその様子に気づいたのか、足を止めちらりと白垂を見た。

「ごめんなさい、紐がほどけちゃって」

慌てて結び直そうとするも、焦燥感と綾の刺さるような視線がそれを阻害する。

「先行ってる。商店街入り口で待ってるから、早く来なさい」

吐き捨てるように言い残し、綾は曲がり角で姿を消した。

必死に指を動かすも、普段さりげなくこなせる蝶結びが歪な形となってしまう。泣きそうになった。

ようやく納得のいく形となり立ち上がった時、背後に気配を感じた。そして振り向く間もなく後頭部に重い衝撃が走り、闇の中へ沈んでいった。

第五話 白亜、変身する

ごく普通に睡眠から目覚めるように、意識が戻ってきた。強打されたことをすぐに思い出し頭を押さえるも、痛みは皆無だった。

先ほどの路地とは全く異なる場所に横たわっていた。裸電球でぼんやりと照らされるそこは、半壊した家具やダンボール等が散らかる狭い部屋であった。

「――どうすんだよ」

隣の部屋から下衆染みた男の声が聞こえる。息を潜め、耳を澄ませた。

「あのクソエイリアン、ホントに使えねえな」

「顔の認識もろくにできねえわ加減知らずに殺すわで最悪だよな。で、ようやく連れて来たかと思いきや男のガキだもんな」

「女つつってんのによお」

状況を理解することは難しかった。しかしエイリアン絡みであることは小学生の白亜でも容易に想像でき、恐怖で体が震える。

「それにしてもどうすんだよ、あの死体。早くどうにかしないとサツかLGOに目つけられるぞ」

「つーか、もう無理じゃね？ これで二人目だし」

二人の男が溜息交じりに呟いた。これが殺人事件であるのは明白であり、より震えが強くなった。

「あーあー、お前が変な儲け話に乗らなきゃ良かったのにな」

「おめえだってノリノリだっただろ。借金まみれの屑が」

「んだとお？ お前に言われたかねえよ」

「俺はお前とは違う。愛のためにお金を使ってるからな」

「はいはい」

「とりあえず暗いうちに死体なんとかしようぜ。まだなんとかなるかしんねーし」

「海にでも投げ込んだくか？」

「あーそれいいねー」

二人は下品な声でひっそりと盛り上がっていた。

白亜は懸命に歯を食いしばり、脱出方法を考える。しかしこの部屋には窓が無く、二人がいる隣の部屋と繋がっているだけである。絶望的だった。

硬い床に横たわっていたせいで、体に痛みを覚えた。姿勢をずらそうと動いた時何かにぶつかってしまった。それはバランス悪く積み上げられたダンボールの山であり、なす術も無く山は音を立てて崩壊した。

白亜はしまったと思い、身を強張らせた。

しかし、二人はなかなかやってこなかった。白亜は整わぬ呼吸をしながら、ただ部屋の入り口に目を向けるしかできなかった。

ようやく二人がやってきた。声の雰囲気と外見は見事に一致していた。しかし、なぜかその様は萎縮しているように見える。

「あ……」

白亜は間抜けに一言呟いてしまった。顎に力を入れても、歯がちかちと音を鳴らした。

不思議なことに、白亜を見る二人の目も恐怖の色に染まっていた。そして何よりも、彼らは腰が引けていた。

「な、なんなんだよ……」

「お、お、お前、な、なんで」

二人の声は震えていた。

白亜はこの光景が理解できなかった。この二人は白亜を誘拐した犯人に違いなかった。しかし、二人は白亜を見て怯えている。

「なんで、お前生きてるんだっ!」

顎鬚を生やした一人が叫びを上げた。

生きてる――顎鬚の言葉は白亜にしてみれば、意味の分からないものであった。まるで先ほどまで白亜が死んでいたかのような言い回しである。

「ゾ、ゾ、ゾンビじゃねーの、こいつ」

昨夜、自虐で用いた言葉が聞こえた。急に喉が渇き、唾液を飲む。
「ゾンビって……何!？」

搾り出すように叫び、尋ねた。

「しゃ、しゃべったあ」

「やべーよ、こいつ」

二人は白亜からじりじりと遠ざかる。

「こ、こいつ、脈なかったんだよなあ!？」

「なかった! なかったよ! こいつ、死んでたよ!」

「じゃあなんで生きてるんだよお!？」

狭い部屋に阿鼻叫喚が響き渡る。

生きている事は良い事である。にも関わらず、白亜の心は晴れずにどす黒い暗雲が立ち込めていた。

「バカ! こういう時はエイリアンだよ!」

「そ、そうだったな。いくらゾンビでもミンチにしちまえば平気だよな!」

顎鬚がポケットから携帯電話を取り出した。今ではすっかり一般に普及したタッチパネル型であった。

「頼むぜえ!」

顎鬚が幾度操作をすると、部屋の隅の布に包まれた物体から赤い光が漏れ出した。二人は急ぎ足で部屋から出て行った。

布がもぞもぞと蠢いた。そして、布が引き裂かれその肢体を表した。

「——っ!」

白亜は絶句し、目を見開いた。

エイリアン——地球に飛来した機械生命体の総称。彼らはあらゆる地球生物に類似した肉体を持っている。白亜の目の前に立つそれも例外ではない。

その姿を見たのは何年前だろうか。友人とともに森で昆虫採取に励んだのが最後かもしれない。一對の複眼で獲物を捉え、一對の鎌でそれを刈り取る緑色の昆虫——蠅螂を。

「あ、あ、あ」

呂律の回らぬ擬音を吐き出した。成人男性を遥かに上回る体躯を持つ蠅螂を目の前に、できることはそれだけだった。

「やっちまええ！」

隣の部屋から男の叫び声が聞こえた。蠅螂の複眼が赤く光った。裸電球に照らされ鈍く光る鎌が振り上げられる。白亜は必死の思いで後ずさった。

一筋の曲線が網膜に映し出された後、胸部に激痛が走る。衣服が裂かれ、白い肌が晒されていた。さらに、胸部の皮は一直線に斬り開かれ真紅の血液が溢れていた。

「くっ」

歯を食いしばりながら耐える。しかし、激痛は脳を確実に混乱させた。

幾重もの視線が白亜の体中に突き刺さり、その動きを封じ込める。もはや整えることすら許されない呼吸を行いながら、白亜は眼前の巨大蠅螂を睨む他なかった。

再び鎌が振り上げられた。後ずさろうとしたが、背中が壁に張り付いていた。体中に冷や汗が噴き出す。

すっと息を吸い込み、瞳を閉じて死を覚悟した。

P r o g r a m R e g e n e r a t e s t a r t u p .

瞼に英文字が浮かび上がる。そして、急激に肉体の熱が上がり始めるのを感じた。しかしそれは心地よい暖かさで、ただ身に任せた。理解できぬ英文字の羅列の中、全身に力がみなぎってくる。まるで人間と異なる何かに変貌していくような感覚に包まれる。

Set up complete.

Version 1.0 start.

体感時間にしてわずか五秒。瞼に浮かんだ数文字をきっかけに瞳を開く。

目前には、未だに蠅螂型のエイリアンが存在していた。しかし、何やら白亜を警戒している様子だった。

それ以前に、視界の乱れが気になった。見た事のない人型の絵、何を示しているのか分からないメーター、中心付近に浮かぶ円等々——白亜にしてみれば、ロボットゲームのコクピットを思わせる光景であった。

エイリアンは警戒を解いて、鎌を振り上げた。

その時、人型の絵が光っているのを確認した。腰部の細長い部位が赤く点滅しており、そこを示す矢印の先には「Laser Gun」と表記されていた。

Gun、すなわち銃であることを即座に理解し、白亜は左手を伸ばした。グリップと思わしき部位を握り締め、引き抜き正面に構えた。

白を基調とした、近未来的なデザインの拳銃が視界に映し出される。そしてそれを支える左腕部が異質な形状をしていることも確認したが、今は目の前のエイリアンを対処するのに頭が一杯で気にすることはできなかった。

鎌が頂点に達し、切断を開始せんと重力に従われる。躊躇することなく、銃のトリガーを力一杯引いた。

ブザー音が脳裏に響き渡ると同時に「Laser Gun」の表記が赤く染まり、下部に「Over Heat」の文字が現れた。理解できたのは、何か危険であるということだけだった。

左手の温度が急上昇し始める。

銃口から光が溢れ出し、全てを溶かす――

光は視界の大半を白に染め上げた。エイリアンも狭く息苦しい部屋も殺人事件も全てなかったことにするかのような激しいエネルギーだった。

左腕の痛みが徐々に強くなっていく。それは皮膚のみならず、骨にまで侵食してくるような耐え難いものであった。それでも、白亜は声一つ上げることができなかった。

光は花火のように一瞬にして消え去った。

眼前の光景は数秒前とは全く異なるものと化していた。

まず、裸電球が割れてしまったことで辺りは暗闇に包まれていた。次に、目の前には相変わらずエイリアンが立っていた。しかし、上半身はぼっかりと姿を消してしまい下半身のみが棒立ちしており、動き出す気配はなかった。

そして、視線の先には壁が存在していなかった。それは彼のいる建物のみならず、隣接している建物の壁にも巨大な円状の穴がぼっかりと空いていた。

何が起こったのか理解できないものの驚異は去ったので安堵しようとしたその時、銃から激しい火花と紫電が飛び散った。慌てて銃を投げ捨てる。

空中で小規模な爆発が起こった。部屋中が爆風と爆発音で満たされる。白亜は右腕でかざし、それを防いだ。

間もなく部屋は静まり返った。

ふらふらとした足取りで隣の部屋に入った。あの二人の姿はなか

った。まさか先ほどの銃で、と不安がよぎったものの今は自身の心配を最優先に考えるしかなかった。

「あれ」

外に出ようと足を踏み出した時、異様な音が聞こえた。それは金属が擦れるような音で、自身の足下から発せられた。未だに乱れた視界に、その様子を収めようと首を下ろした。

「なニコレっ……！」

どう見ても人間のものとは思えない二本の脚部が見えた。金属パイプや鉄骨を無造作に組み合わせたような無機質かつ奇妙なデザインだった。

「これ、ボクノあシ……？」

足踏みを試みた。軋むような音を立て、鉄塊は足踏みを行った。

「あ、ア、あ」

思考が混乱を始め、同時に銃を構えた際に感じた左腕部の違和感が蘇った。

すぐさま両手を目の前に持ち上げた。

「――っ」

絶句するしかなかった。脚部に類似したような両腕がそこに存在していた。

幾重ものコードで構成された五指を動かす。蚊が鳴くような細かい機械音とともに、各々の指が滑らかに可動した。

「ナに、ナンナの、これ」

体が震え――なかった。歯がかちかちと鳴ることもなかった。そもそも、口の感覚がなかった。確かに声は出ているが、それは喉から出ているように感じられなかった。

「コエガ、ヘンだ」

自身の発する声はもはや人間のものとは思えなかった。出来の悪い機械音声そのものだった

叫びを上げたくなかったが、もう自身の醜い声を聞きたくないため必死に抑える。

大慌てで出口のノブを握りしめ扉を開け放とうとした時、外の喧騒をすぐに感知して静止した。あれだけの眩い光と爆発音が確認されれば、人が集まるのは当然であった。もしこのまま出て行けば、阿鼻叫喚が響き渡るに違いない。

「どうシよウ」

部屋中を見渡すも、乱雑な光景が拡がるのみだった。

「ハヤク、はやくナントカシナイと」

ひたすら投棄物を乱暴に退かした。子供には動かせないほど重い物体も軽々と動かせることに、恐怖を覚える余裕はなかった。

やがて、すっかり色あせた扉が姿を表した。すぐにノブを回そうとするも、びくともしなかった。

「んっ」

力を込めると、がりつと音を立ててノブが回った。続いて、剥がすように扉を開けた。

第六話 白亜、拒絶される

不気味な漆黒が染み付いた路地裏が続いている。人気は皆無だった。

白亜は身を低くし、怯えながら駆けていった。

ここがどこなのか分からず行き先すら定まらなかった。とにかく人に見つかってはいけないと思い、路地裏から路地裏へと移っていくことだけを実行していった。

自身の足が異様に速くなっていることに気づいた。今まで感じたことがない景色の変わり様を楽しむ余裕など当然なかった。

人の気配を感じる度、心臓が――いや、心臓のようなものが跳ね上がりそうになった。そして、早く夢から覚めてほしいと切に願った。これを繰り返し、白亜の精神は激しく磨耗した。

沼地を歩くような重い足取りで暗闇を進んでいた。走ることはもう諦めていた。そもそも何故自分はこんなことをしているのか、分からなくなっていた。

「待ちなさい」

声が聞こえたが、もはや反応する気力はなかった。このまま通報されてもよいとさえ感じていた。

「待ちなさいよ!」

聞き覚えのある少女の声は強気だが、かすかに震えていた。

動きを止め、振り返った。弱い光が目突き刺さり、一瞬視界が眩む。

「ア……」

光に慣れると、一人の少女を確認した。彼女は携帯電話の液晶画面をこちらにかざしている。

「オねエ、ちゃん」

目の前の義姉を呼んだ。返事はなかった。

「おねえちゃん」

再び声を上げる。やはり返事はない。

「オねエ——」

「うるさい」

罵声が飛んできた。驚きで尻餅をついた。

「化物の分際で私を呼ばないで」

まず「どうして」と疑問が浮かぶも、すぐに今の自身の姿を思い出した。

「ボクダよ、ハクアだヨ」

そして、解決しようと試みた。

「……知ってるわ」

ひどく冷たい声が返ってきた。そして、綾はタッチパネル型の携帯電話を操作した後再びこちらに向けた。液晶画面には地図が映し出されており、人型のアイコンが点滅していた。

「あなたの位置情報よ」

昔、携帯電話を買ってもらった時の説明を思い出す。白亜の電話は位置情報サービスに対応しており、家族の電話から位置を確認できるようになっていた。

「その気持ち悪い体から反応が出てるのよ」

はっと思いポケット部分に手を伸ばすが、指に感じるの無機質な金属性の肌だった。携帯電話を体に取り込んでしまったのかと思うと、恐怖を感じた。

「やっぱりあなたは化物だったのね」

光に照らされた能面のような顔が白亜を見下した。

「そもそも死んだ人間が生き返るなんて時点でおかしいとは思ってたのよ。人の皮をかぶってたなんてね」

「ち、チがウよ」

ぶんぶんと首を横に振った。静寂の中響き渡る駆動音は白亜の言葉から説得力をこっそりと削り取った。

「しうな力ったヨ、コンナノっ。コンナ、へんナの」

白亜はじりじりと後ずさった。

「……あなた、自分の顔見たことある？」

否定を示すために首を小刻みに動かした。

「なら、見せてやるわ」

少女は躊躇なく白亜に近づいてきた。携帯電話が操作され、間もなく白亜に向かってフラッシュが炊かれた。そして、押し付けるように液晶画面を見せ付けた。

「——っ」

正真正銘の化物が映し出されていた。理科室の人体模型をより機械的にしたような顔——これが自分であるなど、信じたくなかった。

「チガウ、ちガウ」

必死に訴える。少女の表情は変化を見せない。

「目的は何」

「そんなノナイヨッ」

「正直に言いなさい。LGOの差し金なんでしょう？」

耳を、いや聴覚を疑った。何故、ここでLGOの名前が出てくるのか。

「どうせお父さんから頼まれてやってきたんでしょう？ お兄ちゃんを殺すために」

何一つ意味が分からなかった。そもそも「お兄ちゃん」とは——

「なんで家族ごっこなんて回りくどいやり方するの。お父さんに頼まれたの？ そんなの、こっちは望んでないのよ」

語気が徐々に激しくなり、言葉数も多くなってきた。

「チョッとマッテ、なニをイッテるの——」

「そんな姿見せてる癖に、まだしらを切るつもり？ いい加減にしなさいよ！」

苦痛交じりの怒鳴り声が空気を震わせた。自身の異形化で混乱した頭の中は、綾の叫びでさらにかき混ぜられた。

「ア——」

視界にノイズが走る。同時に、意識が遠のく。

「ボ、くハーガ、う」

自身の発言が認識できない。綾の姿も言葉も同様だった。間もなく、全身は闇に溶けていった。

目覚めは最高で、見覚えのある天井、大気、匂いがそこにあった。視界の乱れはすっかり消え去っていた。

「病院……？」

すぐに半身を起こす。機械音はしなかった。

「つつ」

全身に痛みが走り、再び枕に頭を埋めた。わずかにデジャブを感じた。

「夢……」

ぼそつと願望を口に出す。

机に顔を向けると、デジタル時計が置いてあった。日付は意識が途切れた翌日を示しており、時間も正午を示している。

ゆっくりと掌をかざす。人間の手が確かに存在していた。五指も音なく動いた。

その指で頬を撫でる。生きた肌の感触を覚え、思わず安堵の息を吐いてしまった。

「夢、だよね」

きつと買い物に行く途中体調が悪くなって倒れたに違いない、そしてここに運ばれたんだと思うことにした。

微笑を浮かべて、枕元のナースコールで看護師を呼び出した。あの時と異なり、自分の声は非常に落ち着いていると思った。

間もなくドアがノックされた。返事をする、上田が入室してきた。

「体調はどう？」

上田の声は普通だった。しかし、表情はわずかに曇っていた。

「全身が痛いですけど、大丈夫です」

白亜は明るくはきはきと答えた。

「でも、変な夢を見ました。自分が化物になってしまいうんです。すごく気持ち悪くて……怖かったです」

上田は真摯な様子で耳を傾けていた。

「水瀬君」

「はい」

「その、夢の中で誘拐されなかった？」

二人の男の顔が鮮明に浮かび上がった。

「されました。悪そうな顔してて、エイリアンと一緒にでした。でも、なんで分かったんですか」

上田は鋭い眼差しで白亜を見つめていた。緊張感で部屋の空気は冷え始めた。

「もしかして、その人たちってこんな顔じゃなかった？」

部屋の椅子に新聞が載せられていた。上田はそれを取り、白亜に広げて見せた。

「え——」

全身に冷や汗が噴き出した。

記事は小さめだった。見出しは「中学生殺害 男性二人を逮捕」と書かれており、男たちの写真が貼られていた。先ほど浮かんだ二人の男と瓜二つだった。

「合ってる？」

上田の声がわずかに柔らかくなった。

「でも、でも夢じゃ」

うろたえる白亜に対して、上田は変わらぬ様子だった。

「水瀬君」

「は、はい」

「今から真実を伝えるわ」

心臓の鼓動が早くなった。

「真実って、何ですか」

「言葉通りよ」

上田は同情するように瞳を閉じた。

「あなたにはごく普通の小学生として生きてほしかった。でも、あなたのお姉さんはそれを許さないでしょう」

「おねえ——」

体の震えが止まらなくなった。

「だから、今私が伝えるわ。これは私の責任でもあるから」

上田は携帯電話を取り出し、操作をした。そして逡巡するような表情を見せて動きを止めた。

「恨むなら私を恨んで。お姉さんを恨んでは、いけない」

液晶画面が向けられた。

「ひっ——」

その写真を見た瞬間、全身が凍りついて呼吸が止まるような錯覚を覚える。そこに写る怪物の視線に捕縛された。

「あなたが見ていたのは夢じゃない。現実よ。そして——」

言わないでと叫びたかったが、喉に物が詰まったような感覚に襲われ不可能だった。

「これは、あなたよ」

真実は告げられた——

第七話 白亜、畏怖する

怯えて身を隠すように布団にくるまりながら、机の時計を見る。日付が変わって間もなかった。

病室内は音も景色も黒く塗りつぶされていた。

「……うっ、うっ」

嗚咽が漏れる。気力は底をついていた。

「どうしてっ、どうしてこんな目に会わなくちゃいけないの……」何十回と漏らした切実な疑問。暗闇は答えは教えてくれなかった。今の季節は、真夜中とはいえ冷え込みとはほど遠い気温だった。しかし、白亜は芯から凍りつくような寒さを覚え、どんなに布団で外気を凌いでも決して温もりを感じることはなかった。

時折脳裏に綾の蔑む様と怪物と化した自身の姿がフラッシュバックし、その度に奇声を発したい衝動に駆られた。それでも目をぎゅっと瞑り、必死に歯を食いしばって耐え続けた。

真実を知らされて一人きりになって以降、白亜はじりじりと恐怖に押し潰されていた。

微弱な軋む音が鼓膜に響く。

「ひいっ」

跳ね上がるように震え上がってしまった。慌てて部屋中を見渡す。しかし、部屋の暗闇と自身の混乱で視覚が正常に機能しなかった。

「……まだ起きていたの」

落ち着きのある女性の声が聞こえた。聞こえる方向に視線を向けると、確かに人の形をした何かが見えた。

「電気をつけても、平気かしら」

「は、はいっ」

女性の問いに、白亜は気の抜けた情けない一言で肯定した。

ぱちりという音の後、黒は一瞬にして白に変化した。人の形をした何かは人間そのものであり、上田でもあった。

「その様子では、眠れないみたいね」

上田がゆったりとした足取りで近づいてきた。白亜は相変わらず全身をふとんで隠し、隙間から睨むようにじっと上田を見つめた。

「顔を、見せて」

まるで赤子をあやすような口調だった。

数分もの間、白亜は躊躇し続けた。それでも上田は怒ることなく優しく白亜を見守っていた。

踏ん切りがついて、白亜はもぞもぞと頭を出した。

「たくさん泣いてしまったみたいね。目が赤いわ。それに、唇もかさかさ」

上田は苦笑した。

「せっかくの綺麗な顔が台無しよ」

「きれ、い？」

「ええ。かつこいいとも言わね。さぞかし女の子に人気なんですよね」

昨日の学校での出来事を思い出した。しかし、どう考えてもあれは物珍しさから注目を集めたに過ぎないと思わざるを得なかった。

「……でも、僕は化物」

「数時間前は、でしょう。少なくとも今は人間よ」

上田は冷蔵庫からペットボトルを取り出し、白亜に差し出した。

「飲みなさい。でも、少しずつね」

おずおずと受け取る。染み込むようなひんやりとした感触が心地良かった。ペットボトルには半透明の液体が入っている。

「これ、なんですか」

「経口補水液。病人用のスポーツドリンクって言えば分かりやすいのかしらね」

なめるように液を口に含んだ。確かに薄いスポーツドリンクのような味がした。

「そのまま飲みながらでもいいから、聞いてちょうだい」

無言で頷いた。

「あなたが何故あの様な姿になってしまったのか、私にも分かりかねるわ。おそらくリジェネレートによるものだけど、開発中このような症状は確認されなかった」

上田は目を瞑り、考え込むように話し始めた。

「何がきっかけとなって変化し、戻るか。少なくとも、それは知っておくべきだと思うわ」

数秒の沈黙。

「水瀬君。あのような姿になってしまったのは、いつだったか思い出せる？ その、思い出したくないでしょうけど、それが分かればこれから辛い思いをせずに済むと思うの。だから、無理をしない程度に……」

怪物に変貌した時——必死に思い出す。

まず、倉庫のような場所で目覚めた時。しかし、あの時は確かに人の体だった。耳もあったし、歯軋りもした。

次に、二人の男がやってきた時。彼らは白亜をゾンビと言った。

つまり、皮肉にも人間の形であった事を証明していた。

そして、蠅螂型のエイリアンに襲われた時。鎌を振り上げられ、今まさに死を迎えようとしていた瞬間——確信した。

「……っ思い出しました」

白亜はぼつりぼつりと状況を呟き始めた。説明はひどく断片的で、日本語として成り立っていなかった。それでも、上田は終始真摯な態度で耳を傾けた。

説明を終えると、虚脱感に包まれた。

「苦しかったでしょう。でも、ありがとう」

上田は優しく微笑みかけた後、考え込む。そして五分と経たずに、それをやめた。

「状況は理解したわ。これは憶測でしかないのだけど、あなたが変化したのは生存本能が働いた結果だと思うの」

「生存？」

「生きたいって気持ちよ。ただ、変化したのはまだ一回。偶然の可

能性も否定できない」

「偶然……」

「でも、元に戻ったきっかけについては情報が足りないわ。お姉さんの連絡で駆けつけた時には、あなたは人間の姿だったから」

「え」

思わず驚きの声を上げた。

「お姉ちゃんが僕を？」

「ええ。ひどく不機嫌だったけどね。私の顔を見るなり、あの写真を見せつけて抗議してきたわ」

「どうしてっ」

疑問が浮かび、一言呟く。

「化物の僕をどうして助けてくれたんだろう」

「それは、私には答えられないわね。退院してから、お姉さんに聞いてみなさい」

「お姉ちゃんに……」

ずんと気分が重くなった。

「あまり気乗りしないみたいね」

どうやら顔にも出ていたらしい。

「でも、ちゃんと話し合ってほしいの。この事、そしてこれからの事も」

「ん……」

肯定とも否定とも取れぬ曖昧な返事を返した。

「お姉さんのこと、嫌い？」

「嫌い、っていうよりも怖い。怖いから結局嫌いになっちゃう。本当は嫌いになんてなりたくない」

「なら、なおさら話し合わなきゃ。これまで、と言ってもまだ一日だけど面と向かって話したことはある？」

「ない」

「人間っていうのはね、言葉を使って自分の気持ちを伝えるの。仲良くなればその必要性は少なくなるのだけど、そこまでたどり着く

には言葉は不可欠なものなのよ。人間に超能力は無いから」

「でも、怖い」

「その怖いっていう気持ちも伝えるのよ。もしかするとお姉さんは怒るかもしれないけど、その後どうして怖いと思われているのか考えてくれるはずよ」

「でも、もうお姉ちゃんは僕を化物としか見てくれないよ」

涙腺が緩み、口元がむずむずし始める。

「協力するわ」

上田はそよ風のように白亜の髪を撫でた。

「あなたが自分を制御できるようになれば、もうあんな姿にならなくて済む。そうすれば、お姉さんもあなたを理解してくれる。そのための協力は惜しまないわ」

繊細な指によって、昂った気持ちが治まっていく。

「本当は、あなたは御両親に撫でてもらわなくてはいけないの。でも、今は赤の他人である私で許してほしい」

上田はとても寂しそうに微笑んでいた。

「懸命に生きて。それが、あなたの御両親の願いだから」

反論する言葉は見つからなかった。ただこくと頷いた。

翌朝。目覚めはまずまずだった。

一日かけて様々な検査を受けさせられた。その間綾のことばかり考えていた。

日が暮れると鼓動が早くなった。果たして綾にどうやって話しかければよいのか、悩み続けた。

時刻は21時を回った頃、部屋にノック音が響いて上田が入ってきた。その顔には焦燥感が漂っていた。

「ごめんなさい、こんな時間に」

「どうしました？」

「君のお姉さん、綾さんが帰ってないそうよ」

義姉の名前を聞き、心臓がわずかに跳ね上がった。

「ここには来てないわよね？」

「は、はい」

「そうよね……。面会記録がないけど、もしかしたらと思ったのよ」
「でもお姉ちゃんはどう高校生だし、夜友達と遊んだりするんじゃない」
「君のお姉さんがそんなことするような娘に見える？ 仮に遊ぶにしても、親に連絡の一つは寄越すでしょう」

上田の言う通りだった。綾はとても真面目そうに見えるし、冷たい口調にも知的さを感じた。

「それにね、君が思っているほど高校生は大人じゃないのよ。まだ彼らは脱皮しようともがいているさなぎなの」

すんなりとは理解できない言葉だった。思わず眉に皺を寄せてしまった。

「ごめんなさい、脱線してしまったわね。ところで、お姉さんが何か気になるような事を言ったりしてなかった？」

「気になる、ですか」

「ええ、どんな些細なことでもいいの。分からなければ分からないでも平気よ」

瞼を閉じる。記憶は、怪物に変貌した時へと遡った。心を締め付けられるが、必死に耐えた。

暗闇の中響き渡る綾の声が鮮明に蘇る――

『LGOの差し金なんでしょう？』

何故綾はLGOの名前を出したのか。それも気になるが、それ以上気になる言葉があったはず――

『お兄ちゃんを殺すために』

あの時から引っかかっていた疑問をようやく思い出した。お兄ちゃんとは、誰なのか――！

「あの、質問いいですか」

「いいわよ」

「その、お姉ちゃんにお兄ちゃんっていますか？」

「えっ!？」

上田の目が見開かれ、白亜を確実に捉えた。

「君、どこでそれを」

「僕がまだ化物だった時、聞かれたんです。お兄ちゃんを殺すんでしょう、って」

「っ――」

上田が急に黙り込んだ。どう見ても何かを知っている様子だった。

「何か関係してるんですか」

返事はない。

「教えてください」

上田は沈痛な面持ちで、目を背け黙っていた。白亜はじつと返事を待った。

「……明日、御両親が迎えに来るわよね」

「はい」

「お二人が詳しいことを知っているわ。私から今のことを伝えておきます。聞けば、教えてくれるはずよ」

何故上田はこんなにも悲しい顔をするのか、理解できなかった。

第八話 白亜、水瀬家の事情を知る

目覚めはどうにもすっきりしなかった。

小百合と総司がやってきた。二人とも険しい表情をしていた。このような状態であるのは、綾の事だけが原因ではないとすぐに理解できた。

「おはよう、白亜君」

総司の声は顔つき同様、とても穏やかだった。初対面とはいえ、実父と似たような雰囲気を感じ取った。

「綾は、まだ帰らないわ」

小百合が沈んだ声で教えてくれた。

退院する支度が済み、白亜は意を決した。

「あの」

ようやくといった様子で、二人は同時に白亜を見た。

「お姉ちゃんのお兄さんについて、教えてください」

二人は顔を見合わせる。間もなく総司が軽く頷いた。

「白亜君は、『オデュッセウス』を知っているかな」

オデュッセウス——とても聞きなれた言葉が出てきた。

「はい。四年前、悪いエイリアンをたくさん倒したヒーローですね」

エイリアンによる傷害事件が今以上に多発していた時期があった。そのほとんどを解決に導いたのがA2『オデュッセウス』である。

「ああ、そうだ。彼はヒーローだったよ」

着用者については何一つ明らかにされていなかったものの、勇ましいフォルムだったため多くの者は男性と思いこんでいた。白亜もその一人である。なので、総司の言葉に疑問を抱くことはなかった。「オデュッセウスは、好きかい？」

「はい。事件現場を生放送で中継してた時がありましたよね。あの

時のすごい動きは今でも忘れられません」

脳裏に映像が再生される。流線で構成された白の装甲に身を包み、地面を滑るように走って攻撃をかわしてレーザー銃でエイリアンを撃ち抜き――そして、翼を思わせるブースターで宙を舞い光の剣で切り刻む。その華麗な機動は老若男女を虜にし、彼を『ヒーロー』にする決め手となった。

「そうだな。確かに彼はすごかったよ」

総司は懐かしむように言った。

「白亜君は、彼の正体を知っているかい」

「……分かりません」

マスコミの持論、都市伝説、自称関係者の暴露――多くの推測が飛び交う内にオデュッセウスは表舞台に姿を見せなくなり、誰もが過去として追いやった。故に、その正体はうやむやになった。

「彼の正体は、私たちの息子なんだ」

「え」

総司の突然の告白に、白亜は間拔けな声を上げるしかなかった。

「つまり、綾のお兄さんだ」

当然信じられなかった。

「じょ、冗談、ですよね……」

「そう思われても仕方ないだろう。いきなり信じるというのは無理な話だ」

総司の顔はとても嘘を吐いているように見えない。それに、この場で嘘を吐く必要性が感じられなかった。

「だから、これから話す事は信じてくれなくても構わない。もしかすると、嫌でも信じることになるかもしれないが――」

総司は一旦言葉を切った。たった数分話ただけで、彼の顔はすっかり疲弊していた。言葉を交わしていない小百合も同様だった。

「大丈夫、ですか」

「あ、ああ。平気だよ。そうだな、話さなければいけないな。白亜君が水瀬家の人間である以上――」

総司の言葉は部屋に響く振動音で遮られた。それは机に置かれた白亜の携帯電話から発せられていた。

「あ、ごめんなさい」

誰からだろうと思ひ電話を掴んだ時、はっとした。アドレスを知る者は水瀬家の人間と上田のみである。義父母は目の前におり、上田も病院内にいたのでわざわざメールを送る必要性がない。ということ――

鼓動が高まり、急いでメールボックスを開く。差出人に「水瀬綾」と書かれたメールを一件受信していた。

「お姉ちゃん、だ……!」

「えっ――」

両親は一斉に声を上げた。

件名は『水瀬 白亜へ』。そして、本文には――

『下記の場所に水瀬綾はいる。必ず一人で来い。時間は指定しない。しかし、早く来なければ人質の体力が持たないことは承知しておけ。待っているぞ、リジエネライター』

「綾は何て？」

白亜は躊躇したが、とても隠しきれない状況ではないと判断した。無言でメールを見せる。

「綾……!」

小百合は口元を押さえ、驚愕していた。

「蓮、やはりお前の仕業なのか……」

対して総司は目を細め、ただじっとメールを凝視していた。

「あの、今、蓮って」

「……ああ。おそらく蓮の仕業だろう。あの子は、私たちを憎んでいるからね」

「憎んで……？」

話は何一つ読めない。

「確かにオデュッセウスは——蓮は大衆の前から姿を消した。だが、まだどこかで生きているんだ。私たち、そしてLGOに復讐するために」

「復讐……」

「もちろん綾の事も憎んでいるに違いない。だからこうして誘拐したのだろう。綾を、そして私たち両親の心を傷めるために」

総司は苦痛で顔を歪ませて、溜息を吐いた。

「私たちはどうなるうとも構わない。恨まれて当然の事をしたのだから。だが、綾は、綾だけは無事でいてほしい」

輪の外にいる白亜は何も返すことはできなかった。

「しかし、何故白亜君一人なんだ。私たちではなく」

「……もしかして、僕のリジエネレイトが何か関係してるんですうか。この『リジエネレイト』って言葉が引かかるんです」

左胸に手を当てる。リジエネレイトは心臓付近に移植されたと聞いて以来、胸元が気になってしょうがなかった。

「リジエネレイトー。関係者が用いる、リジエネレイト移植者の呼称よ」

いつの間にか部屋の出入り口に立っていた上田が淡々と言った。

「ごめんなさい。立ち聞きしてしまったわ」

「いえ、構いません。蓮が絡む以上あなた方も知っておかなければなりませんし」

総司は申し訳なさそうな様子だった。

「どうしますか、先生。白亜君を危険に巻き込むわけにはいきません」

「そうですね。彼らがリジェネレイトをどうするつもりなのか分からぬ以上、下手に接触させては危険です。まずはとにかく、実働部隊に依頼しましょう。オデュッセウスが関わる以上、必ずエイリアンも絡んできます。戦闘は避けられないでしょう」

「しかし、下手に刺激すれば綾が……」

「分かっています。そうならないよう全力を尽くすのが実働部隊の役目です。彼らの働きぶりは、機関に所属するあなたなら十分理解していますよね」

「もちろん理解していますが――」

大人たちは論議を白熱させる。白亜は戸惑いながら口を開いた。
「あの」

「大丈夫だ。後は私たちに任せていれば。白亜君を危険な目に晒すような真似はしないし、綾だって無事に助ける。だからそれまで――」

「いえっ、違うんです」

「違う？」

総司は怪訝な表情を浮かべた。

「その、僕、一人でお姉ちゃんのところに行きます」

「なっ!？」

大人たちは全員目を見開き、白亜を捉えた。

「ダメだ! 犯人はエイリアンだ。無事では済まされない!」

「先ほども言ったけど、彼らはあなたをどのように扱うのか分からないの。下手に動けば、事態は悪化する可能性を秘めているわ」

反対は当然であると言わんばかりに、総司と上田は制止してきた。
「僕が行かないとお姉ちゃんがひどいことされるかもしれない。それに――」

本音を伝えたかった。しかし、それが程度の低い理由であることは明らかだった。不本意ながらも現実的な理由を選んだ。

「僕、怪我してもすぐ治るから」

「っ……あなた、それをどこで？」

「誘拐される時、頭を強く叩かれたんです。そして誘拐した人たちは、目覚めた僕をゾンビって言いました。脈が無いのになんで生きてるんだ、とかって……」

「白亜君っ……！」

言葉を紡ぐにつれ、悲しみが込みあがってくる。しかし、涙だけは絶対に流さないと心に決めた。

「だから、平気です」

「それでも危険な事には変わりないんだ。母さんから言っちゃってくれないか」

小百合は先ほどからずっと黙り込んでいた。しかし動揺はすっかり消え去っていた。

「私は――」

小百合は冷静な口調で話し始めた。

「白亜君の意見を尊重するわ」

「母さん？」

この場の誰もが驚きの色を見せていた。白亜もまさか賛成されるとは思っていなかった。

「これは決して白亜君が義理の息子だからとか、そういうことではないの。もちろん危険だってことぐらい分かってる。でも、行かせてあげたいの」

「何故だ」

「昔のこと覚えてる？ 綾が、エイリアンと戦ってる蓮のところに行きたいってお願いしてきたこと」

「あ、ああ」

「私たちは揃って反対したわよね。あの子、すごく泣いてたのに。あの時はそれが当然だと思ってたわ」

「それはそうだろう。子を危険な目に会わせる親がどこにいる」

「でも、今思えばあの時綾を行かせてあげれば蓮があのような事に

ならず済んだと思うのよ。普段わがままなんて言わない綾が泣いてまでお願いしてくるなんて、よほど大切な用事があったに違いないわ。今となっては、それが何であったかを聞くことすら叶わないけど」

「母さん……」

場の熱が徐々に冷めていく。

「白亜君。いくら怪我がすぐ治るからと言っても、怪我した時は痛いでしょう？」

事実だった。頭部を強打された時の激しい痛みは鮮明に覚えている。今はもう痛みも後遺症もない。しかし、もう二度とあのような目に会うのは避けたかった。

「は、はい……」

「きつとエイリアンは白亜君にも容赦はしないと思うわ。なのに、あなたは一人で行くと言い出した。怪我がすぐ治るからって理由だけで行くなんてお母さんには信じられないのよ」

小百合はまるで超能力でも使ったかのように、白亜の心を覗き晒した。

「教えて。本当の、理由を」

もう小百合に隠し事は通用しない。諦めて話すしかなかった。

「……馬鹿にしないですか？」

「しないわ」

小百合は優しく微笑みかけた。過去、実母も同じように微笑みかけてくれたのを思い出した。小百合のそれから、ほぼ同じものを感じ取った。

「お姉ちゃんと、仲直りしたいんです」

「綾と？」

白亜はこくんと頷いた。

「お姉ちゃんと、面と向かって話し合っていない。だから、僕はお姉ちゃんを怖い人だと思ってるし、お姉ちゃんも僕を化物としか見てくれない」

「うん」

小百合は真摯な様子で話を聞いてくれていた。

「もし僕が行かないせいでお姉ちゃんに何かあったら、もう二度と仲直りできなくなっちゃう。だから、すごく痛いことされるって分かっても行きたい。それで、仲直りできるなら、我慢する」

白亜は心の内を全て吐き出した。そして、ただじっと大人たちの返事を待った。

実に長い五分だった。最初に口を開いたのは上田だった。

「あなたの決心、確かに受け取ったわ。元はといえば、仲直りを提案した私ですものね」

上田の微笑みを見て、思わず頬が綻んだ。

「しかし、先生。相手の目的はリジェネレートかもしれないと――」

「ええ。しかし、彼を私たちが全力で守ればいいだけの話ですよ」

「それはそうですか……」

一方、総司はどうにも煮え切らない様子だった。

「あなた……」

「う、うむ……そうだな、分かった」

小百合に促され、ようやく総司も納得した。

「では、早速私からLGOに掛け合います。準備が出来次第、連絡しますのしばらくお待ちください」

上田は両親に会釈した後、部屋を出ていこうとした。

「先生！」

白亜は呼び止めた。

「どうしたの」

上田が振り向いたのを確認した後白亜は立ち上がり、きつちりと腰を曲げ頭を下げた。

「ありがとうございます！」

はきはきとした声で、心から感謝を述べた。

「どういたしまして」

微笑混じりの穏やかな声が聞こえた。頭を上げると、上田が目が

合った。彼女は軽く頷き、部屋を後にした。

第九話 白亜、上級エイリアンと対峙する

白亜が住む町より数キロ離れた場所に、人気の少ない地域が存在する。専ら資材置き場として利用されているが、一部業者の出入りが確認されていない敷地も存在していた。メールに記された地図は、その一つである倉庫を示していた。

倉庫から徒歩十分ほど離れた駐車場に、一台の装甲車が停まっている。多くの攻撃を容易く受け止めるであろう堅牢な装甲にはエンブレムが描かれていた。地球をバックに『LGO』というロゴが書かれ、さらにその下に小さく『Life Guard Organization』と補足されたそれは、装甲車がLGO所属であることを意味していた。

さらに、駐車場にはA2を着用したLGO実働部隊の隊員たちがせわしなく動き回っている。

A2――『Anti Alien』の略称であり、対エイリアン用パワードスーツは総じてこの名で呼ばれている。現在LGOで正式採用されているA2は『バニラ』であった。完成度が高く、今後のA2開発において基礎となることを約束づけられ命名されたものの、漆黒の装甲と威圧的なガスマスクにはあまりにも不釣り合いな名前であった。

つまり、今この場には『バニラ』が多く存在していることになる。端から見れば、実に不気味な光景であった。

「隊長。一般人の避難、完了しました」

背筋をしゃんと伸ばしたショートヘアの女性が、初老の男にきびきびと報告した。二人も例外なく『バニラ』を着用しているが、ガスマスクだけは外している。

「うむ、ご苦労だった。三浦隊員」

歳を重ね、深みの増した低い声で三浦に労いの言葉をかける。

「では、予定通り16時00分に作戦を開始する」

「はっ」

三浦は右手を掲げ、敬礼した。

「……うーむ」

隊長は考え込むような声を上げた。

「何か、悩み事でしょうか」

三浦は強い眼力のまま尋ねた。

「どうにも慣れない」

「子供の護衛……ですか。気持ちはよく分かります。本来子供はこんな場所に来てはいけません。しかし、状況が状況です」

「いや、それもあるんだが……」

隊長は齒に物が挟まったような顔をしていた。

「他に何か？」

「率直に言って、お前の態度だ」

それを聞いた三浦は硬直した全身を緩ませ、破顔した。

「ですよねえ」

「そんな態度を見たのは、お前がここに来て一週間だけだからな」
「いや、だって子供の目の前でだらしないところは見せられないじゃないですか」

三浦は隊長にそっと耳打ちした。なぜなら、二人の会話を遠目に眺める人間がいたからである。それは作戦の要となる少年、水瀬白亜だった。

「そもそも、LGOの問題児チームに子供のお守りを任せるのが間違いないですって」

「仕方ないだろう。他は皆出払っているのだから。私だってお前等のような愚図を表に出したくはない。私の品格が疑われるからな」

「さすが隊長。分かってらっしゃる」

三浦はへらへらと媚びへつらうように手を揉んだ。

「まあそれはともかくとしてですね」

再び三浦の顔は引き締まった。

「あの子がリジェネレーター、なんですね」

「機関が十年以上も秘密裏に研究した結果があれ、か」

「LGOでも普通に名前聞くようになったのってここ一年近くですよね」

「ああ。あの事件以降上の連中は必死に隠し続けてきたようだが、さすがに無理だったようだな」

隊長は無精髭を擦った。

「普通の子供と変わりませんね。一度死んでいるとは思えません」

「確かに。あんなものが世に知れたら、日本どころか世界が騒ぐだろう」

「そんな子供が鍵となる誘拐事件……一体なんなんですかね」

「とにかく私たちはあの子を守る。ただそれだけ考えればよい」

「ういっす」

三浦は軽々しく返事を返した。

上田から装甲車後部に入るよう促された。

後部には五人掛けの長椅子が向かい合うように設置されており、脇には自動小銃が納められていた。先ほどまで、白亜はここに座っていた。そして、初めて見る本物の銃器に対して憧れと恐怖の入り交じった感情を覚えた。

上田が衣服のような物を持って立っていた。

「これを着て頂戴」

差し出されたのは黒色のベストだった。抱えた途端、ずしりとした重みが伝わってきた。

「防弾ベストよ。重いけど、それを着ていれば並みの銃弾なら防げるはずだから」

確かに生地は分厚く、上田の説明も納得できた。

羽織るといふよりも着込むように着用した。

「それを使うことなく解決すれば良いのだけど」

上田は憂いの表情を見せた。

「だいじょぶですって、先生。あたしたちがいますから」

後ろから声が聞こえ振り返ると、漆黒の装甲を纏った女性が覗き込んでいた。

「あ、さっきの……」

先ほど初老の男性と話していた女性だった。栗色の髪は短く、活発そうな印象を受けた。顔は若く、大学生ぐらいに見える。

「どうもー、少年」

陽気に笑いながら手をひらひらと振ってきた。軽く会釈して返した。

「あたしは三浦絵里香。LGOの平隊員よ。要するに下っ端」

「よ、よろしくお願いします。僕は――」

「水瀬白亜君、だよ。なかなか素敵な名前じゃないの」

「素敵……ですか」

「うん。あまり聞かないけど、綺麗な響きだと思うよ」

照れを覚え、恐縮してしまう。

「あはは、可愛いねえ」

「三浦隊員。ここに来たのは、小学生をからかうためですか？」

上田はにこりと微笑んでいるが、口調は少しきつかった。

「まさか。作戦開始について報告に来ただけですって」

「聞きましょう」

「開始時刻は16時00分。予定通りです。準備を急いでください」
「分かりました」

LGOから借りたデジタルの腕時計を見る。16時まで後二十分だった。

「と言っても、後は心の準備だけなのだけれど」

「上手い事言いますねえ。さすがはお医者様」

「あまり関係ないと思うけど」

上田はすっかり呆れている。しかし、どこか楽しそうに見えた。

三浦が白亜に目を向ける。真剣な眼差しをしていた。

「水瀬白亜君」

「は、はい」

「君が抱えているものがどれほど重要なのか、あたしには分からない。でも、全力で君を守ることだけは約束するよ」

三浦絵里香はなんとも掴みにくい人間だと思った。同時に、少女のような澄んだ瞳の輝きは信頼に値すると思った。

そして、またもや無邪気な笑顔を見せる。

「んじゃ、お邪魔しましたー」

陽気な声を残して、三浦は出ていった。

「変なお姉さんでしょう？」

上田の問いにどう答えるべきか迷った。確かに変ではあるが、正直に答えて良いのかどうか――

「うん、その顔は『イエス』ってことね」

上田がからからと笑った。

「あの、えっと」

「いいのよ。あの子はそれが売りなんだから。でも腕は確かよ。だから、安心して背中を任せて平気だからね」

「は、はい」

何故上田は三浦を信用しているのか、確認したい気持ちはあった。しかし、今は綾を助けることだけ考えることにした。

「後二十分足らず。質問はある？」

「あの、もう一度作戦の確認をしてもいいですか」

「いいわよ」

上田の目に鋭い光が宿る。

「作戦開始後、あなたは一人で目的の倉庫に向かいます。でも、隊員が隠れながら後ろを護衛するから安心して歩いて頂戴。倉庫敷地内に入ったら、隊員は倉庫周辺を包囲するわ。後は、あなた次第よ」

「はい」

「発信機は持ってるわね」

左ポケットに手を入れ、手のひらほどのスイッチを取り出した。

「それを押せば、隊員は突撃を開始するわ。やり直しはきかないから使うタイミングは慎重にね」

「はい」

「そして重要なのは、あなたが敷地に入って一時間経ったら、発信の有無を言わず突撃を開始すること。もしそれであなたやお姉さんに何かあった場合……私たちも覚悟はできています」

「……はい」

何かとは何なのか、考えたくもなかった。上田の言う覚悟についても同様だった。

「綾さんを、お姉さんを絶対に助けましょう」

「はい！」

力一杯返事をした。

時刻は16時を回った。白亜は深呼吸をした後、倉庫に向かって前進し始めた。

周辺はしんと静まり返っていた。春季特有の爽やかな風は、この状況では気色悪いものでしかなかった。

歩道をただ黙々と進む。一歩足を踏み出すごとに、緊張がじわじわと染み込んでくるのを感じた。

後方から一定間隔で複数人の足音が聞こえる。自分が守られていることは知っていた。しかし、後をつけられているような気持ちも確かに存在していた。

十五分後、目的の倉庫にたどり着いた。

「ここ、か」

敷地内道路は雑草が伸び放題、フェンスはぼろぼろ、コンクリートの壁は鉄筋が剥き出し等々、明らかに放棄されていると分かるほど無様な光景が広がっている。そして主役の倉庫はすっかり色褪せており、全体的に茶色く見える。

「足を踏み入れて一時間後……」

声にならないほど小さく呟いた。

ゆっくりと瞳を閉じる。瞼には、あの夜白亜を責め立てる綾の顔が映し出される。震えを抑えんと、歯を食いしばった。

「ちゃんと、話しあわなきゃ」

瞼を開き、視界に倉庫を捉える。

間もなく、右足を敷地内に踏み入れた。作戦開始である。

続けて左足を踏み出し、次は右足——止まることなくそれを繰り返して倉庫入り口に向かう。入って下さいと言わんばかりに開け放たれた扉を確認し、そのまま突き進む。

倉庫内は入り口以外閉め切っており暗かったものの、目視で周囲を十分確認できた。小学校の体育館ほどの空間にはコンテナが無造作に散らばっており、天井にはクレーンが取り付けられた幾つもの鉄柱が交差している。

「約束通り一人で来ました！ お姉ちゃんを返してください！」

精一杯声を張り上げるが、沈黙にかき消された。

反応が無く唇をきゅっと締めた瞬間、倉庫内の一部に光が差し込んだ。それは天井から降り注がれていた。罨かもしれないと思いつつも、光の下へ駆け出した。

混在するコンテナは迷路を構成していた。足下おぼつかない状態で幾度となく右往左往することで体力を、なかなかたどり着けないもどかしさで精神を磨耗していった。

数十分後、抜けた先は機材が転がる広場だった。辺りはとても明るい。

「お姉ちゃん！」

中央に手足が縛られた制服姿の少女が横たわっている。少女は白亜の声に気づき、体を起こし振り向いた。確かに綾だった。しかし、口には布が結びつけられていた。

白亜の姿を確認し、目を大きく見開いた。憎しみの色は感じられなかった。

「んんうっ！」

綾は大きく首を横に振った。しかし、それが何を意味するのか理解できなかった。

「今助けるよ！」

白亜は躊躇することなく駆け寄った。綾は変わらず首を振り続ける。

ようやく綾の元にたどり着き解放しようとした瞬間、小さな破裂音が聞こえて右腕に太い針が刺さるような激痛が走った。

「っっ！」

耐えきれずに伏せてしまった。右腕を見ると鮮血が流れ出しており、さらに傷口内部に異物が埋もれているのを感じる。左手で押さえるも、痛みは治まらない。

「いやいや、残念だったねえ」

暗闇から黒いスーツ姿の人間が現れた。右手に拳銃を握っている。

「後もう少しでお姉さんを救えたのに」

黒いハットとサングラスのせいで顔つきを判断することはできなかったが、声から男であることは理解した。

「お前が……お姉ちゃんをさらったのか」

男は口元を歪めた。

「さらったんじゃない。勝手についてきたのさ」

「んーっ、んーっ！」

綾は必死になって、言語として成り立っていない声を上げた。

「ほどこいてあげたらどうだい、義理の弟君？　大丈夫、もう撃たないよ。少なくとも今はね」

銃口は天井に向けられた。

男をきつと睨みつけ、痛みの残る右腕から左手を離す。そして、綾のうなじに見える結び目に手を伸ばした。片手のみの解放だったが、結びは意外とゆるかったためあっさりと解くことができた。

「あれ、左利きなんだ。失敗したなあ」

綾は俯いて数回呼吸を繰り返していた。間もなく男に顔を向けた。

「あなたが騙したんでしょ！？ お兄ちゃんに会わせてくれるって言うて！」

怒気の含んだ声を浴びても、男は卑屈な笑みを止めなかった。

「はは、ごめんごめん。嘘だったんだよ」

「なっ！？」

男は取り繕う気など皆無だった。

「確かに僕はオデュッセウスの仲間だよ。けどね、正直彼の目的なんて興味ないんだ。ただ強くなればそれでいいんだ」

「目的？」

「水瀬綾の確保さ。まあ今の僕にとって君はただの『釣り餌』なんだけどね」

「どうということよ……！？」

男は白亜に拳銃を向ける。

「僕の目的は水瀬白亜。君のリジエネレートが、強くなるために必要なんだよ」

「なんで、僕の事を知ってるの……？」

ちらりと綾を見た。何を言われるのか気づいたようで、すかさず睨み返してきた。

「私は話してないわよ」

「残念でしたあ」

男はくっくつと笑った。

「まあそれは秘密さ。例え知ったところで、君がそれを役立てることはもうないだろうから」

遠回しに死を宣告されたのだと、すぐに理解した。

「さて、と。ここでお願いがあるんだ。白亜君、僕についてきてくれるかな」

拳銃を向けたまま『お願い』をしてきた。

「なあに、ちょっと君の体をいじるだけさ。多分、いや確実に死ぬけど――」

「ちょっと待ちなさい」

綾が男の言葉を遮る。

「私は、どうなるのよ」

「あーそうだねえ。どうしようか」

「お兄ちゃんに、会わせて」

男は綾の言葉を反芻するように、ゆっくりと首を振った。

「それはできないよ」

「なんで」

「何故オデュッセウスが君を求めるのか、僕らは知らされていない。そして、もし君と彼が出会った時何が起こるのかもね。もしかすると、僕らは用済みになって始末されるかもしれない」

男の口角が下がった。

「でもそれじゃ駄目なんだ。僕、いや僕たちの目的は混沌。早い話が、世の中をめちゃくちゃにしたいのさ。だから会わせるわけにはいかない」

白亜には男の話がどうにも理解できなかった。ただ一つ分かったのは、このままでは大変な事になるという漠然とした不安だけだった。

「まあそういうわけ。そして今、水瀬白亜を手中に収めたも同然」
銃口の向きが綾に変えられた。

「……えっ？」

「もう『釣り餌』はいらない。さよならだ」
綾の顔がみるみる青ざめていく。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。お兄ちゃんは私を探してるんでしょ？ 殺したらあなたがまずいんじゃないの!？」

「いやいやむしろ好都合。オデュッセウスは怒り狂って町一つ吹き飛ばすかもねえ。僕らも楽しみが一つ増える。まあ君はLGOに殺されたと言っても言うておくよ。そっちの方が怒りに拍車がかかるだろうし」

「そんな嘘、お兄ちゃんが信じていても——」

「信じるさ。彼がLGOを恨んでいるのは君が一番よく知っている

だろう？ それに――」

男は白い歯を剥き出しにした。

「アレはもう判断なんてできないんじゃないのかなあ」

「っ……！？ それ、どういう意味よ……？」

「おっと、口が滑った」

「判断ができないって、何――」

綾の叫びは、銃口に飲み込まれた。

「十秒時間をあげる。その間、お兄さんへの最後の伝言を聞いてあげるよ」

未だに話が理解できない。そして相変わらず分かるのはただ一つだけ――このままでは綾が撃たれる現実のみである。

右腕の痛みはすっかり消え去っていた。傷口は完全に塞がれ、粘度の高い血液が付着しているのみだった。よく見ると小さな塊が皮膚にへばりついていて、痛みも無く剥がし取れたそれは金属でできており、すぐに銃弾であることが分かった。

撃たれた時の激痛を思い出す。もう二度と経験したくない。しかし、それ以上に綾と出来た溝による心の傷の方が何よりも痛く苦しかった。もしここで綾を失えば、それは二度と癒えない。

意を決する。

「っ……なんで」

「へえ」

今、白亜の背中には綾がいる。そして目の前には敵がいる。

「なんで逃げないのよ」

「お姉ちゃんと、仲直りしたいから」

「はあ！？」

素っ頓狂な声が聞こえた。

「この状況で何言ってるのよ！ それに、こっちはあんたと仲直りする気なんかないわ」

「それは、なんでなの」

「あんたが化け物だからに決まって――」

銃口が光った。すると左足に力が入らなくなり、伏せてしまう。耐えきれず涙が溢れる。

「十秒経ったからね。約束は守らないと」

それでも、銃弾の軌道を変わずに受け止め続けた。

「どうしてそこまでして私と仲直りしたいのよ……！」

綾の声が徐々に震え始めてきた。

「初めて、できた、お姉ちゃんだから」

痛みを振り切り、必死に言葉を紡いだ。

「お父さんもお母さんもうなくなっちゃった。もう、お姉ちゃんたちしかないんだよ」

男は卑屈な笑みを浮かべて二人の会話を楽しんでいる様子だった。

「私だって、ずっと一人だよ」

「え……」

「お兄ちゃんがいなくなって、ずっと一人なのよ。お父さんもお母さんも信用できないから――」

破裂音の後、左腕に激痛が走る。

「……正直に言うと、あなたが来るのすごく楽しみだったのよ」

予想もしない言葉は驚きを生み、痛みを若干和らげた。

「弟ができるって聞いた時はすごくうれしかった。もう一人じゃないんだって思った。でも、そんな気持ちはすぐに消えたわ。リジェネレイトのせいだね」

気づけば、左足の傷が癒え始めていた。ふらふらと立ち上がろうとするが、光に遮られた。今度も右足を撃たれ、再び腰を下ろしてしまった。

「結局あなたも化物なんだって悟ったわ。そして、お兄ちゃんみたいになって、また私を一人にするんだって」

まるで蓮が化物になってしまったかのような言い草だった。それについて問う気力はない。

「だからもう深く関わらないって決めたの。変に仲良くなれば、その分別れが辛くなるから」

涙が止まらない。四肢を縛る激痛が原因であり、綾の告白が原因でもあった。

「一人に、なんてしないよ」

「嘘。お兄ちゃんも、そう言って結局帰ってこなかった」

「約束、するよ」

返事はなかった。果たして今の綾はどんな顔をしているのか、想像するのは難しかった。

「まあいいじゃないか。二人揃ってあの世にいけば、もう一人にはならない。お兄さんに会わせると嘘を吐いた謝罪として、その手伝いをさせてもらうよ」

男は拳銃を降ろし、地面に落とした。

硬い落下音をきっかけに、男に異変が生じる。スーツとハット、サングラスが溶解して全身を包み込み、人型の黒色と化した。さらに四方八方へ伸縮して姿を変える。そして変化を終えると、黒は鮮やかなライトグリーンとなった。

「なによ、こいつ……!？」

奇怪な装束に身を包んだ道化師を思わせる姿である。しかし、装束に見えるものは布ではなく明らかに金属で構成されていた。

「なによって、エイリアンだよ」

「なっ!？」

白亜も綾も驚きを隠せず、目の前の道化師に啞然とする他なかった。しかし、白亜は思い出した――義父がエイリアンの仕業であると言っていたことを。

「人間に化けてたっていうの……」

「はは、知らなくて当然だ。一般には知れ渡ってないし、この力はごく一部の上級エイリアンしか使えない」

声は男のものと変わりなかった。人間の肉声そのものだった。それよりも、上級エイリアンとは何なのかが気になった。エイリアンに上下があるなど、初耳だった。

「もう質問はいいかい？　じゃあ、まずはリジエネレイトをいただくでしょうか」

道化師型のエイリアンは袖口のような部位から短い棒を延ばし、引き抜いた。先端に短い片刃が取り付けられていた。

「白亜君、ついてきてくれるかい」

「嫌だ」

「そうかい。ついてきてくれれば、あまり痛い思いをせず摘出してもらえるのに。でも嫌なら、苦しみながら摘出されることになる」
二択だった。しかし、どちらを選んでも結末は死。答えは一つだった。

「どっちも嫌だ」

「いやいや、答えになってないよ。君の選べる道は二つだ」

刃の先端を突きつけられる。それだけなのに、胸を貫かれたような錯覚を起こした。体が震え始める。

「さあ、どつ——」

「作りなさい」

綾は通った声を上げた。

「もう一つ道を作っちゃいなさい」

「作る……？」

「こいつを倒すのよ」

倒す。すぐに思い浮かんだ言葉は『無理』だった。

「——あっ」

すっかり忘れていた事柄を思い出す。LGOの隊員に信号を送り助けを求めることができる。すぐに左手をポケットに入れ、スイッチを押した。ちゃんと送れたのかどうか不安だったが、やるべきことはやった——

「残念」

道化師が呟いた。

「信号は送れないよ」

「な、なんで、そのことを……」

「機械の探知ぐらい簡単さ。そして、僕の電磁波は人間の作り物な
んですぐに壊せるんだ」

望みが絶たれ、血の気が引いていくのが分かる。

「どうやら一人というのは嘘だったようだねえ。まあ僕もお姉さん
に嘘吐いたしおあいこってことで許してあげるよ。どちらにしても
リジェネレートはもうけど」

道化師がじりじりと距離を詰めてくる。白亜も後ずさろうとした
が、後ろには綾がいた。

「だから、倒すのよ」

「どうやって」

「あなたにしかできない事があるじゃない」

「あ——」

化物への変身。確かにあれならば、太刀打ちできるかもしれない。
「でも、どうやればいいのか分からない。それに、もうお姉ちゃん
に見せたくない」

深い溜息が聞こえた。

「ごめんなさい。私のせいでもあるのね。……正直に言うと、別に
あなたが化物だって構わないの」

「えっ」

「化物が嫌いなんじゃない。化物と関わると辛い思いをするのが嫌
なのよ」

「……よく分からないんだけど」

「つとにかく！ あなたが化物になってももう嫌ったりしないって
こと！ だから、その……」

綾は急にしどろもどろになった。

「……仲直りしようってことよ」

そして、しおらしい小さな声で呟いた。しかし、白亜の耳には確

かに届いた。

願いは叶った。

「……お姉ちゃん！」

思わず歓喜の声を上げてしまった。今もなお刃に狙われているはずなのに、頬が緩んでしまう。

「なんだかよく分からないが、良かったじゃないか。笑顔で死ねるなんて恵まれてるよ、君は」

道化師は歩みを止め、短刀を構えた。このまま横になぎ払えば、白亜の首から鮮血が噴出するのは確実だった。

変身するにはどうすれば――

「死にたくない」

ぼつりと呟く。しかし、それは絶望の足掻きではない。

「お姉ちゃんとうまく仲良くできるんだ」

それは希望を掴むための決心――

「絶対に、生きて帰る！」

P r o g r a m R e g e n e r a t e s t a r t u p .

胸の奥から熱を感じる。不快なものではなかった。熱はやがて全身に行き渡り、活力となる。

そして、人間に備わる全ての感覚が変化し始める。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚――これまでの常識はもう通用しない。

S e t u p c o m p l e t e .

V e r s i o n 1. 0 s t a r t.

継ぎ接ぎされた金属の皮膚と機械仕掛けの内臓器官——それだけが今の肉体を構成している。

目を開く。理解不能な英語の羅列、白線で描かれた無機質な図形が視界に現れる。そして、構える道化師の姿を確認した。

第十話 白亜、進化する

「かわつタ……！」

果たして何がきつかけだったのか、それは定かではない。しかし、これで『道』は切り開かれた。

「へえ、それが『リジエネレーター』か。醜い風貌だねえ」

短刀が振り払われる。すかさず右腕で受け止めた。

「ツっ！」

小さな火花が散り、痛みを伴う。しかし、工作用カッターで誤って指を切った程度のものでしかなかった。

「ははっ、こんなのでその損傷か。醜い上に出来損ない、どうしようもないな」

肘から液体が滴り落ちた。それは銀色で、油のように滑った光沢を放っていた。例えるなら、過去理科室で見た水銀のようであった。「見えるかい、お姉さん。こいつはもう人間じゃないんだよ。赤い血を流さず、温もりのある肉もない。その銀色の血は、エイリアンの証拠だ」

「エイリアン……」

「まさか今まで違う何かだと思っていたのかい？ そいつは確かにエイリアンだよ。どうだい、弟君がエイリアンだと分かった気分は」
わずかな沈黙の後、綾は軽い溜息を吐いた。

「むしろ安心したわ。得体の知れない化物じゃないと分かってね」

「へえ」

「そもそもあなたがその間抜けな格好になった時から薄々気づいてたし」

「……へえ」

道化師は短刀を袖部に収める。そして、右手甲に付いた筒状の穴から細く長い蒼炎を噴出させた。

「レーザーソードを見るのは初めてかい？ 綺麗だろう、僕のは」

漫画やアニメに出てくるロボットが使うような光線剣だった。LGOでさえ開発に困難を極めると聞いたことがある。それが目の前に存在し、使用者自身を青く照らしている。

道化師は無言で右手を払った。蒼い刃は右腕を裂いた――はずだった。しかし、痛みがない。

「アッ」

右腕がぐらりと揺らいだ。制御が利かない、いや肘から先の感覚がないのだ。どうしようもなく、右腕は勝手に肉体を離れて地面に落下した。白亜は啞然としながら眺めることしかできなかった。

「白亜っ！」

綾の叫びで現実に取り戻される。そして、ぽっかりと空いた右腕部分と銀血の凝固した切断面を見た。

「ウわアッ」

気が動転するも腰は抜けず、棒立ちでただ叫んだ。

「驚いてるねえ。でも楽しみはこれからだよ」

このままではまずいと思った。こちらからも手を打たなければならない。何か武器を――

はっと気づいた。今の白亜の体にはレーザーガンが備わっている。それを使えば――

「ッ……」

あの夜を思い出した。銃は確かに強い。しかし、難点があった。一つは一発限りということ。あの夜のエイリアンは体躯が大きかった上に場所が狭かったため当てることは容易だった。しかし道化師は人間サイズであり、機動性が高いことは予想できる。そして、周辺もそれなりに広い。何よりもこの場を動けないのが大きかった。下手に綾から離れれば、道化師は彼女を狙う可能性がある。

もう一つは射撃後である。銃の爆発で綾に被害が及ぶだろう。それが一番の問題点だった。道化師を倒しても綾に何かあっては意味がない。場所を変えようにも前述の通りここを動けない。

銃のグリップに手を伸ばせない。ただじっと蒼の刀身を見つめる

他なかった。

「と思ったけど、もういいや。その面見てると気持ちが悪くなってくる。これで終わらせるよ」

蒼い刃がより太く、長くなった。同時に刀身から放たれる電気音も強くなる。

「二人同時にさよならだ」

眼前の刃は確実に白亜の肉体を斬り裂き、後ろの綾を焼き尽くすだろう。

腰部に手を伸ばしたくなった。いや、それだけは駄目だと自制した。ならばそれ以外に何があると自問した。答えはなかった。

そしてすがったのは、人間最後の手段である『懇願』。

道化師は蒼炎を振りかざす。

白亜は願った。きっと後ろで怯えているだろう義理の姉を助けたい、と。

「最後に聞こうか」

白亜は願った。道化師が持つような光の剣が欲しい、と。

「二度目の人生、楽しかったかい？」

白亜は願った。剣を自在に振るうことのできる両腕が欲しい、と。

突如、頭に機械音声が響く。

『Version up, OK?』

バージョンアップ――さすがに意味は分かる。何が変わるのか知る術はない。しかし、これが願いを叶えてくれるのではないかというわずかな希望が生まれたのは事実だった。

『OK.』

心の中で答える。

「だんまりか」

視界左下に映る自身の図に変化が生じた。これまでは右腕部が赤く点滅しているのみだった。それが今では左腕部、右腕部、左右の腰部が白く輝いている。

「さよな――」

道化師は言葉を切った。その原因は白亜にあるようだった。

右腕部の切断面から複数のコードが延び始めた。コードは地面に転がる右腕に絡みつき、手繰り寄せた。そして切断面同士が癒着し始めた。徐々に右腕の感覚が蘇ってくる。

間もなく両腕と左右の腰に熱を感じたかと思った次の瞬間には、各々の部位が白く発光し始めた。

「さよならだっ！」

道化師は今度こそ言葉を言い切って、蒼炎の刃を降り降ろした。

Update Complete.

Version 1.2 start.

白亜は未だなお発光を続ける左腕を上げ、刃を受け止めようとした。何故こうしたのか、何故こんなにも心が自信で満ちているのか、何故この光景を直視できるのか、理解できなかった

刃は右手、そして肉体を裂いて止まるはずであった。

確かに刃は止まっている——白亜の左手の前で。

「……なるほど。『進化』したのか」

道化師は刃を押し込まんと、右手を震わせていた。しかし、刃は微塵も動くことはなかった。

「やアっ！」

白亜は道化師の顔面めがけて右拳を突き出した。発光が収まった純白の小手は風を切るように速度を上げ、灰色の仮面に衝突した。『殴る』という行為は初めてだったが、手応えを感じる当たりだった。

「グアッ!!」

道化師は大きく仰け反り、後ずさった。蒼炎の刃が一瞬にして消え去った。

「……ふふふ、やるじゃない」

それでも余裕そうな声を上げた。

視界に新たな文字が出現していた。『Laser Sword』と書かれており、矢印の先は左右の腰部を示していた。

左手を左腰に添える。すると腰の一部がスライドし、四角の棒が飛び出した。握りしめて引き抜く。

「これが……レーザーソード」

空想のロボットが扱うものとはほぼ類似していた。しかし、スイッチも引き金も無いのにどうすれば刃が出るものかと苦悩した。

「なるほど。AFに続いてレーザーソードまで備わったか。『リジエネレーター』とは本当に面白いよ」

理解できない単語交じりの言葉に耳を貸すことなく、刃を出すことにだけ集中した。

「ンっ」

軽く力む。反応はない。

説明書はないものかと自問した瞬間、頭に波長のようなものが流れてきた。言葉で説明できないそれは、レーザーソードの使い方を示してくれた。

「これナラッ！」

柄を正面に構え、左手に神経を集中させる。胸の中で熱が溢れたかと思うと、それは左腕に流れ込み間もなく掌、そして柄へ、最終的に水色の細い刃へと変換された。

「でタっ！」

思わず歓喜の声を上げてしまった。空想物語の主人公になったような気分だった。

これで戦えると思い、両足に力を込めた瞬間——刃が消えてしまった。

「エえッ!？」

落ち着いてもう一度左手に集中する。先ほどと変わらぬ刃が現れた。

「ヨし」

地を蹴ろうとした時、刃は消えた。

「な、ナンデー——」

道化師が左腕を白亜に向けた。慌てて右手をかざした。仮に何か

飛ばしてきても、先ほどのように防げるだろうと期待した。

袖部から突起物が射出され、白亜めがけて飛来してきた。突起物は右手を前にしても速度を落とすことはなかった。

「ぐッ」

激痛が走り、銀血が溢れた。杭のような鉄針が手甲を貫いている。

「ははははっ。レーザーソードもAFも不完全か。『進化』まで中途半端とはねえ」

道化師があざ笑う。

「でもまあ、すぐ殺さずに良かったよ。面白いものが見れた」
再び蒼い刃が伸びた。

「これで心おきなくさよならできるよ」

白亜は未だ去らぬ痛みを抱えながら、啞然と立ち尽くすのみだった。

「今度こそさよな——」

二、三度風を切るような音が聞こえた。道化師は急に立て膝を突いた。

「大丈夫、白亜君!？」

聞き覚えがある女性の声が耳に届く。振り向くと、いびつなガスマスクを被ったA2がアサルトライフルを構えていた。その銃口からは、小さな煙が上っている。

「やれやれ、来ちゃったか」

道化師も変わらぬ姿勢のまま、A2に目を向けた。

「まさかあんたの仕業だったとはね、ホメロス」

A2は道化師の名前らしき言葉を発した。

「んふふ、だとすればどうするつもりかな」

「今すぐ破壊するまでよ」

再びライフルが連射される。ホメロスは足の怪我など問題なさそうに高く跳躍し、コンテナの屋根に着地した。銃弾はコンクリート

を穿っただけで終わった。

「リジェネレイトの確保は失敗した。でも、楽しいものが見れたから良しとしよう」

暗闇の中、ホメロスの眼部が怪しい赤の光を放ち始めた。

「ルフ！」

激しい轟音とともに倉庫の天井が突き破られた。太陽の光が射し込み、倉庫内は灯りを点けたように明るくなった。それによって、天井を突き破ったものの姿も明らかになった。

「鳥……!？」

A2の言う通り、それは鳥だった。しかし、そのサイズはあまりにも巨大であり、倉庫の空間を半分近く占拠するほどだった。全身は金色で縁取られ白く輝いており、所々に重火器と思わしき部位が確認できた。神々しくも有機的な印象は感じられず、どう見てもエイリアンであった。

巨鳥は羽ばたいていないが、倉庫内は強風で砂埃が舞い上がっていた。原因は翼部のスラスターだった。

「大丈夫、撃ったりしないよ。人間はミンチにしてもいいけど、リジェネレーターだけはそうするわけにいかないからね」

ホメロスは袖部からワイヤーを伸ばし、巨鳥の下部に掴まった。

「ホメロスッ！」

A2の叫びは強風にかき消された。

ブースターから金色の炎が噴き出され、巨鳥は急上昇していく。

三人に為す術はなかった。

間もなく巨鳥は倉庫を抜け、轟音とともに目の前から消えた。天から舞い降りた神の使いが帰還していくかの様だった。

倉庫内は夕焼けの紅で染まり始めた。まるで夕日の力であるかのように、白亜は瞬時に人間の姿へと戻った。

解放された綾はわずかにふらついており、衰弱が見られた。間もなく救急車が駆けつけ、上田に付き添われて運ばれていった。

白亜は共に行かなかった。肉体の傷がすっかり完治していたというのもあるが、それ以上に綾に会わせる顔がなかったからだった。

帰りはLGOの装甲車に乗った。隊員たちが労いの言葉をかけてくれたが、上の空で返事を返すことしかできなかった。走行中はぼんやりと床を眺めていた。

「それにしても、ホメロスが絡んでいたなんて……」

倉庫で白亜たちを助けてくれたのは三浦だった。実際にホメロスの姿を見た彼女の感慨深げな呟きが聞こえた。

「我々の待機地点に下級エイリアンが潜んでいた時点で予想はしていたが……現実にはなってほしくなかったな」

隊長の年期の入った低い声が響いてきた。

「さらに新たな下級エイリアンまで登場、か」

「あれほど巨大なやつはここ数年確認されてませんよね」

「ヘッドカメラには撮れているだろうな」

「もちろんです」

「帰還後確認だな」

隊員たちは各々会話を交わしていたが、隊長と三浦の会話しか聞く気になれなかった。

LGOの支部に到着し、軽い検査を受けた後総司と共に帰宅した。家では小百合が笑顔で迎えてくれた。上田から連絡があり、綾の命に別状はないとのことだった。

「ありがとう、白亜君」

二人は白亜に感謝の礼を述べた。作り笑いで返すも、素直に喜ぶことはできなかった。

美味しいとも不味いとも感じられない夕食を食べて風呂に入った後、すぐにベッドに潜り込んだ。肩を震わせて、静かに泣いた。

第十一話 水瀬家、和解する

翌日は普通に登校した。クラスメイトは揃って白亜を心配し、声をかけてくれた。重苦しい心を悟られないよう必死で笑みを浮かべて適当な理由で誤魔化した。

「元氣そうで良かったあ……」

「ひ弱な転校生ねえ」

優希と美月も各々の性格がよく表れた言葉で迎えてくれた。この二人にだけは、事実を話せぬ罪悪感が芽生えた。特に何事もなく授業を終え、帰宅した。

「おかえりなさい。綾、もう帰ってるわよ」

小百合の言葉で胸が跳ね上がる。

「部屋でおとなしくしてるわ。今なら、仲直りできるんじゃない？」
無言で頷いて、二階に上った。歩む足が小さく震えていた。

気づけば綾の部屋の前にたどり着いていた。規則正しい木目調の扉の前に、左手を持ち上げる。そこで静止し、深呼吸――

決心して扉を叩いた。

「誰」

初めて綾の穏やかな声を聞いた。

「白亜です」

「入っていいよ」

即座の返事も変わらぬ口調だった。

「お邪魔、します」

一言とともに入室する。自分でも分かるほどに声は震えていた。白亜が思い浮かべる同世代の少女の部屋は、華やかなものだった。綾の部屋はそれとは大きくかけ離れていた。ベッドもカーテンも机

周りも質素だった。ただ一つ、ベッドの脇に置かれたクマのぬいぐるみだけが異彩を放っていた。クマの横に、綾の顔が見えた。眼鏡をかけておらず、別人のようだった。

恐る恐るベッドに近づいた。

「椅子、使っていいよ」

椅子を引っ張り出して、ベッドに近づけ腰を下ろした。

綾の顔色は良く、微笑を浮かべていた。布団に埋まって顔だけ出ている様は可愛らしいものだったが、今の白亜にそれを直視する余裕はなかった。

「ちよつと疲れてただけだから、病院で横になってたらすぐに良くなったわ」

綾はくすくすと笑った。心がずきりと痛んだ。

「ありがとう、白亜」

感謝の言葉を聞いた途端、視界がぼやけた。そんな中、必死で首を横に振った。

「ぼく、なにも、できなかった。あんなにえらそうなこと、いったのにつ、けつきよく、だめだったっ」

綾の顔が見えない。それでも、ひたすらに謝罪を続ける。

「たすけて、くれたの、みうらさん、だよっ。ぼく、だめだったっ。ごめんなさい、ごめんなさいっ」

謝罪を終えた後、俯いて嗚咽混じりに泣き続けた。いよいよ耐えきれなくなつて、部屋から出ていこうと腰を上げようとした時、髪を撫でられた。

「んっ」

愛撫が続いた。目を上げると、ぼやけた中綾が半身を起こしているのが見えた。

「こら。そんなに泣いちゃ駄目だよ」

怒られてしまった。しかし、それは慈愛に満ちた甘い囁きだった。「ほら、涙拭いて」

ティッシュを差し出され、それで涙を拭い鼻水を出した。未だに

鳴咽は止まらないが、視界はやや鮮明になった。パジャマ姿の綾が苦笑していた。

「もう、どっちが看病されてるのか分からないじゃないの」
和らいだ悲しみと恥ずかしさが入り混じって、再び俯いてしまった。

「白亜は私を救ってくれた。あいつには勝てなかったけど、私には勝ったのよ」

「お姉ちゃんに……？」

「変な意地ばかり張ってた私にね」
細い指で髪を梳かれる。

「ありがとう」

再び感謝を述べられた。綾の説明は腑に落ちなかったが、優しい笑顔を見ているとそれでもいいのかもしれないと思うようになった。

「だから、白亜も笑って。ね？」

鼻をすすって頬を緩ませた。そして力強く頷いた。

「うん、いい笑顔だ」

綾も爽快な笑顔を見せてくれた。

「まったく驚いちゃったわよ」

小百合は味噌汁を啜り、困り顔で言った。

「白亜君が目も鼻も真っ赤にして降りてくるんだもの。喧嘩の一つも疑いたくなるわ」

「あのさあ」

綾は呆れた様子で厚焼き玉子に箸を伸ばした。

「ははは、昔から綾は口喧嘩が強かったもんな。蓮もしょっちゅう悔しそうな顔してたしな」

総司は自身の言葉を特に気にするでもなく、ビールに口をつけた。綾の箸が止まる。その顔は実に無機質だった。しかし、それは三秒も経たぬうちに跡形も無く消え去った。

「……そうだね」

綾は微笑を浮かべて厚焼き玉子を食べた。

食卓に四人が揃うのは初めてで、険悪な雰囲気は皆無だった。

夕食のメニューは白米、豆腐と長葱の味噌汁、ほっけの干物、厚焼き玉子、青菜のお浸し、胡瓜と人参の漬物。いたってシンプルで庶民的だった。初めて水瀬家にやってきた時の具沢山なチャーハン、豪華な夕食に比べればえらく質素だった。しかし、白亜にしてみればこの質素な食事がとても美味に感じられ、何よりも心が温かくな

った。

「とにかく、もう白亜とは仲良くしたから」

ちらりと白亜に流し目を送ってきた。それだけの事なのに、なぜかむずがゆく照れ臭かった。

「あのさ」

綾は真剣な眼差しを自身の父母に向けた。

「ご飯食べ終わったら、二人に話したいことがあるの」

「……体は大丈夫なの？」

「うん。だから、時間いいかな」

二人は互いに顔を見合わせ、軽く頷いた。

「いいわよ。それにね、お父さんとお母さんから話があるのよ」

「そう、なんだ」

綾は少し驚いている様子だった。

「白亜も一緒にいてほしいの」

「えっ、僕も？」

「あなたにも関係してることだから」

とりあえず頷いた。果たして何が起こるのか予想できなかった。

「まあなんだ、せっかくのご飯なんだ。今は食べよう、な？」

「うん」

再び食卓に明るさが戻った。

食事の間、多くの会話を交わした。新しい友達の事、綾の高校の事、総司が勤めるLGOの事、夕食のメニューの事――実に些細な内容だった。白亜はそれが嬉しく堪らなかった。

食後、後片付けが済まされたテーブルには四つの湯呑みだけが乗っていた。各々に注がれた緑茶から湯気が昇っている。

夕食時の活気はもう存在していない。そして、しばらくの間それが戻ることもないことは白亜でも理解できた。

「まずはお母さんたちから話してよ」

沈黙は綾によって破られた。

「いいの？」

「うん。多分、私のは大した事ないから」

「……分かったわ」

小百合は総司に目配せした。

「話というのは、蓮のことだ」

総司は静かに口を開いた。

「私は蓮と向き合おうとしなかった。蓮が引きこもった時、母さんと綾に全てを投げてしまった。オデュッセウスの着用者選ばれた時でさえ、気の利いた一言すら言ってやれなかった。そして、あの子がエイリアンになった時には……とうとう見放した」

総司の言葉で、綾の瞳から輝きが失われていく。

「お母さんも悪いの。お父さんが全てを押し付けてきた時、なんで私だけと思ったのは事実よ。だから蓮に対しても真剣になれなかった。着用者になって外に出るようになった時、ようやく肩の荷が下りたわ。でもエイリアンになったのを聞いたら、もう嫌になってしまったの。また重荷を背負わなきゃいけないのかって。だから私も蓮を見放したわ。もう関わらないようにしようって」

小百合の言葉が綾に追い討ちをかける。とうとう耐え切れなくなったのか、目を閉じてしまった。

「きつと蓮は私たちを憎んでいる。父さんと母さんは殺されて当然だと思っている。でも綾、お前だけは生きる資格がある。だからこそ、オデュッセウスの件を全てLGOの実働部隊に一任したんだ。私たちは蓮を間接的に殺そうとした、お前が思っている通りな」

「えっ」

「分かるさ、綾の事ならな」

沈黙が続く。柱時計の秒針が淡々と時を刻む。

「しかし、それではいけないと気づかされた。白亜君にな」

白亜を見る総司の視線は穏やかだった。

「白亜君は危険を犯してでも綾と仲直りしたいと言った。血の繋がらぬお姉さんに対して、だ。なら私たち実の親子にも仲直りはできるのではないのかと、気づかされたんだ」

「僕、が……」

「私たちはもう蓮を『黙殺』しない。蓮に謝罪したい、例え許されなくてもな。そして場合によっては、私のこの手で蓮を止める……と言いたいところだが、父さんは実働部隊のように強くはないから無理だろうな」

総司が苦笑した。

「だから父さんは実働部隊の裏方で協力することにした。それが、今出来る精一杯だから」

「お父、さん……」

綾は泣きそうな顔を浮かべた。

「お母さんにできることはほとんどないけど……気持ちはお父さんと一緒よ。もう蓮から——いえ、綾からも目を背けないわ」

「うんっ……」

綾の白い頬に涙が伝った。

「ふふっ……やっぱり二人は私の親なんだね。敵わないよ」

「綾？」

二人は不思議そうに綾の顔を見つめた。

「私の言いたかったことが一つなくなっちゃった」

「それは……なんだったんだ？」

綾は自身の涙を指でそっと拭いた。

「お兄ちゃんと向き合ってほしい」

二人は一瞬ぼかんとしたが、すぐに微笑を浮かべた。

「綾。さっき『もう一つ』と言ったが、他にもあるのか」
「うん」

「話してくれないか」

綾は緑茶に口をつけた後、小さくため息を吐いた。

「白亜のこと」

心臓が跳ね上がった。

「お父さんもお母さんも、もう『白亜君』って呼ぶのやめようよ」

「あ……」

「まるで他人みたい。もう、家族なんだから『白亜』でいいと思うんだけど」

わずかな間の後、笑い声が上がった。

「そうだよな。悪かった」

「ごめんなさいね。でも、白亜……君はいいの？」

確かに違和感を感じていたが、それは当然のものとして受け入れていた。しかし、義理とはいえ家族であるのも事実だった。呼び捨てで呼ばれたい願望がないわけではなかった。

「僕は……『白亜』がいいです」

「なら決定ね、白亜」

小百合はにこりと微笑んだ。

「あと気になってることが一つ」

綾の視線は白亜を捉えた。

「白亜がここに来てから、『お父さん』とも『お母さん』とも聞いたことがないのよね。もしかすると、どう呼んだらいいのか分からない？」

「あっ……えとっ……」

凶星を突かれ、しどろもどろになる。

「私は『おじさん』で構わないよ」

「えっ」

「私は白亜から『お父さん』と呼ばれる資格はない。君のお父さんはただ一人だからね」

「でも――」

「いいんだ。君のお父さんがいかに自分の息子を愛していたのか、私はそれを知っているからね。それにな……彼は絶対に生きている。ちよつとやそつとでくたばるほど柔な男ではない。だから、『お父さん』という言葉はお父さんが帰ってきたら言っただけなさい」

総司の言葉は、まるで実父のそのような温かみが込められていた。

「は、はいっ――」

「『うん』でいいよ。家族なんだからな」

少し躊躇した後、口を開いた。

「うん！」

「はは、オーケーだ」

総司は破顔した。

「じゃあ私は『おばさん』かしらね」

小百合が『おばさん』のようにくすぐすと笑うと、つられて皆も笑った。

ひとしきり笑った後、総司の眼差しに真剣さが宿る。

「白亜。君が人間と異なる存在に変化しても、私の息子であることに変わりはない。もう、蓮のような目には合わせない。君が人間らしく生きられるよう、精一杯のサポートをさせてもらおうよ」

「おじさん……」

「大丈夫だ。上田先生もいる。だから、その命を大切にしてくれ。お父さんとお母さんに会うためにも、な」

「はい！」

何一つ迷うことなく、返事をした。

テーブルの活気は戻った。そしてもう二度と消え去ることはないだろうと、この場の誰もが確信しているのは各々の表情を見れば明らかであった。

第十二話 噂を聞く白亜と運動音痴の綾

桜は儂く散り乱れるものである。第二高等学校前の桜並木も例外ではない。桜花の絨毯は通学で溢れ返る生徒たちに踏み締められていた。

微笑を浮かべた綾は教室の席からそんな光景を眺めていた。

「おはようっす」

茶髪のポニーテールを揺らしながら、命は綾に声をかける。

「おはよう、ミコ」

綾は微笑みながら柔らかく返した。

「あれえ？」

命は怪訝な表情を浮かべる。

「綾が笑ってる……これは嫌な予感が」

「笑っちゃ悪い？」

「いや、別にいいんだけどさあ。綾の笑う顔なんて何年ぶりかなあ」
命はまざまざと綾の顔を見つめた。

「休んでる間になんかあった？」

「んー、ちよつとね」

「ううむ。まあどっちにしても、いいことじゃない？
んだから喜怒哀楽がはっきりしてた方が魅力的だよ」
綾は美人な

「お世辞はいらん」

互いにかからりと笑い合った。

「あ、そうそう」

「何？」

「私、弟ができたの」

命はぽかんと間抜けに口を開け、啞然とした。

「……ご両親元気だねえ」

「うん、まあ突っ込みたいところは多々あるけどスルーで。義理よ義理」

「なーんだ」

つまらなさそうな声が上がった。綾は目を細めて命を凝視した。

「で、何歳なのさ」

「11。今年で12よ」

「へー、司郎と同じだ。学校は？」

「第三」

「おー、またしても合致。クラス一緒だったりして」

「どうかしら。今のところ話には出てこないわね」

「名前は？」

「白亜。白亜期の白亜よ」

「なかなか立派な名前じゃない。よーし、帰ったら聞いてみるか」
命は跳ねるように自分の椅子に座った後、何かに気づいた。そして、口元を歪ませて綾を怪しく見つめた。

「なるほどお……笑顔のわけはそういうことか」

「さっきからなんなのよ」

「分かるわよ。弟ってかわいいもんねえ」

「かわ、いい？」

「とぼけちゃってえ。いいのよ素直に喜んじゃって。過去に、あたしが司郎の事話しても無関心だったことは水に流してあげるから」
「かわいい……」

綾は命の言葉など耳を貸さぬ様子で視線を宙に彷徨わせた。

「……髪の毛が柔らかかった」

「へ？」

「瞳は大きくてくりっとしてた。顔もきれいだった」

「綾さーん？」

「私の後ろをひよこみたいにちょこちょこついてきた。一生懸命頑張る姿が凜々しかった。ぽろぽろ涙を流す姿はとても切なかった」

「う……」

「……かわいい」

綾の頬はすっかり紅潮して、瞳はすっかりとろけていた。

命は綾の正面に立つなり、眼鏡を奪い取った。

「んっ!？」

「だいじょーぶですかぁー？」

「え、ええ、平気」

命はすぐに眼鏡を返した。綾はそれをつけるなり、冷静な顔に戻った。

「まあ、かわいいと言えばかわいいのかもね。でも、それは自分の弟っていう補正があるからだと思うのよ」

「……はあ」

「だから恋愛感情とかそういったものは皆無ね。義理とは言え、線引きは重要だし」

「いや、そこまで聞いてないんだけど」

命は呆れて空笑いを上げた。

「おはよう、村雲さん」

「おはようっす」

命の前の席に、ボブカットの女子生徒が腰を下ろした。

「おはよう、芳野さん」

綾は笑顔で挨拶を交わした。芳野は一瞬真顔になった後、すぐに笑った。それが仮設されたものだと思判断するのは容易だった。

「お、おはよう、水瀬さん」

命はにやにやと笑みを浮かべた。

「ほーら。普段仏頂面してるツケが回ってきちゃったぞー」

「あ、別に、私――」

「芳野さん、いいのよ。ぜーんぶこの娘が悪いから」

「あのねえ」

「はは、ははは」

芳野は作り笑いのまま、席を立てしまった。

「なーに、高校生活はまだ長い。気にするなー」

「気にしてないわ、気にして……」

そう答える綾の声は若干沈んでいた。

第三小学校に給食の時間がやってきた。朝食から得たエネルギーは底を尽き、決死の思いで四時限目の授業を受けていた児童にとつてこれ以上の楽しみはなかった。中には偏食気味の児童もあり、彼らにとっては地獄の時でしかないのだが。

今日のメニューはコッペパン、アジフライ、わかめサラダ、いちごジャム、牛乳である。児童から定評のある内容だった。

「水瀬は虹色の狐って知ってるか？」

白亜はちぎったコッペパンを口に放り込むのを止め、須田の言葉に耳を傾けた。

「またその話題？」

美月が呆れた様子で反応した。

「嘘に決まってるじゃん」

「だから本当にいるんだって！ 二組の石川だって見たって言うてるし」

「どうせ注目集めたくてホラ吹いただけじゃないの？」

美月と須田が言い合うのを横目に、白亜はそつと優希に話しかけた。

「神風さんは知ってる？」

「うん。ここらへんに住んでる子なら皆知ってると思うよ」

優希は牛乳のストローをくわえて吸った。こくと小さく飲み込んだ後、言葉を続けた。

「私の神社、知ってるよね」

「うん」

「神社の裏って林が広がってるの。夏になるとよく男の子が虫捕りにくるんだよ。動物もほとんどいなくて安全だし、標識も多いから迷子にもならないの」

「へえー」

「でも、去年の夏ぐらいからかな。林で虹色の狐を見たって噂が流れ始めたの。最初はみんな信じてなかったけど、だんだん目撃者が増えてきて写真や画像まで広まってるわ」

「どうせコラよ、コラ」

須田の相手に飽きたのか、美月がこちらに加わってきた。

「それにさ、神社に住む人がいないって言ってるんだからいないに決まってるじゃない」

「神社って……神凧さん？」

ちらりと優希を見た。彼女は少し驚いた様子で、首を横に振った。
「私っていうよりも、お父さんかな。昔からあそこに住んでるけど、そんなものがあるなんて聞いたことないって」

「そうなんだ」

口には出せなかったが、とても残念な気持ちになった。

「でも、本当にいたらすごく綺麗なんだろうね」

いてほしいという願望混じりの呟きを漏らす。意外なことに、存在を否定した優希はそれを聞いて微笑んでいた。

「そうだね。虹色っていうぐらいだからきらきらしてるのかな」

「でも所詮狐よ。いたとしても化かされてるだけかもよー？」

優希は頬を膨らませた。

「もうっ。美月ちゃんは夢がない」

「はいはい悪うございました」

美月はどうでもよさそうに軽くあしらって、アジフライをかじった。

冬の冷え込みはどこへやら、午後は陽気に包まれていた。第二高等学校校内校庭では、体操着姿の男女がマラソンに励んでいた。

白のシャツと濃紺色のブルマ、紺色のハイソックスで身を包んだ少女たちが各々息を上げて走っている。春とはいえ、運動すれば十

分汗が吹き出す気温だった。シャツはうつすらと透け、全身はほんのりと熱気を纏っていた。そんな中、綾は生徒の中でも一際呼吸を激しくしていた。

「ひい、ひい、ひい——」

そして何より、男女の中でも群を抜いて足が遅かった。綾はなんとか後続について行こうと、歯を食いしばって足を動かしていた。俯きそうになるも必死に顔を上げると、まとめられた長髪の塊のせいで反り返っているのではないかと思われるほど反動がついた動きを見せた。

二十五分後、綾はコースを外れた生徒たちの群れにようやく飛び込むことができた。

「あああー、もう無理っ」

ふらふらと数歩彷徨った後、適当な場所で手と膝を突いた。まるで過呼吸になってしまったかのように吐息は荒々しい。額から溢れた汗が頬を伝い、地面を濡らした。

「おつかれさーん」

声が聞こえ見上げると、命が満足そうな笑みを浮かべていた。シヤツの胸部は大きく盛り上がり、ブルマはぴっちり張り付いて下腹部のラインを強調していた。さらに、そこから伸びる太腿は健康的に膨らんでいる。綾とは正反対な肉体だった。

「しかし、綾は本当にダメダメだねえ」

「勉強は、あんたよりっ、できるわよ」

「ははは、こういうところは何一つ変わってないね」

命は先にゴールしており、すっかり呼吸は落ち着いていた。

突然、二人の間に人影が差し込む。黒のハーフパンツを履いた長身の男子生徒が立っていた。

「あれ、えっと——」

「橘」

橘と名乗った男子生徒ははきはきと答えた。髪は少し長めで、端正な顔立ちをしている。体つきも逞し過ぎず、かといって細すぎる

わけでもない。クラスどころか、校内でも上位に君臨できるルックスだった。しかし、真顔である。

「あー、橘君か。どうしたの？」

「ああ。水瀬が心配で見に来た」

綾と命はきょとんとして、顔を見合わせた。

「君、一番最後にゴールしたから。すごく辛そうな顔してたし」

「え、ええ」

「平気か」

「う、うん。ありがと」

綾は思いのこもらぬ返事を返した。

橘は変わらず真顔でじっと綾を見つめていた。

「……あれ、他に何か用でも？」

「いや、特に。ただ、水瀬の足は白くて綺麗だと思ってただけだ」

確かに褒め言葉であるのは事実だった。反面セクハラと取られても文句は言えない言葉でもあった。それでも真顔で誠実そうな言葉を紡ぐ橘に対して何も言い返すことができず、同じく真顔と化してしまった。

そして何事もなかったかのように、橘は立ち去ろうとした。

「ね、ねえ橘君。私はどうかなあ、なんちゃって」

命が苦笑しながら問う。田中は三秒ほど眺めた後、口を開いた。

「肉つきがいいな」

「そ、そう」

特に気にするでもなく、橘は去っていった。奇妙な空気だけが残った。

「……新手の告白？」

「どうかな。彼、変わり者らしいしね」

命は今の応対で疲れたと言わんばかりに首を回した。綾は眉をしかめて、今にもブルマが弾けそうなほど肉つきの良い命の尻を見上げていた。

「あんたと同じで、仏頂面なのよ。でも受け答えははっきりしてる

し、文武両道。さっき走ってた時も、ずっと先頭だったわ。ちなみにあたしは二番だったんだけど、何食わぬ顔で汗一つかいてないように見えた」

綾は俯いて、大きくため息を吐いた。

「もう変なのは勘弁してよお」

「何よ、もうって」

綾はわずかに身を震わせた。命はそれに気づいたのか否か、怪訝そうな顔を浮かべていた。

「お、女の子の秘密よ」

「意味分らない」

第三小学校放課後。ランドセルを背負い帰ろうとした白亜は須田に呼び止められた。

「どうしたの？」

「なあ水瀬、虹色の狐見たくないか？」

「えっ、でもないって――」

「神風の事か？ 俺には信じられないんだよなあ。だからさ、俺たちが探して捕まえてこようぜ」

果たして実在しない生き物をどうやって捕まえるのか、甚だ疑問だった。

須田がきよろきよろと周囲を見回した後、耳打ちした。

「実はさ……美月とかには言っていないんだけど、林には小人が住んでるって噂もあるんだぜ」

「小人？」

「もし狐を捕まえられなかったら、小人を捕まえようぜ。きっと美月のやつ、驚くぜ」

白亜は苦笑いを浮かべるしかなかった。

須田はぽつと距離を離れた。

「つーわけだから、明日の一時に林に行こうぜ」

「うーん……」

「大丈夫だって。他にも声はかけてあるからさ」

正直小人には興味が沸かなかった。しかし、転校早々付き合いが悪いの問題だろうと思った。

「わかった。行くよ」

「よっしゃ！　じゃあ、商店街入り口に集合な！」

須田は実に嬉しそうな笑みを浮かべた。

「楽しみだなー」

「う、うん」

小人は虹色の狐以上に非現実だろうと思った。それでも、冒険心がくすぐられたのは事実だった。

「でさ、これから暇か？　サッカーやらね？」

「ごめん。今日はこれから病院に行かなきゃいけないんだ」

「そっか。じゃあ仕方ないな。また明日な」

「うん、またね」

須田に手を振って、教室を出た。

第二高等学校にも放課後が訪れた。校内は部活動に勤しむ生徒で溢れていた。特に今の季節は新入生の見学が多く、どこも賑わいを見せていた。

「疲れたあ」

綾は気だるそうに机に突っ伏した。

「おや、クールな優等生の水瀬さんらしくない行動」

「うるさい。毎度毎度思うけど、本当に体育なんて嫌」

命の言うとおり、普段とはかけ離れた姿は注目を集めていた。

「そういう気分も一新したところで、部活動とか始める気はないの？」

「どれも興味ないし、二年からってのも半端だし」

「寂しいねえ。どうせ帰っても弟いじるだけでしょ？」

「いいのよ、それで」

ゆっくりと上半身を起こし、背伸びをする。

「じゃあせめて見学でもしたら？　なんか引つかかるのがあるかもよ」

「少なくとも今日は無理。これから病院だから」

「そっか。まだ調子悪いの？」

「私は平気だけど、弟がね。付き添いよ」

「過保護ねえ」

「あんたに言われる筋合いはない」

命は気にするでも明るく笑い返した。

綾は鞆を持って、席を立った。

「じゃ、そんなわけだから」

「あいよ。白亜君によろしくね」

第十二話 噂を聞く白亜と運動音痴の綾（後書き）

2011年8月13日…台詞の一部を修正しました。

第十三話 白亜、虹色の狐を探す

白亜が第二の人生を開始した病院——名を『関東総合病院』という。敷地内に一般人や病人の姿はほとんど見えず、歩く人間の大半は白衣を纏った医師だった。大抵の人間はここを病院というよりも、大学か研究施設と思うであろう光景だった。

無料送迎バスに乗ってきた綾がここに来るのは初めてだった。白亜と接点を持たぬよう、頑なに拒否していたからである。しかし、先日の事件が彼の事を少しでも知るべきだと決心させるきっかけとなった。

到着した時は違う場所に来てしまったのかと勘違いするほど、異様な光景が広がっていた。身を引き締めて歩いた。

施設の入館手続きはそれほど厳しくなく、LGOから発行された通行証と身分証明の学生証を見せて、入館許可証を首から下げるだけだった。ただ入り口を守る警備員は一般の病院と異なりバニラを着用し、アサルトライフルを備えている。彼らの横を通る時、綾の顔は緊張ですっかり硬くなっていた。

大型病院にしては人気の少ない総合受付にあるコンピュータで、白亜の所在を調べた。まだ検査中であつた。

検査室前に向かうと、小百合がぽつんと座っていた。綾に気づいて、顔を上げた。

「学校終わったのね」

「うん。白亜、まだかかりそう？」

小百合の横に腰を下ろす。

「もうこれで終わりよ。本当に色々な検査を受けてるみたいね」

「大変そうだね」

「ええ」

しばらく他愛もない会話をして、時間を潰した。

柱時計の分針が半回転した頃、検査室の扉が開いて白亜と上田が

出てきた。

「検査は終わりました。長い時間お待たせして申し訳ありませんでした」

「いえ。それで、白亜の状態は？」

「この場所では落ち着かないでしょうし、診察室でお話しましょう」

上田に連れられてやってきた診察室は、普通の病院のそれと変わらぬごくありふれた内装だった。

「まず、先日の検査結果についてお話します。結論から申しますと、異常は見られませんでした。血液、レントゲン、遺伝子——どの検査結果も正常です」

上田は結果が記された紙を小百合に渡した。白亜は横から覗いたが、聞き慣れぬ単語と何を示しているのか理解できない数字の羅列を見たところでどこがどう正常なのか知ることとはできなかった。小百合もどこか釈然としない表情を浮かべていた。

「では次に、一番の問題である『変身』についてです。白亜君からリスニングを行い情報をまとめましたが、未知の領域を脱することは叶いませんでした」

白亜は、己の状況認識能力の低さに罪悪感を覚えた。

「すいません……」

「いいのよ。あのような状態になってしまっただけは、誰とて自分の事を冷静に分析することなんてできないのだから」

上田に労わられても、罪悪感はなかなか消えてくれなかった。

「そのため、これから話すことは憶測でしかないことをご承知ください」

上田はファイルから紙を取り出した。

「『変身』が起きるきっかけ——それは感情の昂りであると予想しています」

「感情……ですか」

この場の誰もが深刻そうに言葉を飲み込んだ。

「まず、誘拐されエイリアンに恐怖を感じた時。次に、綾さんを救出するという使命感が最高潮に達した時。各々ベクトルこそ違えど、感情の波が大きいのは事実なのです。危機的状況ならば、己の、そして他者の命を守るための心強い武器となるでしょう」

上田は一旦言葉を切り、すっと瞳を閉じた。

「しかし一般生活の場では逆に自身を殺す武器となります。とっさの拍子で感情を高ぶらせ人前で『変身』した場合、混乱は免れないでしょう」

上田の瞳が開き、白亜を捉えた。

「だからといって、彼を隔離するわけには行きません。彼には人間として生きるための権利があるのだから」

綾と小百合も、白亜に目を向けてきた。とても落ち着かなかった。「早急に『変身』について研究し、白亜君が人間らしく生きられる様全力を以てサポートすることはお約束します。ですので、今しばらくお待ちください」

上田は大きく頭を下げた。対する三人も無言で同様に返した。

帰りのバス内はスーツを着た施設関係者らしき人間が数人、白亜、綾、小百合の三人が乗っていた。席はほとんどがら空きで、夕日の光が車内をほんのり赤く染めている。

「お母さん、帰りにスーパー寄ってくわ。先に帰ってていいわよ」

「私も一緒に行くよ」

「あ、僕も」

小百合は驚きで目を見開き、二人を見た。

「い、意外ねえ。白亜ならともかく、綾が自分から言ってくるなんて」

「んー、今まですれ違ってた分、少しは手伝いでもしようかなーって」

小百合はくすくすと笑った

「じゃあ、手伝ってもらおうかしらね。いつもよりたくさん買いま

しょうか」

「いや、それはちょっと。今日体育あって、体が痛いから……」

「あら、それは残念」

二人が笑い合う姿を見て、白亜は暖かい気持ちでいっぱいになった。同時に、昔両親と買い物に出かけた時を思い出し、寂しさも覚えた。

「行ってきました」

翌日。昼食を食べた後、白亜は元気よく声をあげて家を出ていった。

「行ってらっしゃい」

「らっしゃーい……」

綾の声は沈んでいた。

「ああ……」

「そんな情けない声出さないの」

「せっかくの休日……初めて白亜と過ごす休日……」

「別に明日でもいいじゃない。それに白亜だって学校の友達と遊ぶ方が楽しいに決まってるわよ」

綾はクッションに顔を埋め、うめき声を上げた。小百合は呆れてものも言えず、台所で食器を洗い始めた。

商店街入り口。土曜日ということもあって、賑わいを見せていた。そんな中、白亜は一人で須田を待ち合わせていた。

「よお水瀬。待たせたな」

商店街の中から須田と一人の男子が姿を見せ、こちらに手を振りながらやってきた。須田の手にはスーパ―の袋がぶら下がっていた。他にも声をかけたと言っていたにも関わらずその人数はあまりにも少なく、首を傾げざるをえなかった。

「あれ……メンバーってこれだけ？」

「まったくひどいぜ、どいつもこいつも。めんどくさくなったあの、やっぱ狐なんているわけないだのって」

須田がふてくされながら答えてくれた。

「でも、水瀬と村雲はちゃんと来てくれた。ありがとな」

白亜はにこりと微笑み返した。そして、村雲という名前に疑問を覚えた。須田の隣に立つ、茶色がかった黒髪の男子の事だろうと判断した。

「水瀬白亜君……だよな？　僕、村雲司郎。よろしくね」

繊細で弱気な、少年らしくない声だった。体格こそ白亜と同等だったが、声のせいでどうにも小さく見えた。村雲司郎——どこかで聞いた名前だった。

「あっ」

昨日買い物中、綾から聞いた名前であることを思い出した。そして、彼が綾の友人の弟であることも。

「お姉ちゃんがお世話になってます」

司郎は軽く頭を下げた。

「あ、えと、こちらこそ」

状況をうまく飲み込めぬまま、慌てて返した。

「なんだよ、お前ら知り合いだったのかよ」

「ううん、初めて会った」

白亜は即行で否定した。

「んー……まあいいや。行こうぜ。餌も買ってきたし」

「餌？」

「狐つつつたら油揚げ、だろ？」

須田は袋から取り出したのは、ふっくらとした油揚げだった。

「……虹色の狐、だよな」

「へーきだって！　黄色だろうが虹色だろうが狐はこれでなんとなる！」

「なにか武器みたいなものを持ってきた方が——」

「相手がビビって逃げるかもしれないだろ？　ここは親交を深めて捕まえるんだよ」

ただでさえ人数が少なく、かつ対策は油揚げ。早速帰りたくなつた。

「よし、じゃあ行くぞー！」

須田の歩き出した方向は、神風神社とずれていた。

「そっちって神社じゃないと思うんだけど」

「神社から入ったら神風にバレるかもしれないだろ？　だから裏から入るんだよ」

須田はにやりと笑って教えてくれた。

その頃。神風神社には優希と美月がいた。優希は巫女装束で竹箒を持って、境内を清掃していた。こなれた箒捌きで砂や落ち葉が一箇所に集められている。

一方道着に身を包んだ美月は、離れた場所で一心不乱に木刀を素振りしていた。目前には存在しないはずの人の頭部を確実に捉え、踏み込んで打ち砕くように柄を絞って振り下ろす――そして後退し再度打ち砕くために刀身を振りかぶる。幾度と無く繰り返される斬撃の軌道は微塵もぶれず、往復の間隔は常に一定を保たれていた。今の彼女の表情は小学校で見せるものとは真逆であり、それを知るのは道場で彼女とともに剣を学ぶ者、試合で対峙する者、そして友人の優希である。

「終わったあ」

まとめた塵を片付けた後、優希はほっと一息吐いた。

「美月ちゃん」

美月は優希の言葉を見せず、素振りを四往復させた後静止した。流れるような動きで木刀を腰に納め、存在しない相手と一礼を交わす。優希はそんな姿を横目に自宅へ向かっていった。

「今日は何かなあ」

頭を上げた美月はいつもの嘲笑を見せた。

十分後、優希は二つのグラスと一つの菓子鉢を載せた漆黒の丸盆を持ってやってきた。賽銭箱の前に腰を下ろす美月の隣に丸盆を置いて、自分も腰を下ろした。

「……うん、いつものメニューね」

グラスには氷が浮かぶ緑茶が並々と入っており、表面に浮かぶ水滴がコルクのコースターを絶えず濡らし続けている。菓子鉢にはどら焼きと固焼きせんべい、そして色とりどりのマシュマロが並んでいた。

「いただきます」

優希は両手を合わせた後、冷茶を飲んでからマシュマロを口に放り込んだ。

「んーっ」

目を瞑り口内に広がる甘さを堪能する様は、幸せの絶頂に達していると言っても過言ではなかった。

美月は半ば呆れつつ冷茶を飲んでいた。

「あんた、ホントに好きねえ」

「おいしいんだもん」

「まあ気持ちは分かるわよ。あたしも一時期馬鹿みたいにプリン食べてたし。でもねー」

美月は悟ったような目で狭く眩しい空を見上げた。

「ほどほどにしないさい。太るわよ」

「だいじょーぶだよ。ちゃんと毎日体重計載ってるけど、太ってないよ」

「ふうん」

優希は再びマシュマロを頬張った。口内のマシュマロとともに、顔もとろけた。

第十四話 白垂、リジェネレーターと出会う

神社から大きく迂回した先は民家の少ない場所だった。そんな中、林へと続く道がひっそりと切り開かれていた。

「この辺に住む奴はここから林に入るんだ」

須田に連れられ、いよいよ林に足を踏み入れた。

春の陽気に誘われた昆虫たちが活動を始めたからか、林全体から生命の気配を感じ取れる。

「夏になるとカブトやクワガタがわんさか捕れるんだ」

そう話す須田の表情はわずかに曇っていた。

「二年前はこんなに虫はいなかった。去年から突然なんだよ。周りの奴は疑問に思っただけだよ」

「もしかして、虹色の狐のせい……なのかな」

司郎が不安そうに呟いた。

「かもな。だからそれを確かめるために今回やってきたってのもある」

周囲はすっかり樹木しか見えなくなり、空から差し込む細い陽光だけが場を明るくしていた。

「虫捕りってさ、なかなか見つからないからこそ見つけた時の喜びがでかいと思うんだよ」

須田が真面目な口調で語り始めた。

「だからさ、今の状況って俺は好きじゃないな」

美月にかかわれ、うろたえていた須田はそこにはいない。同じ学年、体格であるはずなのに、自論を語る背中では自分よりも遥かに大人に見えた。

「この辺でいいかな」

獣道を抜けた先に、草木のほとんど生えない小ぢんまりとした空間が存在していた。

「よーし、ここに……」

須田は袋から油揚げを取り出して、無造作にばらまいた。

「後は隠れて待つだけだ」

正直この程度で捕まるとは思っていなかったが、白亜は笑って返した。

「村雲、お前も隠れ――」

司郎は何故か白亜たちに背を向けていた。背中がわずかに震えており、じりじりと後ずさっていた。

「き、き、き――」

二人は顔を見合わせ、司郎の肩越しを眺めた。

「あ」

小型犬ほどの大きさの狐がいた。しかし一般的なものと同様、黄色の毛並みだった。

「なんだよ、ただの狐じゃん。脅かすなよ」

須田はがっかりしたようにため息を吐いた。

「村雲もこの程度でビビるなよ」

「で、でも」

司郎は狐に魅入られてしまったかのように、視線を外すことはなかった。

「この狐、なんか、目が怖いよ」

「目？ 別に普通の釣り目じゃん」

「で、でもさっき確かに目が光ったんだよっ」

狐の瞳は琥珀色で澄んでいる。突如、狐は白亜に視線を向けた。すると瞳は一瞬で燃えるような赤に変貌した。

「っ！」

急に胸の高鳴りが強くなる。嫌な予感がした。

「みんな、下がって！」

得体の知れない恐怖心に煽られ、白亜は叫んだ。

「お、おい、水瀬までどうし――」

「いいから！」

須田と司郎は勢いに押され、おずおずと狐から距離を取った。狐

は変わらず白亜を凝視していた。

突然、肌に静電気のような痛みを感じた。他の二人も同様なのか、顔を歪ませていた。

鼓膜に電気が弾けるような音が伝わる。それは眼前の狐から放たれていた。

狐の体は紫電を散らして白く発光していた。間もなく全身は虚無の白に包み込まれ、膨張し始めた。

「な、なんだよ、こいつっ！」

ようやく痛みが和らいで、須田は目を見開いて叫んだ。

白の塊は膨張を続けた。そして、白亜たち人間を遥かに凌ぐ大きさになったところで止まった。

白は微粒子となって風に吹かれるように散っていった。

再び狐が姿を現した。しかし、先ほどのものとは色も形も大きさも違っていた。そもそもこれを狐と呼んでいいのかどうか逡巡するほどの変わり様だった。

「こ、こ、これっ」

司郎はがたがたと震えながら、意味を成さない言葉を呟いた。

「こいつが――」

須田は歯を食いしばりながら異形を睨みつけた。

「虹色の、狐っ!？」

白亜の胸の鼓動は今もなお強く高ぶっている。

「ねえ、美月ちゃん」

優希と美月は休憩を終え、うららかな境内をゆったりと歩いていた。

「虹色の狐って本当にいないのかなあ」

「いるわけないでしょ、馬鹿馬鹿しい。そもそも、あんたのお父さんが言ってるんだから間違いないっしょ」

優希は首を傾げながら考え込んでいた。

「男子って本当にいつまで経ってもガキよね。あたしたち、来年で中学生なのよ。もう子供みたいなことやってるわけにいかないの」

「そ、そうだよね」

美月は腰に携えた木刀を握り締めた。

「美月ちゃん、木刀置いてくれば良かったのに」

「うーん、分かってるんだけどどうも引き締まらないというか」

「境内じゃ使わな——」

優希は歩みと言葉を止めた。美月もすぐに怪訝そうな顔を浮かべた。

ケープを羽織い四肢の生えた、サッカーボール大のぬいぐるみが落ちている——いや、自立していた。球体状の頭部はブラックホールの如く吸い込まれそうな黒で構成されており、金色に光る二つの楕円の瞳は二人をじっと見つめていた。そして何故か鮮やかな龍が描かれたラーメン用どんぶりを被っていた。

「なに、これ？」

「わ、分からない」

美月は反射的に木刀を抜き、構えていた。

「美月ちゃんっ!？」

「こいつ、生きてる。目を見れば分かるわ」

優希を後ろに下げ、美月は一步前に出た。

ぬいぐるみは変わらず棒立ちだった。金色の瞳は2人への興味をなくし、眼前の木刀に視線を注いでいた。

穏やかな風は緊張で硬直した肌をいたずらに撫で、陽気の癒しは精神集中の妨げとなっていた。

状況が変わらぬまま、時間は確実に過ぎていく。両者とも動き出す気配はなかった。

——林がざわめいた。そして、木々で休む鳥たちが一斉に羽ばたき始めた。

美月は木刀を振り上げた。同時に、ぬいぐるみも美月めがけて跳躍してきた。その速度は木刀のそれを上回っていた。

「速っ——」

動揺が走った頃、木刀は頂点に達した。つまり、速度はゼロに近い。しかしぬいぐるみの勢いは止まらず、美月を飛び越え木刀へ突き進んでいた。

手から木刀がすりと抜き取られる。ぬいぐるみは自身の体格を遙かに超える長物を軽々と掴んで弾むように着地した。そして脱兎のごとく逃げ出した。

「あっ！」

「あたしの木刀！」

美月はすぐに駆け出した。

「待ってよお！」

優希も慌てて美月の後を追った。

ぬいぐるみは林に向かってただ一直線に進み続けていた。ずんぐりとしたフォルムからは想像できないような軽快な足捌きだった。

「おいおい、こんなでけえなんて聞いてねえぞっ」

須田にもとうとう恐怖の色が表れ始める。

「ど、ど、ど、どうする、の」

司郎はすっかり須田の背中に隠れてしまった。

白亜はただ無言で狐と目を合わせていた。

全身を被う無数の毛は明らかに金属で構成されており、色彩豊かだった。しかし、虹とは程遠い外観である。

とにかく目を惹かれるのは、後部から生える九つの尻尾だった。これらは金属ではない。エネルギーの束である。繊細で優雅、かつ多色のコントラストは美しいの一言だった。尻尾などと呼んではい

けない、これこそ『虹』である――

ようやく胸の高まりの正体に気づいた。さすがに三度目となると、否が応でも脳が反応していた。

「二人とも逃げて」

白亜は静かに口を開いた。

「逃げてって……水瀬、お前はとうするんだよ！」

須田が叫んだ。司郎はただその様子を震えながら見つめるだけだった。

「いい作戦を思いついたんだ。それは僕にしかできない」

「なんだよそれ――」

白亜は須田の反論を許さないために、きつと睨んだ。

「さっきの入り口で待ってて」

「……」

須田はわずかばかり目を逸らして悩んだ。

「……分かった。絶対無事に帰ってこいよ」

納得が伝わらない睨みを返された。そもそも納得されるつもりで言った言葉ではなかったため、さほど心に痛みはなかった。

「行くぞ、村雲」

「う、うん」

去り際に、司郎はちらりと白亜を見た。

「水瀬君、気をつけてね」

果たして司郎がどのような心境で言葉を紡いだのか知る術はなかった。それでも、白亜を気遣っている言葉であるのは事実だった。

白亜はにこりと笑って、頷いた。

二人が林の奥まで駆けて行き、目視で確認できなくなったところで狐と向き合った。

九つの虹が陽炎のように揺らめいていた。

「君は、誰。エイリアンなの」

白亜は落ち着いた声で問う。狐の細い瞼に埋もれた、宝玉のような目玉が蚊の鳴くような機械音を発した。間もなく狐の口部が開い

た。

「私は、貴様だ」

中性的で、年季が入った人間の声が聞こえた。

「どういう意味……？」

白亜が反応したのは狐が人語を発した事ではなく、言葉の内容だった。

「お前の胸に埋め込まれたそれが教えているだろうか？」

心臓が跳ね上がり、思わず自分の胸を掴んでしまった。狐が何故リジェネレイトの事を知っているのか、と。

「――まさか」

「ようやく察したか」

狐は微動だにしなかった。

「私も、リジェネレイターだ」

「待ちなさいっ！」

美月は懸命にぬいぐるみを追っていた。袴に足を取られ、かつ整備されていない土のせいで全力を出すことはできなかった。今のところぬいぐるみの姿を視界に捉えているが、少しでも速度を緩めれば見失う可能性が高かった。しかも、ぬいぐるみは小回りが利くのか木々の隙間を右往左往走り回っている。

「はあっ、はあっ、もう、だめっ……」

すっかり息が上がってしまい、膝に手をついてしまった。ぬいぐるみは走りながら美月の方向へ首を回した。金色の瞳は横の曲線となっており、『喜』の感情を表していた。

「あん、にやろおっ！」

ぬいぐるみが視界から消え再び走り始めようとした。

「キャッ――」

ぬいぐるみが消えた方向から、マスコットキャラクターが発するような可愛らしい声が聞こえた。美月は急いでそこに向かった。

何の変哲もない樹木の根本に、ぬいぐるみが仰向けで倒れていた。

瞳は渦巻き状となってぐるぐると回転していた。その横に木刀が転がっていた。

「まったくっ」

美月は怒声を上げて木刀を掴み取った。そしてぬいぐるみの前に立って、口をきゅっと締めて見下した。

「美月、ちゃんっ」

後ろから声が聞こえ振り向くと、すっかり疲弊した優希が樹木に手を突いて立っていた。

「取り返したわよ」

美月は自慢げに木刀を見せつけた。

「よ、よかったねえっ」

優希は呼吸混じりで喜んだ。

「にしても、なんなのよこいつは」

美月はいらいらしながらぬいぐるみを木刀でつついた。反応はなかった。

「エイリアン、かな？」

「ないない。こんな間抜けな面したエイリアンなんて聞いたことないわよ」

美月が呆れたように笑っていると、ぬいぐるみの瞳は再び楕円状に戻った。そして上から降り注がれる美月の凝視に気づいた途端、楕円の弧が波打ち始めた。

「ヒィッ！」

情けない悲鳴を上げてじりじりと後退するが、すぐ樹木に衝突してしまった。

「美月ちゃん、許してあげたら？　なんか可哀想だよ」

「駄目よ。甘やかすと調子に乗るわ」

「でも、震えてるし……」

「どうせ演技よ。自分が可愛いから、ちょっと怯えて見せれば許してもらえるところでも思ってるのよ」

美月は木刀を突きつけた。ぬいぐるみは尻餅をついて、がたがた

と震え続けていた。

「き、君がリジエネレイター……!?!」

「そうだ」

リジエネレイトは『人間』を生き返らせるもの——上田は確かにそう言っていた。それが何故動物に埋め込まれているのか。

「私は貴様らの礎」

「いし……何?」

狐はやれやれといった様子で首を振った。

「若いな。分かりやすく言えば、実験体だ。お前たちがリジエネレイトを埋め込んでも普通に生きていられるのは、私たちのおかげだと言っても過言ではない」

「……全然普通じゃないよ」

狐は静かに嘲笑した。

「変身の事か? そんなもの些細なものではないか」

「些細って……僕にとっては邪魔なだけだよ」

「ほう。何万という死体の上に立つお前がそれを言うか、愚かな」

何万の死体——何を言っているのか理解できなかった。

「リジエネレイトは最初から人間に適応できるものではなかった。故に私たちを使って改良実験を行ったのだ。多くの同胞が苦痛に顔を歪め、絶望の叫びを上げながら死んでいった。そして、ゴミのようになんて廃棄された」

狐の爪が土にめり込んだ。

「貴様のせいで、多くの動物が死んだのだ」

「ちよっ、ちよっと待ってよっ!」

覚えのない恨みを買われ、白亜は狼狽えた。

「僕は何も知らない! いきなりそんな事言われても——」

「知らぬ事こそ罪の証だ!」

狐は牙を剥き出しにして唸り始めた。

「お前のような人間にリジエネレイトはふさわしくない。私が貰い

受ける」

狐の後ろ足に力が込められた。飛びかかってくるに違いないと思
い、白亜の全身に冷や汗が吹き出した。

その瞬間、全身に熱が駆け巡る。変身の前兆だった。

視界の光景が二つ変化した。一つはいつものような文字数字の羅
列が表示されたこと、そしてもう一つは狐が忽然と姿を消したこと

――

右の二の腕に激痛が走り、手先の感覚が喪失した。足下から落下
音が聞こえ見下ろすと、白い小手に包まれた右腕が土の上に転がっ
ていた。

「温いな」

真後ろから狐の声が聞こえた。慌てて振り返ると、九つの虹が変
わらぬ様子で揺らめいていた。

「しかも、なんと醜い容姿だ。まるで人間の皮を剥いだような――」
「いっうなっ！」

感情的に声を発してしまった。ただでさえ変身したくない上に、
容姿まで馬鹿にされた。さらには覚えのない恨みまで買われて、す
っかり冷静さを失っていた。

「なるほど。そのような変異体では確かに普通とは言えないな。尚
更処分する必要がある」

一本の尻尾が白亜に向いたかと思った瞬間、高速で伸びて右太腿
を貫いた。

「クっ――」

食いしばるように耐えなければ意識が飛びそうな痛みで、膝を突
いた。腕と腿から溢れ出す銀血が土を濡らす。

「すぐには殺さない。死ぬのは、息絶えた同胞の数だけ苦しんでか
らだ」

言葉の意味を瞬時に理解することができ、頭が恐怖に染まってい
く。すなわち拷問の始まりである。

強い。先日戦ったホメロスというエイリアンでさえ強かった。今

白亜の眼前に君臨する虹色の狐は、それを遙かに凌駕している。

現状を打破すべく、思考を巡らせる。レーザーガンは――使っ
てはいけない。林の中であれほどのエネルギーを放出すれば、火事になっ
てしまう。そして何より、命中させる自信が皆無。狐の機動力がホメロ
スの比ではない。ではレーザーソードは――使うだけ無駄だと判断した。
右の腕も足も破損し、動くことすらままならない。明らかに詰んでいた。

先ほどとは別の尻尾が狙いを定めた。今の白亜に出来ることは、
尾先をじっと睨んで痛みで意識を奪われぬよう耐えることだけだっ
た。

尻尾が大気を焦がして伸長した。心を強く持ち、身構えた――

肉薄した尾先は微粒子となって碎け散り、白亜の装甲を軽く焦が
した。痛みはなく、視界にも損傷表記はない。

狐を見るとその視線は白亜を捉えていなかった。しかしその先は
白亜の右前方であり、何者の気配も感じ取ることはできなかった。
不審に思い、白亜も視線を動かした。

「エッ――」

笠を被った、群青色の人間がそこにいた。

第十五話 白亜、拒絶される その二

「向こうの方、明るくない？」

優希はその方向を指差した。周囲の暗さに比べて、ぼんやりと明るい部分が見えた。

「何かしら？」

美月はちらりと目配せした。

ぬいぐるみはそれを確認するなり、すぐに立ち上がって大きく飛び上がった。

「あっ、こいつっ！」

美月は慌てて追いかけようとしたが、ぬいぐるみは樹木から樹木へと飛び移りあっという間に姿を消してしまった。

「まったく、なんなのよあいつ！」

美月は怒り心頭で木刀を振って風を薙いだ。

「でも木刀は取り返せやし、これでいいと思うよ」

優希は苦笑いを浮かべていた。

「あたしがすつきりしないのよ。……まあそれよりもなんなのかしらね、あれ」

二人は困惑しながら眺めていた。

「もしかして、虹色の狐かな」

「だから、いるわけないって」

「そうかなあ」

優希は納得いかないのか、首を傾げていた。

「なんにせよ、気になるわね。行ってみましょう」

「ええっ」

「あんただって気になってるんでしょ？」

「う、うん。でも、危ないかも——」

「その時はあたしが守るわ」

美月は真摯な眼差しで優希をじっと見つめた。

間もなく優希はこくと頷いた。

「――美月ちゃんがいるなら大丈夫だね。行こう！」
「よし！」

白亜と狐の間に割って入る鋼人――不思議、としか言いようがなかった。

まず目に入ったのは黄土色の笠だった。時代劇でしか見たことがないそれは、今の時代ではあまりに異質だった。笠の下から見えるのはヒロイックなデザインのフェイスカバーだった

光を吸い込むような暗い群青色の装甲が細身の四肢を覆っている。間接部位は大きく開けており、防御よりも運動性を重視しているのが分かった。

そして、両手で一本の日本刀が握り締めていた。薄暗闇の中、見ているだけで斬り裂かれてしまいそうな鋭い光を放っている。白亜を狙った狐の尻尾が振り下ろされた刀身の境界線を越えていないことから、尻尾は鋼人によって断たれたと判断して問題はなかった。

彼をA2と判断するのは難しかった。まず一般的に知られていないフォルムであるのと、笠を被っている様が道化師姿のホメロスを髣髴とさせるためエイリアンである可能性もある。

しかし、これらは些細な違和感でしかなかった。

鋼人に『気配』がない。本来地球上の生物やエイリアンは、体温や呼吸といった『気配』で存在を認知できる。しかし、眼前の鋼人にはそれが何一つ感じられなかった。視界に群青色の装甲を纏った人型が見える――ただ、それだけだった。「見えるのにいない」という、矛盾に満ちた現実だけが存在している。

「貴様は……」

狐の言葉は明らかに鋼人に向けられたものだった。

「名無しの権兵衛」

鋼人は視線を刀身に向けたまま、静かに答えた。芯が通った男性の声だった。

ゴンベエ——白亜はそれを鋼人の名前であると認識した。

「何故邪魔をする」

返事はない。

「どけ」

三本の尻尾が鞭のようになって、ゴンベエの装甲を抉り取らんと唸りを上げた。

鞭が装甲に触れる寸前でゴンベエは刀身を返し、一閃——

白亜には一度の切り払いにしか見えなかった。にも関わらず三本の尻尾は同時に切断され、尾先は微粒子となって拡散した。

煌めきの中、微塵も動くことなくただ狐を凝視するゴンベエ——

「……キレイだ」

白亜は自然と声を発していた。

「手練か」

狐は歯をむき出しにして、後ろ足に力を込めた。白亜は、先ほど自身が受けた駿足の一撃を繰り出すのだろうと予測した。

対して、ゴンベエは刀を左腰の鞘に納めた。そして再び柄を握り、左足を下げて腰を落とした。

これも時代劇で見たことがある光景で、『居合い』と呼ばれる技であった事を思い出した。

春中であるにも関わらず、空気が凍り付いているのを感じる。両者は互いのみを視界に映し、決着の瞬間を待ちわびている。距離は離れているのに、その間には髪の毛一本の侵入すら許されない空間がそこにある。

一分、二分——刻々と時間は過ぎてゆく。白亜の流血はすっかり止まっていた。

果たしてどれほどの時間が経過したのだろう。狐は構えを解いた。

「リジエネレイターよ、命拾いしたな」

白亜は哀れみを受けているのだと気づき、怒りと悔しさがこみ上げた。

「次出会った時は容赦せぬぞ」

狐は背を向け、林の奥へと姿を消した。

空気がようやく溶け始めた。しかし、眼前に見えるゴンベエの存在が気の緩みを許してくれなかった。

「アの、アリガとウございマシタ」

樹木に寄りかかりながら、白亜は感謝を述べて頭を下げた。ゴンベエは振り向かなかった。

「……君に死なれては困るからな、水瀬白亜」

自身の名前を呼ばれ、緊張が走る。

「なんで、ボクノなマエヲっ」

白亜の質問には、木々のざわめきのみが反応した。

「あれっ……!？」

視界に存在していたはずのゴンベエが忽然と姿を消した。まるで瞬間移動したかのようだった。

林には白亜だけが取り残された。

「ツっ……」

右腕は未だなお痛みを発している。切断された部位を左手で拾い上げ、切断面と合わせてみる。

「……またくツつくカナ？」

先日のようにコードが自動で延びて結合してくれなかった。駄目元で切断面に意識を集中してみる。すると、耳障りの悪い奇音とともに指の感覚が蘇ってきてとうとう平常と同等に回復してしまった。「ナンナンダろウ、このカラだ……」

回復した喜びよりも、自身が既に人間ではない不安が遥かに上回った。

気づけば、右腿の怪我も治っていた。

視界の文字がフェードアウトし、五感も戻ってきた。肌色と化した手の平を見つめ、ようやく変身が解けたことに安堵した。

須田たちのところへ戻るため歩き出そうとした時、人の気配と視線を感じた。

「誰っ!？」

再び警戒心を強め、周囲を見渡す。木々が生い茂る薄暗闇の中、白と赤を確認した。間もなく隣の紺色にも気づく。

「あっ——」

全身に冷や汗が噴き出す。そこには、見覚えのある顔が二つ並んでいた。

「陣野さん、神風さん……!」

今の姿を見られたのではないかと思い、心臓が不快な鼓動を始める。しかし、もしかしてというわずかな希望も存在していた。

「あ、あの——」

一歩近づくと、二人も一歩後ずさった。希望にひびが入る。

改めて二人を眺めた。この距離でも喜怒哀楽の判断は十分できた。まず優希は——美月に寄り添い完全に怯えていた。そして美月は——怒気を放ちながら木刀を構えていた。希望は未だ辛うじて形を保っている。

話せば分かってくれると信じて、口を開く。

「神風さ——」

「来ないでっ!」

震えた叫び声が白亜を拒絶した。今の優希はすぐにも泣き出しそうな気配だった。

「聞いて、僕は——」

「水瀬っ!」

美月に怒鳴りつけられ、すっかり萎縮してしまった。

「どうせ須田に誘われて来たんでしょう。とにかく今日は帰ってちようだい」

「で、でも——」

「そのまま右手にまっすぐ進めば標識が見えるから、後はその手順通りに行って。あんたらが入ってきた場所に着くから」

「あの、あれは——」

「早く消えなさい! 叩くわよ!」

白亜に発言権は存在しなかった。悔しさを胸に、彼女たちの前から去ることにした。

一人とぼとぼと進む中、木々のざわめきが自分をあざ笑っているように聞こえた。涙がこぼれそうになるのを必死にこらえ、ひたすら足を動かした。

美月の言うとおり樹木に標識がくくりつけられており、林の出口を示す矢印が記載されていた。優希と美月の表情が脳裏に焼き付き、気落ちする中出口を目指した。

やがて見覚えのある道が表れ、進んでいくと徐々に明るくなっていく。

「あっ、水瀬！」

ふらふら歩いていると、白亜を呼ぶ声が聞こえた。顔を上げると、須田と司郎が待っていた。

「大丈夫かっ!？」

二人はすぐに駆け寄ってきて、心配そうな顔で迎えてくれた。

「なんか顔色が悪いみたいだけど……」

「おい、なんかやられたのか？」

わずかな間の後、白亜は必死に作り笑いを浮かべた。

「うん、平気」

二人は異常を察知したのか、顔を見合わせた。

「と、とりあえず、今日はもう帰ろうぜ」

須田が肩を貸してくれたが、白亜はふるふるすると首を横に振った。

「大丈夫、だから」

重苦しい空気が漂う中、三人は無言で林を後にした。

白亜が目の前から姿を消したことを確認し、美月は木刀を納めた。
「優希」

美月は優希を見ずに、白亜が立っていた場所を睨んでいた。

「明日でも明後日でもいいから、早く水瀬に謝りなさい」

「えっ」

未だに泣き出しそうな優希の声は震えていた。

「謝るって何を――」

「水瀬を拒絶したことよ」

美月の言葉が理解できないのか、ただぼかんと佇んでいた。

「で、でも、水瀬君は――」

「エイリアンよ。あんな醜い姿はエイリアン以外の何者でもないわ」

「じゃあなんで」

「友達だからよ」

美月の口調は常に落ち着いていた。

「とも、だち……？」

「水瀬が人間だろうがエイリアンだろうが、あたしたちの友達ですよ」

「でもエイリアンだよ？　もしかしたら何かひどいことを……」

美月は呆れたように溜息混じりに首を振った。

「少しは考えなさいよ。ちょっと前、あんたたちは二人きりになったじゃない。にも関わらず、優希はこうやってピンピンしてる」

「あ――」

「それにさっきだって、襲ってくるどころかビビってたし」

「で、でもさっき美月ちゃんだって水瀬君のこと――」

「優希のためを思ってたのことよ。もしさっき、水瀬は友達だから平気なんて言ったところで今みたいに冷静に聞けた？」

「う……」

「でしょ？　だからあの場は優希の側についたのよ。あんたが取り乱さないようにね」

優希はすっかり意気消沈していた。

「とにかく今日はもう帰りましょ。疲れたし」

美月は背伸びをしながら、帰路についた。優希もとぼとぼと後に続いた。

「……私がひどいことしちゃった」

「それが分かってるなら、さっさと謝ること。あいつが許してくれるかどうかは知らないけどね」

美月が歩みを止めた。

「それに、試したのよ」

「え？」

「これから水瀬がどう出てくるかをね」

「これはどういうことよ……」

カーテンは閉められ、照明の柔らかな光が隅々にまで行き渡った水瀬家のリビング。綾はクッションに顔を埋めていた。

「帰ってきたと思えばすぐ落ち込んでるし、どうせご飯食べれば治るだろうと思ってみたら変わらずで、部屋に籠もっちゃったし」
深いため息がクッションに吸い込まれていった。

「こういう時のお姉ちゃんじゃないの？」

台所から、小百合の声と食器の擦れる音が聞こえた。

「でもさあ、こういうのって部外者が口出ししちゃいけない気がするし……」

「そこは核心を突かずに、やんわりといくのよ」

「簡単に言ってくれるけどさあ」

綾はごろんとソファに転がった。

「とにかくアクションを起こしてみないことには何も変わらないんじゃない？ このままだと、せっかく楽しみにしてた日曜日が台無しになっちゃうわよ」

「ううー」

しばらくもぞもぞとしてから、ソファから起きあがった。

「どうしたらいいのよお……」

すっかり困った顔で、リビングを後にした。

夕食をただ胃に詰め込み、逃げるように自室に入った。そして、

自重に身を任せてベッドに飛び込んだ。

「どう、しよう」

目を瞑ると、昼間の光景がフラッシュバックした。すぐに目を開き、怯えながら縮こまった。

「きつと月曜日には――」

美月のことなのできつとすぐに広めるに違いないと思った。もう学校生活は絶望的であることに恐怖した。

眉間にむずむずし始め、涙が溢れ出した。

その時、部屋にノック音が響く。すぐに目元をぬぐった。

「入っても、いいかな」

綾の声だった。

「……一人にさせて」

か細い声で返す。返事はなかった。もしかすると声が小さかったのかもしれないと思い、小さく深呼吸する。

「一人にさせてよ――」

弱々しく叫ぶと同時に、ドアが開いた。

「あ……」

綾はやってしまったと言わんばかりに啞然としていた。

「そ、そのね、てっきり寝ちゃったのかと思って」

視線を逸らし、あたふたと説明し始めた。白亜は怒るべきなのか悲しむべきなのか分からなくなってしまった。

「あー、えーっと……」

「もういいよ、入って」

白亜は呆れながら促した。そして壁に顔を背けた。

「ご、ごめんね」

綾は申し訳なさそうに苦笑しながら、ベッドの近くに座り込んだ。「あのさ、何かあった？」

何かがあったのは事実だった。しかし、それを綾に話す気にはなれなかった。

「私じゃ頼りにならないかもしれないけど、話くらいなら聞けるか

ら」

心は動かなかった。

「……そっか」

綾の声が急に沈んだものへと変わった。

「所詮、義理の姉だもの。仕方ないよね」

違う。ただ今は一人でいたいだけだった。決して綾を姉として見ていないわけではない。これではなんのために仲直りをしたのか分からない――

「違うよっ、お姉ちゃんはお姉ちゃんだよ」

首を回し誤解を解こうと試みたが、何故か綾はいじわるそうに微笑していた。即座にやられた、と理解した。

「はぁ……」

こうなった以上、引っ込みがなくなってしまった。

「話せる範囲でいいから」

「……うん」

白亜はぼつりぼつりと、昼間の出来事を説明した。綾はただ静かに頷きながら話を聞いてくれた。

事の一部始終を話終えた頃には、すっかりくたびれてしまった。

「僕、どうしたらいいんだろう」

「……難しいわね」

綾も深刻な面持ちで考え込んでいる。

「ただ言えるのは、ある程度の事情説明は必要ってことね。さすがにリジェネレイトの事は話せないけど」

「でも……分かってもらえるかな」

「うーん」

そもそも謝罪に向かったところで彼女たちは受け入れてくれるのか――不安要素があまりにも多すぎた。

二人揃って答えが出せず、場は沈黙してしまった。

とにかくこのまま月曜日を迎えることだけは避けたい。白亜は決心する。

「……明日謝ってくる。駄目かもしれないけど、何もやらないのはもっと嫌だから」

微笑して頷いてくれた。

「例え駄目で辛くても私が——ううん、お父さんとお母さんだっている。なんとかしてみせるわ」

それが何なのか分からなかったが、綾の笑顔は確かに白亜を勇気づけてくれた。

「勝手に押し掛けて、ごめんね。何かあったらいつでも呼んでいいから」

綾がゆっくりと立ち上がり、部屋から立ち去ろうとした。白亜は半身をすっと起こした。

「お姉ちゃん」

白亜の声に反応し、艶やかな黒髪を揺らして振り向いた。

「ん？」

「ありがとう」

感謝の言葉をしっかりと味わうように頷いた。

「どういたしまして」

部屋の扉を閉めた。

「白亜、がんばれ……！」

綾はささやくような声で扉の向こうの弟を応援した。

自分の部屋に戻ろうとした時、ぴたりと動きを止める。

「そういえば明日行くって——」

頭を抱えて呻きを上げた。

翌日。緊張でよく眠れず、胃は朝食をわずかに収めることしかできなかった。そんな不調状態でも神社に向かわなければならなかった。

住宅街は、眩しい陽光と休日特有の静寂に包まれていた。本来素敵な一日の始まりを告げるこの光景は、今の白亜にとって嵐の前の

静けさでしかなかった。

神社へ続く石段が見えてきた。緊張が高まり、口内が乾き始める。しかしよく見ると、装束姿の男性が入り口に立っている。近づくにつれ、男性は義父と同年代だろうと予想できた。そして彼はどこかそわそわと落ち着きがなかった。

「すみません、この神社の人ですか？」

軽く会釈をして、尋ねた。

「ああそうだが……君は？　優希の学校の子かな？」

優希という名前が出てきたことで、この男性が優希の親類である可能性が高くなった。

「はい。同じクラスの水瀬白亜と言います」

「クラスの子か。私は優希の父親だ。いつも優希がお世話になっているよ」

優希の父は義父よりも男らしい顔つきをしていた。その笑顔は優しそうだったが、無理をしているのは明らかだった。

「あの、神風さんいますか」

瞬時に笑顔が消え去る。

「それが、ちょっと大変な事になっていてな」

「たい……へん？」

急に胸騒ぎがする。

「今朝、あの子は捜し物があるとかで林に入っていた。その後すぐ、LGOから連絡が入ってきたんだ——林にエイリアンが侵入した、と」

エイリアンという単語を聞き、全身が強ばった。

「携帯電話に連絡したのだが、全く返事がなくてな。危険度は低いエイリアンだと言っていたが、いてもたってもいられなくなってLGOに緊急要請をした。早くこないかと、今こうして待っているのだが……」

優希の父はすっかり沈痛な面持ちとなっていた。

「そういうわけなんだ。まあ明日は普通に登校できるはずだから、

今日のところは引き返してもらえないだろうか。本当にすまないね」
笑っているのか苦しんでいるのかよく分からない顔で祈願された。

「あの」

「ん、何かな」

「僕、捜してきます」

首を横に振られた。

「ありがとう。気持ちだけ受け取っておくよ。もし何かあったは、
君のご両親に申し訳が立たない」

「でも――」

「大丈夫だから」

彼の顔を見ると、とても押し切る気分にはなれなかった。白
亜は渋々頷き、引き返した。

第十六話 屈辱の醜惡機人

神社の石段が見えなくなり、町中をとぼとぼと彷徨う。すれ違う人々は皆休日を楽しんでいるように見える。

「LGOが来るんだし、大丈夫だよね……」

誰に気づかれることもないほど小さい声で呟いた。自身を納得させるため、そして変わらぬ胸騒ぎを鎮めるためでもあったが、共に効果はなかった。

侵入したエイリアンも気がかりだったが、何よりも虹色の狐の事が頭から離れなかった。仮にLGOがエイリアンを倒せたとしても、もしあの狐が現れれば敗北してしまうかもしれない。決してLGOを弱いと評価しているわけではなかった。強過ぎる——実際に対面し、手も足も出なかった白亜だからこそできる心配だった。

そもそもLGOは狐の事を知っているのか、さっき優希の父に伝えておくべきだったのではと後悔する。しかし二日前の給食にて優希は、父が狐を信じていないと発言したことを思い出した。話したところで、信じてもらえないであろう。

とにかく戦場と化する林から早く優希を助け出したかった。林に入ろう——そう決心した。白亜は神社への道には戻らず、むしろ離れるように迂回する。目指すは、昨日須田たちと入った場所である。

虫の気配も少なく、朝日と静寂が支配する早朝の林。そんな中、私服姿の優希がせわしなく視線を巡らせていた。普段の彼女らしくない、動きやすさを重視した活発な印象を与える容姿であった。

「ない……」

優希の大きな瞳はすっかり潤んでいる。細い首筋には玉の汗が浮かんでおり、如何に必死であるかを物語っていた。

「あれだけは、なくしちゃ駄目なのに……」

見えるのは、立派に成長した樹木の列と地面を形成する腐葉土、

そして誰に咎められることもなく自由気ままに伸びる雑草であった。それ以外にはごみ一つ存在していなかった。

「きゃっ」

優希は何かにぶつかった。伏し目がちで捜していたため、それが何であるのかすぐには理解できなかった。

「大丈夫かい、お嬢さん」

優希が顔を上げると、黒のハットとスーツ、そしてサングラスを着けた長身の男が目の前に立っていた。周囲の風景とはあまりにもミスマッチな外見に思わず身構えてしまうが、自分の行いに気づいて解除する。

「ご、ごめんなさいっ」

優希はぺこぺこ何度も頭を下げた。

「ははは、いいんだよ。それにしても、こんな朝早くからどうしたんだい」

男の声質と口調は、共に若々しかった。

「あ、えっと……捜し物を」

「捜し物？」

男の口元がつり上がった。

「奇遇だねえ。僕も捜し物を求めてここに来たんだよ」

「そ、そうですか……」

優希は目の前の不審者からすぐに立ち去りたいと言わんばかりに、そわそわと視線を迷わせた。

「これも何かの縁だ。一緒に捜さないか——」

「け、結構ですっ」

きっぱりと断った。

「そうかあ、それは残念だよ。まあ仕方ないか」

これで終わる——顔の緊張が緩んだ。

「でもせめて、僕の捜し物がここにあるのかどうかぐらいは尋ねてもいいかな」

優希は再び気を引き締めた。

「君は、虹色の狐って知ってるかな？」

林の入り口には、誰もいなかった。白亜は周囲を気にしつつ、侵入した。

胸騒ぎが激しくなった。この感じは三度目である。つまりは、エイリアンの反応に近いことを意味する。しかし明確な居場所まで分らないため、とにかく進むしかなかった。

昨日進んだ辺りまで到着した時、微かに人の声が聞こえた。優希かと思いい耳を澄ませるが、声は二種類存在していた。警戒を強め、声の方向を探りつつゆっくりと歩く。

徐々に声が鮮明になってくる。一人は少女のもの——おそらく優希である。もう一人は若い男の声——しかも聞き覚えのあるトーンだった。

さらに近づくと、ようやく二人の姿が見えた。樹木の後ろから様子を窺う。私服姿の優希と対面するのは、スーツ姿の男だった。脳裏にホメロスの姿がよぎる。まさか、と思った。

「君は、虹色の狐を知ってるかな？」

あの噂は小学生の間でしか流布していないはず——それをなぜこの男が知っているのか、疑問に思わずにはいられなかった。

「し、知らない」

優希は嘘を吐いた。確かに彼女は見ていたはずである、屑鉄の塊と化した白亜が戦っている様を。

「そうなんだ」

男は微笑混じりに言った。そして、白亜の方向に首を向けた。

「じゃあ、その君にも聞いてみるか」

心臓が跳ね上がった。

「こそこそしてないで出てきなよ」

しらを切るのは難しいと判断し、姿を見せる。優希は目を大きく見開いた。

「水瀬……君!？」

スーツの男はさらに頬を緩ませた。

「ああ、君だったか。久しぶりだね」
久しぶり、ということは一――

「ホメロスっ！」

白亜は男の名前を叫んだ。

「元気そうで何よりだよ。お姉さんも元気かい？」

ホメロスの質問を聞き流し、白亜はじっと睨みつけた。

「……もしかして、LGOの言ってたエイリアンってお前なのか」
ホメロスは怪訝そうに首を傾げた。

「おや、おかしいねえ。いつもよりステルス性を強めているはずなんだけどなあ」

ふと、優希の父の言葉を思い出す。危険性の低いエイリアン――それはホメロスではない。では、当人はどこにいるというのだ。

「まあいいや。それよりも、君までこんなところに来るとはね。何の用事かな？」

ホメロスは腰に手を当て、余裕を見せた。

「神風さんから、離れろ！」

「いきなり出会っておいて離れろとは、失礼だねえ」

白亜は優希の目を見る。しかし、すぐに視線を逸らされてしまった。

「神風さん、そいつはエイリアンなんだ！　すぐ離れて！」

優希は怯えたまま動くことはなかった。果たして「動けない」のか「動かない」のか、それは分からなかった。

「そいつって……君も似たようなものだろうに」

ホメロスは無駄のない動きで優希を抱え込んだ。

「いやっ」

優希は必死に拒絶するが、何一つ状況は改善しなかった。

ホメロスの全身が溶解し、形を変える。間もなく、金属質の道化師へと変化した。

「ひっ――」

首を回しその様を見た優希の顔が青ざめていく。

「神風さ——」

「動くな」

ホメロスは淡々とした口調で制止した。そして袖部から人間の腕のように太い釘を射出し、優希の頭部に突きつけた。

「君の友達に穴が空くよ」

白亜は悔しさを堪えるために歯を食いしばり、ただ睨むしかなかった。

「おや……？」

ホメロスは何かに気づいたように声を発した。罠かもしれないと思い、視線をずらさなかった。

「そうだ。これからゲームをしよう」

提案するなり、ホメロスの細い目が赤く輝いた。かつて巨鳥型エイリアンが現れる前に見たものと同じだった。

急に空が暗くなり見上げると、細長い棒状の物体が白亜を後ろから飛び越えていた。

再び明るくなった時、白亜とホメロスの間にはその物体が宙を浮いていた。

「もしかして、君の言ってたエイリアンって彼じゃないのかな」

陽光を浴びて鈍い光を放つ金属質の棒だった。よく見ると宙に浮いているのではなく、非常に細い三対の足で体を支えていた。先端には短い触角、目玉のような球体を各々一對備えている。

その姿には見覚えがあった。過去に昆虫凶鑑で見た、一際異彩を放つ容姿ははっきりと脳裏に刻まれている。多くの者が植物の一部と間違えるほどの擬態性能を持つ昆虫——ナナフシである。確かに実際のナナフシは攻撃的ではないので目の前のそれも同じ性質であるならば、危険ではないと判断しても問題なさそうであった。

「さっきから僕たちの様子をちらちら見ていたんだよ。可哀想だから仲間に加えてあげたのさ」

「仲間？」

先端の球体がホメロスの目と同じ色をしていた。しかしホメロスと比べて非常にぎらついた光を放っており、まるで興奮しているかのようだった。今のナナフシは攻撃的であると判断して問題なかった。

「もし君がそいつを倒せたら、この子の解放を考えてあげてもいいよ」

ホメロスの言葉にはひっかかるものがあつた。

「『考える』って、どういうこと……!？」

「気がついたみたいだね。あくまで『考える』さ。でも、0%じゃなくなっただけマシだと思うけどね」

「そんなの、お前の匙加減一つで――」

釘の先端が優希の髪を撫でる。少女の顔から生気が失せていく。

「どうする？　今回ばかりは二択だと思うけど」

その通りだった。「ナナフシを無視して、ホメロスから優希を奪い返す」という一択は、さすがに現実的ではなかった。

「……戦うよ」

「賢明だね」

白亜は身構え、ナナフシを睨む。

「さあ、君も変身して」

「くっ……」

できなかつた。目の前には優希がいる。彼女にもうあの姿を見せなくなかつた。再び拒絶されるに違いない。

「おや、どうしたんだい？　早くしないとやられてしまうよ」

ホメロスは楽しそうに声を弾ませた。優希はただ小さく震えながらこちらに視線を向けている。瞳はすっかり恐怖に染まっていた。

変身を促すように胸の鼓動が早くなる。心の中で必死に叫んでそれを拒んだ。もう、嫌われたくない。

「やれやれ。何を躊躇っているのか」

ホメロスの目の光が強くなる。ナナフシが棒状の体を正面に向け、自動で装甲の一部を開いた。そこから直径5センチほどの細い筒が

生えたかと思うと、一瞬穴の奥から破裂音と光が発せられた。間もなく右肩に激痛が走った。

「つっ——！」

左手で右肩を押さえる。指の隙間からじわじわと赤血が溢れ出した。薄い煙を吹き上げる筒、あれは小銃である。

「こいつは下級エイリアンでも弱い方だ。いくら出来損ないの君でも十分戦えるはずだよ。さあ」

目の光は弱くなっていた。そこで白亜はようやく確信した——ホメロスがナナフシを操っているのではないかと。しかし、それが分かったところで現状は何も変わらない。優希が捕まっている以上、ホメロスに手出しはできない。結局ナナフシを倒すしかなかった。

「いや、だっ……」

白亜は涙を滲ませながら、首を振った。

「どういふことかなあ。先日はお姉さんを守るとか言って自分から変身した癖に」

再びホメロスの目が光る。ナナフシは他の装甲も展開し、小銃を突き出した。

「早くしないと、蜂の巣になってしまうよ」

白亜は苦痛の中、未だに躊躇していた。優希にあの姿を見せたくない、しかしこのままでは文字通り蜂の巣と化してしまう——

「遅い」

ホメロスが呆れたように一言呟くと、ナナフシの胸部が眩しさを増した。

P r o g r a m R e g e n e r a t e S t a r t u p .

望まぬ文字が視界に表れる。心の中で拒絶の叫びを上げるも、刻まれ続ける英語の羅列は止まらない。

肉体に多数の小さな衝撃を感じた。それが銃弾によるものだとして理解するのに時間は必要なかった。そして、自身が既に人間ではない

ことも――

「やればできるじゃないか」

ホメロスは声を弾ませた。

ナナフシから幾多もの紫煙が立ち上っている。感情無き瞳で白亜をじっと見つめていた。

優希は変わらず怯えており、白亜から視線を逸らしていた。体が小刻みに震えているのは、ホメロスだけのせいではなかった。

視界上の文字や図形から悔しさを、ナナフシとホメロスから憎しみを、優希から悲しみを――白亜の感情は渾然一体と化していた。

「じゃあ、ゲームスタートだ」

赤い光で幕は切って落とされた。

ナナフシは微細なモーター音を鳴らして多脚を動かし、白亜に迫ってきた。草を踏み潰し木を蹴りつける様は実に乱暴で、とても臆病な生物には見えない。

あっと言う間に距離は詰められた。ナナフシは右前脚を持ち上げ、白亜めがけて踏み下ろしてきた。

もう変身してしまったものは仕方がないと言い聞かせ、鉄柱のような脚を両手を受け止めた。先ほどの銃弾とはけた違いの衝撃が伝わるが、決して耐えられないものではなかった。

肘関節が唸りを上げるも、脚を押し返しては再び押されるの繰り返しで互いの力は拮抗していた。

「はは、予想通りだ。君はナナフシと同レベルだね」

神経を逆撫でされ、もっと力が出ないものかと自身に問いかける。すると肘関節の唸りが勢いを増し、みるみる脚を押し上げることができた。

「やアあアあッ！」

機械音声の叫びとともに、一気に押し出す。脚の付け根から悲鳴が聞こえ始めた。容赦することなく、ナナフシに向かって押し進んでいく。悲鳴に電気音が混ざり、関節が有らぬ方向に折り曲がる。

ナナフシも必死の抵抗を見せるが、焼け石に水だった。

「ハあッ！」

最後の一押しで、脚の付け根から破碎音が鳴る。ナナフシは声を発することなく、身体のバランスを崩して倒れた。

白亜は止まることなく、脚を抱えて引き寄せる。関節部からコードとフレームが引きちぎられ、奇怪な音と紫電と銀血をまき散らす。とてもロボットとは思えぬ生々しい傷跡は、不快極まりなかった。ちぎった脚を抱えたまま、ナナフシに近づく。痛みに悶え苦しんでいるのか、反撃してくる様子はなかった。

ナナフシの前に立つなり、脚を担いであら頭部に叩きつけた。金属が軋み、ガラスの割れる音が聞こえた。脚を振り上げると、醜惡な面が視界に映し出される。

「ヒッ」

四方八方に折れ曲がった触覚、すっかり歪んだ顔面の装甲、ひびの隙間から銀血を垂れ流す複眼――恐怖のあまりひきつった声を上げてしまい、脚が手中からすべり落ちた。

脚の落下音の後、ナナフシの五本の脚は脱力した。反撃どころか、動き出す気配すら消えてしまった。

「おめでとう。君の勝ちだ」

全く気持ちがこもっていない祝いの言葉を送られる。勝ったところで優希を返してもらえる保証はなく、心底どうでもよかった。

ホメロスはナナフシの死体を飛び越え、白亜の後ろに着地した。

慌てて振り返ると、思わぬ光景が眼部に飛び込んだ。

「なッ……!？」

ホメロスが優希を解放し、後退していた。釘は収められ、降参するように両手を上げている。優希も自身に何が起きているのか理解できずに、きょとんとしている。

「さあ、感動のご対面だ」

すぐにでも駆け寄りたかった。しかしこれが罠である可能性は否定できない。かつこの醜惡な肉体を優希は嫌っている。下手に近づ

けばまた拒絶されると予想した。

ホメロスから一時も目を離すことなく、優希にゆっくりと一步近づいた。彼女は微塵も動かない。

「かななぎさん」

極力やんわりと話しかける。返事はないが、ちらりと白亜に目を向けた。瞳には困惑の色が浮かんでいた。

「ダメッてテ、ごめんナさい」

心から謝罪をする。優希はただ無言で俯いていた。

「ゴめん、なさい……」

やはり許されないのかと思うと、自身の声から覇気が失われていくのを感じずにはいられなかった。

静寂が続く。ホメロスは変わらずに両手を上げっぱなしにしている。表情のないフェイスガードからその考えを読み取ることはできない。

優希が顔を上げた。唇はきゅっと締められ、輝く瞳には決意が込められているように見えた。

同時に、ホメロスが両手首を曲げて各々の人差し指を優希に向ける。よく見るとホメロスの指は尖っており、人間程度ならたやすく貫けそうに見える。

戦慄が走った。

「ふせてッ！」

気づけばそう叫んでいた。そして、左手にはレーザーガンが握られていた。

優希はびくりと身を震わせ、すぐにしゃがみこんだ。ホメロスの全身が視界に映し出された。人差し指の先端が射出されて間もなかった。その進行方向は――優希。

レーザーガンを構えた。レーザーによる周辺の被害、発射後の爆発、命中精度――今の白亜にとって、どれも考えていられなかった。

ただ優希を助けることだけが、彼の全てであった。

指が優希の肉体を穿つまで時間はない。照準をホメロスに向け、すぐに引き金を絞った。そこでようやくレーザーの太さについて考えるべきだったと気づくが、手遅れだった。

銃口からエネルギーが迸った。辺りが白に溶かされていく。白亜はただひたすら反動に耐え続け、レーザーが優希を焼いてしまうのではないかという心配だけを反芻していた。

瞬時に放出が止まる。すっかり熱された銃身は紫電を纏わせ、今にも爆散しそうである。しかし、視界には「C a u t i o n」の文字が赤く点滅するだけであった。

すぐに優希の状態を確認する。砂埃にまみれてうつ伏せに倒れたまま、動く気配を見せなかった。微塵も考えたくない未来がよぎり、身が震えそうになる。

「なるほどねえ。それも出来損ないだったとは」

ホメロスが立っていた位置に、黒い布切れが浮かんでいた。間もなく布切れは宙を舞った。再びホメロスの姿が表れた。

「そんなッ!? あタッテたノに!」

「君たち人間の英知の結晶だよ。レーザー拡散マント、噂通りの性能だ」

過去、ニュースで見たのを思い出した。L G O が対エイリアン用に開発するも、製作コストの面から量産は見送られたという曰く付きの代物だった。何故それをホメロスが持っているのか知りたくないも、今はそれどころではなかった。

「一発撃っただけで、その有り様。出力調整がイカれているんじゃないかな」

「シュっ、リョク……?」

視界に映されたレーザーガンの絵図に注目する。拙い英語力で文字を読むも、出力調整と思わしき項目は見当たらない。

「ようやくあの時撃たなかった理由が分かって、ほっとしたよ」

あの時——つまり、ホメロスは倉庫で戦った時にはレーザーガン
の存在に気がついていたということになる。

「さて、と」

ホメロスは優希に歩み寄った。

「カンナギさんニ、ちカづ——」

急に体から力が抜け、膝を突いてしまう。そしてとうとうそれすらも維持できなくなってしまう。倒れこんだ。

「しかも、自分のエネルギー管理すらまともにできない。愚かだねえ」

顔だけは必死に持ち上げ、ホメロスの姿を視野に入れる。悔しくても歯を食いしばることができなかった。

左手で銃を握り締める。銃身の熱がグリップまで伝わってきて、まるで鉄板で焼かれているような感覚だった。

左腕を振り上げ、トリガーを引きたい衝動に駆られた。しかし今の状態では照準が定まらないため、下手をすれば今度は優希の肉体を消し去ってしまう。

「イヤダっ……」

無駄な呟きは、自身をより惨めにするだけだった。しかし、止められなかった。

「もうコンナ——」

「みな……せ……くんっ……」

か細い声が聞こえ、叫びを止める。もしやと思い、優希に注目する。産まれたばかりの子鹿のように必死になって上半身を起こし、顔を白亜の方に向けた。髪はすっかり乱れ、白い頬も土にまみれていた。

「たす……けて、くれて、ありが、とう……」

優希の感謝はナナフシに勝って解放してくれたことに対してなのか、ホメロスの攻撃を防いだことに対してなのか判断できなかった。

「あと……ごめん、なさい」

「えっ……?」

「エイリアン……だからって、嫌ったりして、本当にごめんなさい……」

本来喜ぶべき言葉を聞いても、今の白亜は悔しさを増幅させることしかできなかった。

「ボ、ぼクのほうこそ、ダメッてテ、ごめんナさい!」

「水瀬君は、悪くないよ……」

すっかり疲弊した顔で微笑みかけられた。

「ねえ、水瀬君……」

「ナに」

「こんな私でも、友達で、いてくれる……?」

それは白亜が一番聞きたい事だった。それが何故か聞く立場になっている。

「ボクノ、ほうこそ、こんなミにクいのに、ともだちでいいノ?

きッと、みんなにキラワレちゃウよ」

「……平気だよ。私、元々友達いないし。それに、美月ちゃんがいるから」

果たして美月が自分を理解してくれるのか甚だ疑問であったが、優希の融和を求める柔らかな言葉はそれを些細な問題に変えてくれた。

「ウン、ともだちだよ」

考えるまでもなく、即答した。

「……よかったあ」

優希の微笑みは、太陽のように眩しくてしうがなかった。

「うんうん、よかったよかった。死ぬ前に仲直りできて」

正に「水を差す」という言葉が相応しい、不快な声で現実を引き戻される。

ホメロスは振り上げた右手甲から、青いレーザー刃を形成した。

「じゃあ、まずはこの子からだねえ」

「やめろっ！」

無駄だと分かっている、喉部の発声機器を全力で稼働させずにはいられなかった。

「まあそう騒ぐな。人間の言う『あの世』でまた会えるじゃないか」
レーザー刃の落ちる先は、優希の細い首。過去社会の教科書を見た、中世ヨーロッパの処刑風景画そのものだった。

感謝を述べながら死にゆく友人。それを指をくわえて見ているしかない自分。

齢十二年に満たない人生でも、白亜は多くの悔しさを味わっている。それは、勉強だったりスポーツだったり種類は様々である。しかしどの悔しさも我慢することができたし、心に傷を残すようなものはなかった。

目の前のそれはどうか。

比較にならない。

屈辱——これ以外に形容できる単語はあろうか。

突然頭の中に電気信号が流れてくる。それは、まるで語りかけて

くるような得体の知れないものだった。

『撃て』

左手のレーザーガンを撃てということらしい。しかしそんなことをすれば――

『助けたくば、撃て』

嫌だ。白亜は誰のものとも分からぬ命令を拒んだ。

『撃て』

左腕の感覚が消失する。間もなく白亜の意志とは関係なく左腕が持ち上げられる。そしてとうとう、銃口が優希とホメロスに向けられた。

「なッなニコレッ」

左腕に意識を集中させ動かそうと試みるも、びくともしなかった。既に左腕は管理下に存在しない。

銃の照準は全く定まっておらず、ホメロスと優希の間をふらふらと彷徨っている。

自身の左人差し指が微動する瞬間を目の当たりにした。指はトリガーを触れようとゆっくりと可動し続ける。

「やめ口お！」

必死に叫ぶも、指は動き続ける。

やがて指はトリガーと接触し、一気に引き込んだ。

照準はやや優希よりに合わせていた。確実に優希の肉体を焼く位置だった。

もう見たくない。

白亜は現実逃避するために、視界を暗闇に染めた。これで、優希の苦しむ姿を見ずに済む――

第十六話 屈辱の醜悪機人（後書き）

2011年9月11日..誤字を修正しました。

第十七話 白の機人、始動

バレルからエネルギーの放出音が聞こえた。清流の如き澄み切った、煌めきの音だった。

腐葉土に重みのある物体が落下し、僅かな振動が伝わってきた。おそらくレーザーは優希の肉体を焼いてしまった、それからホメロスは屍と化した優希の首を断ったのだろう、と思うことしかできなかった。

自分が優希を手がけてしまった——白亜は罪の意識で全身が塗り潰されていくのを感じた。

そんな白亜がこれから行おうと決めた事は『償い』だった。そもそもこんな事になった全ての原因はホメロスであると仮定し、彼を倒すことで罪滅ぼしを行う——いや、罪から目を背ける。あまりにも惨めな選択しかできない自分が嫌でしうがなかった。

まず、それを行うためにも視界を確保する必要があった。すぐにカメラアイを起動させる。

林が映し出された。しかし、どうにも違和感があった。周囲の風景が先ほどよりも鮮明に映し出されている。古いテレビから新しいテレビに変えたようである。

さらなる違和感を発見する。これまではただの羅列でしかなかった文字列が綺麗に整列されている。さらには重要と思われる単語が色づけされており、非常に見やすい構成になっている。

そして、左下立体図の変化も著しい。これまでの簡易的なデザインと異なり、全身のあらゆる部位が事細かに描き込まれている。

それ以上に気になったのは、デザインそのものの变化だった。こ

これまでの醜惡な化物はもう描かれていない。そこにあるのは、空想物語の主人公が扱っているようなヒロイックなデザインの人型ロボットだった。細身の肉体、曲線を主体とした装甲、張り出した肩部、一目で正義の味方だと判断できる顔つき——今の自分の姿がこれであるとは、にわかに信じ難い。

優希の姿を見ることを恐れ、まずはホメロスに注目する。姿勢は先ほどと変わっていない。右腕は振り上げられたままだった。どうやら優希の首はまだ落とされていないようだ。それでも、白亜のレーザーで焼いてしまった事実が変わらぬのだが。

しかし、ホメロスには何かが足りない。右腕の先が空白——右手が存在していない。よく見ると腕の先端が千切れており、灰色の煙を上げている。

煙は地面からも上がっていた。すぐに目を向けると、そこにはホメロスの右手が転がっていた。まさか自分が撃ち抜いたのかと思っただが、すぐに否定した。白亜のレーザーは太すぎるため、このように精密な着弾を行うことはできないからである。

白亜はすつと立ち上がる。全身が異様に軽く、頭の前からつま先までの感覚が研ぎ澄まされている。

「……よくもっ」

左手の銃を捨てた。

未だに優希の状態を確認する勇気がない。そんな自分の齒がゆさを左腕に込めた。

「よくも、神風さんを……」

自身の声が人間だった頃と同じになっていた。人工的な要素は何か一つ感じられない、人間の声そのものである。

「神風さんを……」

優希を殺したのは自分であることは重々承知していた。しかし、そんな現実を認めたくなかった。故に、ホメロスに責任転嫁する。

「神風さんをつっ！！！」

水瀬白亜は、所詮子供であった。

ホメロスに向かって駆け出した。羽の様に軽い両足は、瞬時にして白亜をホメロスの元に届けた。まるで瞬間移動でもしているかと思うほどの速度であった。

左腕を振りかぶり、目標を定める。狙う先は、憎むべき存在――拳を突き出そうと思った瞬間には、自身の左手がホメロスの顎に当たって――めり込んだ。

ホメロスの体がふわりと浮き上がり、白亜の拳に従われるまま後方に吹き飛んだ。そして一本の樹木に背部を打ちつけた。

「グはアッ――」

呻きを上げて、うつ伏せに落下した。

右手の熱い感触は収まらない。これだけでは気が晴れない証拠だった。

倒れているホメロスを起こすためさらに近づこうとした。

「水瀬君……」

か細い声が聞こえ、動きを止めた。優希の声である。つまり、優希は生きている――しかし、健常体であるか否かは分からない。それを確認しなければならない。

反転し、視界に優希を収めた。

「神風さん」

先ほどと何一つ変わらぬ優希の姿があった。嬉しくて涙が出そうになった――なったただけであるが。

優希は白亜をじっと見上げている。瞳に恐怖の色は存在しておらず、感謝の眼差しを向けている。

「また、助けてくれたね……」

「ううん、僕は何もできなかった。きっと誰かが――」

「水瀬君のおかげだよ」

優希の微笑はとても嘘を吐いているものとは思えなかった。

「あの銃で、私が斬られそうになったのを助けてくれたよ」

捨てたレーザーガンに目を向ける。過剰な出力を強いたせいですっかり半壊していた銃はそこに存在しない。白い光沢を放つ、新品同様で全く形状の異なる銃が横たわっていた。

「どういう、こと……」

まさか、ホメロスの腕を撃ち抜いたのは本当に自分なのか――現状についていけず、動揺を隠しきれない。

「――グぐグッ」

不快な呻き声が聞こえる。すぐホメロスに向き直った。

ホメロスは残った片腕でよろよろと立ち上がった。顔の下半分が大きく陥没し、骨のような内部フレームを露出させて、銀血を涎のようにだらしなく垂れ流している。少し前の白亜と異なる種類の醜悪な面持ちである。

「こう何度もシン化を行ウとはな」

発声器官を破損したのか、ホメロスはノイズ混じりの耳障りな声を発した。

「リジエネれいと。ますマス欲しくナツてきたヨ」

ホメロスの眼部が赤い光を放った。

視界右上の円――レーザーだーと思いきそれに注目する。赤と青の点の一つずつ光っている。位置的に青が優希で赤がホメロスであることを理解した。つまり周辺に他のエイリアンの反応は無い。果たして何を操るというのか。

ふと、倉庫を襲来した神々しい巨鳥を思い出した。まさかあれを呼び出すつもりなのか――緊張が走った。

レーザー後方に赤い印が点灯した。同時に、金属が軋むような不

快音が響いてきた。

すかさず後ろを向く。そこには、倒したはずのナナフシが立ち上がっていた。胸部の小銃を全門展開させ、白亜たちに狙いを定めていた。

「死体も操れ——」

再びホメロスに向いて問い詰めるように叫ぶも、全て言い切ることはできなかった。

ホメロスの左腕が優希に向けられていたからである。

「さて、どうスル？ ドツちを防いでもそノ子は死ヌよ」

今、二人は完全に挟み撃ちにされていた。ホメロスの言うとおり、どちらを防ごうが優希の命は奪われる。

「神風さんは関係だろ！」

「この場にイルだけデ、関係者なんダよっ！」

優希は不安そうな様子で、白亜の脚部装甲に小さな手を添えている。怯えた子供が母親のスカートを掴むそれに類似していた。

何か手段はないものかと思考を巡らせる。

「あの時の能力を神風さんにも使えたら……」

ホメロスのレーザー刃を寸でのところで静止させた能力。あれの範囲に広げることができれば、優希を守ることができる。しかし、そのような事が可能なのか——

思考に奇妙な波長が介入してきた。波長は日本語と化して、説明し始めた。

『ステイシス・フィールド——指定空間内に存在する物質の運動エネルギーをゼロに限りなく近づける能力である。通常は使用者の肉体周辺のみにも効果を及ぼすが、広域化させることで他者にも効果を付与することが可能。ただし、消費エネルギーは通常の数倍を要す

る』

あの能力の正式名称を初めて知る。しかし、効果に関してはいまいち理解できなかった。ただ一つ掴んだのは、この能力で優希に守ることができるかもしれないという『希望』だった。

「神凧さん」

後方の小銃が破裂する瞬間、そしてホメロスの袖部から針が飛び出す瞬間——それを同時に認識できるほど反射神経は向上していた。ステイシス・フィールドの起動、そして範囲の広域化を命じる。それが一秒にも満たない時間で行われていることなど、白亜は知る由もなかった。

銃弾の嵐が二人を包み込まんと襲来し、鉄針が少女の柔肌を貫くために高速で飛来してきた。

「ひっ——」

喉から絞り出したような優希の叫びを耳にする。

胸部装甲の一部が浮き上がり、隙間から水色の光が漏れ出す——

無数の銃弾が白亜たちの周辺で静止している。正確に表すなら、極めて小さな前進をしているに過ぎない。重力が運動エネルギーを上回り、全ての弾は真っ逆様に落下した。

鉄針も同様の動きを見せた。

小刻みに震えて目を閉じていた優希がゆっくりと瞼を開いた。

「あ……れ？」

何が起こったのか理解できず、きょろきょろと周りを見渡している。

「水瀬……君？」

白亜を見上げる優希の瞳は期待に満ちていた。

「絶対に君を守るよ」

期待に応えるように、精一杯の優しさを込めた無機質な瞳で返した。彼女は怖がっていないだろうか心配だったが、今は優希の反応を待っている暇はなかった。

憎しみを込めた瞳で、ホメロスを捉える。針を撃った状態から微塵も動いていなかった。

「広域化まで……なんトいう進化だ」

彼の呟きには何一つ興味が沸かなかった。ただ「倒す」という感情しかない。

地を蹴る。ホメロスはようやく動き始め、左手甲から蒼い刃を伸ばした。

自身のレーザーソードについて思考するとほぼ同時に波長が流れてきた。

『レーザーソード——コアのエネルギーを刃として用いる。現在のバージョンでは出力部に欠陥があるため、刃の形成は2秒が限界である』

案の定、レーザーソードには欠陥があった。だからといって、拳一つでホメロスと戦うのは厳しい。これをなんとか有効活用しなければならぬ。

2秒しか刃を形成できない。つまり、2秒で相手を斬らなければならぬ。柄を引き抜いてから形成するのでは遅すぎる。なら、どうすべきか——

笠を被った機人の姿がフラッシュバックする。彼が行おうとした『居合い』――刀身を鞘から抜く過程に斬撃を合わせる技。

もしかすると、レーザーソードでも似たような事ができるかもしれない。

ホメロスは刃の切っ先を白亜に向け、肘を引いた。対して白亜は左手を右腰部に添える。スライドして飛び出した柄を握り、引き抜かない。

間もなく、蒼い刃は白亜を貫かんと迫ってきた。ここでようやく柄を引き抜き、念じる――腰部から完全に脱した瞬間、刃を形成するように。

わずかに腰を落として、迫る刃をかわそうとした。

身を貫かれることはなかったが、刃を纏うエネルギーで右肩を焦がされた。損傷は装甲表面のみで、わずかな熱こそ感じたものの痛みは皆無だった。

柄を握りしめた左手が白亜の眼前を横切る。柄の先から、刃が伸びているのを確認した。

青空を思わせる水色の光は、間もなく破壊活動を開始する――

ホメロスの脇腹から激しい火花が噴出した。

「がああアアアアああッ！！！」

聞き苦しい断末魔が林に響き渡る。優希が怖がっていないかどうかどう

か、それだけが心配だった。

レーザー刃は脇腹を斬り抜けるに至らず、途中で引っかかった。なんとか振り切ろうと力を込めると、左手がぬるりと奥に伸びていった。柄から刃が消失していた。

「あっ——」

バランスを崩し、踏ん張ろうとした。突如右足に衝撃を受けたせいで着地することは叶わず、白亜の体は小さく宙を舞った後、前のめりに倒れ込んだ。

すかさず仰向けになるも、眼前でホメロスに見下されていた。左手甲は振り上げられ、より太くなった蒼刃が天めがけて伸びている。「よこせええエええ！」

怒声とともに、刃が迫ってきた。

すぐにステイシス・フィールドを展開させようとすると、波長が届いた。

『ステイシス・フィールドの連続使用は不可能。使用には30秒のチャージを要する。現時点、次の使用まで後5秒』

視界に時間が表示された。コンマ以下の数字がせわしく変動し続けている。

5秒。普段ならば気にするまでもない時間がとても憎らしい。

このままでは装甲を斬り裂かれる。果たしてどれほどの苦痛が生まれるのか——注射を打たれる前の心境に似ていた。

4秒を切った。白亜は左手の柄に持ち上げ、集中する。水色の刃が伸びて、ホメロスの刃を受け止めた。エネルギー同士がせめぎ合い、耳をつんざく音と刺激的な青い光が溢れ出した。

3秒。受け止めた刃を押し退ける。ホメロスも抵抗を見せ、拮抗状態に陥った。右手を左腰部に添え、ソードの柄を掴み取る。

2秒。一気に力を加え、わずかにホメロスの刃を弾く。白亜は自身の刃の消滅を確認するなり、すぐに左手を引っ込めた。

1秒。再び迫るホメロスの刃。今度は右手を持ち上げ、刃を形成した。再び視界は青一色に包まれる。

0。時間の表記が消えた――

右手の刃が消滅する。

「もうったアああ！」

ホメロスは歓喜に満ちた狂声を叫び、蒼い刃を肉薄させる。

「ステイシス・フィールド、起動――！」

レーザー刃は、白亜との間に生まれた不可侵領域を突破できずに動きを止めた。死を匂わせる煉獄の蒼炎が、じりじりと装甲を焦がす。痛くもなければ熱くもなかった。

「ぐッ、グググ……」

ホメロスの努力は何一つ状況の改善に繋がっていない。

白亜は左手の柄先をホメロスの左手首に向ける。そして願う、伸びろと――

すぐに柄先からエネルギーが噴き出した。伸びる先に物体が存在すれば、それは穿たれるであろう。つまり、ホメロスの左手首は水

色のレーザーで風穴を空けられることを意味していた。

左手へのエネルギー供給が絶たれたことで蒼の刃は消滅し、手首は力が抜けたようにだらんとぶら下がった。すかさず右足を引き、ホメロスの腹部目がけて蹴りを放った。

「があッ!!」

かなりの衝撃を受けたのか大きく仰け反って、陥没した口部から銀血をまき散らしながら宙に浮いた。

わずかな地の振動を感じた後、すぐに立ち上がる。

「水瀬君っ!」

叫びを聞き、振り返る。そこには、捨てたはずのレーザーガンを両腕に抱えた優希の姿があった。相当重いのか足下がおぼつかず、なんとか立っているような状態だった。

「これっ!」

優希は瞼と唇をきゅっと閉じて、懸命な様子で銃を放り投げた。

緩やかな放物線を描きながら飛んでくる。両手の柄を捨て、抱えるように受け止めた。プラスチックのような軽さが、人間からすれば鉛の重さであるのだと理解した。

間近で見ると、確かに以前のレーザーガンとは別物だった。デザインは洗練され、より取り回しが効きやすくなっていた。

ホメロスが起き上がりとしていた。すぐに左手でグリップを握り締め、銃口を向ける。

『射撃タイプを選択せよ』

波長に併せて、視界に三種類の項目が表示される。「Normal」「Rapid」「Charge」。各々の違いがいまいち理解できない。

「くくクっ。まるでオデュッセウスの再来だな」

かつての英雄に似ている——果たしてそれは誉め言葉なのか、そ

れとも別の意味を含んでいるのか、知ろうとする気にはなれなかった。とにかく今は、ただホメロスに倒すことだけが全てだった。

視界のホメロスに四角形が合わせられる。そしてその上には「Target Lock」の文字が表れた。つまりこのまま引き金を引けば、レーザーはホメロスを撃ち貫くであろう。義姉をさらい、友人を傷つけた張本人をようやく倒すことができるのだ。

今の白亜には、ホメロスを思いやる気持ちなど存在していない。

ホメロスは半身を起こし、目を発光させた。それをきっかけに、引き金を絞った。

軽い反動の後、銃口から細身のレーザー塊が発射された。水色のエネルギー集合体が流星のように煌びやかな軌跡を残して駆け抜け、ホメロスの左目を貫いた。

「ナっ」

左目があった部分にはぽっかりと穴が空き、後ろの光景が丸見えになった。

右目の発光が止まった。

「ははハッ！ 素晴らしイ性能だァ！ 君を生かシテオいて本当に正解ダッタよ！」

ホメロスは起き上がると同時に、白亜に向かって駆けだした。全身の破損部位から銀血をまき散らして迫ってくる様は狂戦士——いや、ゾンビそのものだった。

その様に恐怖を覚えつつ、再び引き金を引く。胴体を狙ったつもりだったが、レーザーは右肩を穿った。それでも、ホメロスは物ともせず迫ってくる。数本のコードがかろうじて右腕の落下を防いでいるが、だらしなくぶら下がる様はあまりにも不気味過ぎた。

違和感に気づいた。ホメロスは両手が使えない、つまりほぼ無力であることを意味する。それなのに、何故正面から突撃してくるの

か――

『敵対者の熱量上昇を確認』

脚部にも武装があるのかと予想した瞬間、波長が伝わってきた。
熱量上昇。それはつまり――

「自爆っ!?!」

疑問はすぐに解決した。目的が自爆なら、下手な小細工は必要ない。ただ突っ込んで爆発するだけなのだから。

自身の身はどうなろうと構わない。しかし、近くには優希がいる。さらには、木々に引火する危険性が高い。

果たしてどうすべきか――

ステイシス・フィールドの説明を思い出す。エネルギーをゼロに近づける云々という断片的な部分のみだけであったが、それが閃きに結びついた。

ホメロスをフィールドで包み込めば、爆発を抑え込むことができるかもしれない。

「神風さん、逃げてっ!」

一か八かの賭けに優希を巻き込むわけにはいかない。白亜は決死の思いで叫んだ。

「えっ――」

「いいから早く!」

自分でも口調が荒くなっているのが分かった。それほどまでに優希には逃げてほしかった。

ホメロスは目と鼻の先まで接近していた。優希が逃げたのかどうか、確認する余裕はなかった。

「さア、ヨこせえエええ」

破損部位から光が漏れだした。爆発は近い。

「ステイシス・フィールド、広域展開！」

胸部から水色の微粒子が溢れ、白亜のみならずホメロスも覆い尽くした。

間もなくホメロスは光に包まれるが、それは拡散することなく留まっている。白亜の作戦は成功した。

フィールド使用中は体を動かすことができない。未だに優希の状態は確認できないが、きつと逃げてくれただろうと思うしかなかった。

「ステイシス・フィールド、起動終了」

やっと終わった、と思った瞬間——とてつもない衝撃が襲いかかってきた。突風などという表現では生温いほどのそれは、内部フレームに軋みを生じさせた。四肢がバラバラになるのではないかと思うほどの激痛が走る。

「くああああああっ!!」

痛みと理不尽に耐えきれず叫びを上げてしまう。

——確かに防いだはずなのに、なんで——

優希の事を思い出した。想像したくない未来が再び蘇る。

——神風さん、逃げて——

視界は文字を判断しにくいほど真っ白に染まっていた。新たな文字が表れたように見えたが、詳細が何一つ分からない。

間もなく、一瞬にして白は黒へと反転して意識も途切れた。

優希はひたすら走っていた。額はすっかり汗まみれで、前髪が貼り付いている。

ちらりと後ろを振り返る。白亜の姿はもう確認できなかった。

「きゃっ！」

何かに衝突し、尻餅を突いてしまった。

「いたた……」

すぐに首を上げると、ガスマスクを被った装甲服の人間が立っていた。その威圧的な風貌に、優希は身を強ばらせた。

「君……もしかして神風優希ちゃん？」

ガスマスクから聞こえるくぐもった声は、快活そうな女性のものであった。優希は緊張をわずかに解す。

「は、はい」

「それは良かった。私はLGO実働部隊隊員、三浦絵里香。君のお父さんから連絡があって、君を捜しにきたのよ」

三浦は取り出したPDAの液晶を優希に見せながら自己紹介した。画面には三浦の顔写真や名前、所属や隊員コード等が表示されていた。

「実はここにエイリアンが侵入しているの。だから早く逃げましょう」

「エイリアン……!」

優希は瞳を見開いて、生唾を飲み込んだ。

「……もしかして、エイリアンを見たの!？」

「あっ、えっと……」

優希は躊躇した。

「何も酷いことされ——」

三浦は問い詰めるのをやめ、優希より遙か後方に目を向けた。

「熱源反応……？ まさか——」

突然三浦は優希の後ろに回り、背中合わせで構えた。

「えっ、な——」

「動かないで！」

危機感が増した三浦の命令に、優希はただ従った。

優希が三浦の背中に目を向けた瞬間、激しい風が吹き始めた。

「くそっ……自爆か！」

三浦は強風に叩きつけられながら呟いた。飛来する緑葉や小枝が装甲に当たり、小気味良い音を鳴らしている。

「え……え？」

優希は現状を理解できず、狼狽するだけだった。

強風はすぐに収まった。

三浦は軽く肩で呼吸をした後、優希に振り返った。

「あのエイリアン、爆発したみたいね」

「爆発……っ！」

優希の顔が青ざめていく。

「エイリアンには自爆機能を備えたやつがいて……ってどうしたの？」

心配する三浦の声など届いていない様子だった。

優希は飛びかかるように三浦にしがみついた。

「お願いします！ 水瀬君を、水瀬君を助けてあげてくださいっ！」

「水瀬……！？ 水瀬って……下の名前は！？」

動揺混じりの質問に、優希は驚きつつも口を開く。

「あ、えっと……確か、白亜だったと思います……」

三浦は考える間もなく、再び優希に背を向けた。

「……水瀬君はこの先ね？」

「は、はいっ」

「彼を助けてくる。君は先に逃げて」

優希の返事を聞くことなく、三浦は駆けだした。

頭に靄がかかったような感覚だった。立っているのか倒れているのか――極端に表すなら生きているのか死んでいるのかすら判断できなかった。

誰かの視線を感じる。

――だれ？――

声は出なかった。ただ心の中でそう呟いた。当然返事はない。急に靄が薄くなり始めた。それにつれて、白亜は自身の状態を把握できるようになってきた。

前身がふわりとした感触に包まれ、鼻腔が濃い土の匂いで満たされる。それが腐葉土であるとすぐに分かった。つまり、自身は前のめりに倒れているのだと気づいた。

「あれ、ぼく……？」

間もなく、自身は爆発に巻き込まれたのだと理解した。風に包まれ、全身の痛覚が悲鳴を上げていた。にも関わらず、後遺症は無きに等しい。新たな変身体になったとはいえ、そこまで再生能力が強化されたとはにわかに信じ難い。

「水瀬君！」

声が聞こえた。明らかに優希とは異なる声質だが、聞き覚えがあった。

落ち葉を踏み締める音が徐々に近くなる。白亜はゆっくりと半身を起こした。

「大丈夫!？」

バナラを着用した人間が白亜を見下ろしていた。威圧的なガスマスクから心配する声が聞こえる。

「は、はい。えっと……あなたはどこかで……」

「ええ、会ってるわよ」

PDAを見せられた。そこには、かつて世話になった人間の顔写真と名前が表示されている。

「三浦さん！」

「お久しぶりね」

白亜は立ち上がろうとしたが、三浦は制止した。

「怪我してるんでしょう？ 無理しなくて平気よ」

「はい……さっきまではしてたと思うんです。でも、急に治っちゃって……」

「んん？」

ガスマスクが首を傾げる様はどこか滑稽だった。

「さっき、近くに誰かいませんかでしたか？」

「いえ、誰もいなかったわよ」

「そう、ですか……」

確かに視線を感じていた。しかし、虚ろな状態での感覚を話したところでそれを真実と説明することは無理に等しかった。故に、白亜はこの話題を打ち切ることにした。

「あの、僕ホメロスと戦ってたんです」

「ホメロス、ですって」

三浦の声色が陰しくなる。

「ナナフシ型エイリアンは？ そもそもあいつはどうしたの？」

「ナナフシは僕が倒しました。ホメロスは自爆、してしまいました」

「自爆……つまりさっきの爆発はあいつのせいだっていうの？」

白亜はこくと頷いた。

三浦はすっかり考え込んで、黙ってしまった。

「三浦、さん？」

白亜の問いかけで、思考を中断した。

「んー……とにかく詳しい事は後で聞いわ。ほら——」

三浦は横たわる白亜を抱え込んだ。俗に言うお姫様抱っこである。

「はっ、恥ずかしいですよ。それに僕、平気ですし」

「あっはっは。女の子もたまには王子様になりたいんだよ。元怪我人を歩かせるわけにもいかないからねえ」

「重いですから――」

「最新A2をなめるなよ」

場の空気は一転した。すっかりしおらしくなってしまった白亜は、ただ三浦にされるがままだった。

「三浦さん」

「ん、どうしました？ お姫様？」

若干むっとするも、釣られずに言葉を続ける。

「僕、変身した時の姿が変わったんです」

「姿が？」

「はい。なんていうか……すごくかつこよくなったんです」

白亜の声は実にうきうきとしていた。

「うーん、なんと曖昧な説明」

「すみません……」

「いいのいいの。なるほど、君の怪我が少ないのもそれのおかげだったのかもね」

果たして無事で済んだのは何が原因だったのか。今はただ、無骨な腕に抱えられお世辞にも心地が良いとは言えない振動に身を任せた。

遠目で二人を眺める者がいた。

一つの姿は樹木の遙か上部に生える枝に立っている。群青色の装甲に身を包んだ細身の肉体は、微塵も揺れることなく直立していた。時代錯誤な笠から覗く眼光が白亜に向けられている。

「ホメロス。相変わらず安い『カミカゼ』が好きなようだな。酔狂

な」

四散したホメロスの破片を塵のように見下しながら、吐き捨てるように呟いた。

「そこまでしてリジエネレイトが欲しいか。あれは貴様如きが扱える代物ではないというに」

誰に対してでもない、独り言が続く。

「何にせよ、お前が手にすることはない。彼は、まだ伸びるからな」
軽く被りを振った。

「違うな……伸びるところを見たい、といったところだな。そのための治療だ」

右手の平を見つめる。そこから生える、細い棒状のコネクターがわずかに放電していた。

「今は休め、少年。地獄はこれからだ」

もう一つの姿は、さらに離れた樹木の根本にあった。ごく普通の狐が、隠れながら一部始終を覗いていた。

「ドウダ？」

狐の頭に座するぬいぐるみが、愛らしい片言な口調で尋ねた。ラーメンの丼を帽子代わりに被った、一面黒の頭部は地球上に存在する生物のどれにも当てはまらない。

「……リジエネレイトは進化するののか？」

落ち着いた口調で尋ね返した。

「基本ハシナイ。デモ、彼ハシタネ」

狐はふんと鼻を鳴らした。

「それは何かを知っている口調だな」

「サテネ」

ぬいぐるみは動じることなく応じる。

「全く『ドワーフ』というものは本当によく分からない生き物だな」
ただでさえ細い目をさらに細めた。

「何にせよ、あそこで殺さなかったのは正解だったかもしれないな」

「ツマリ……彼ヲ認メルツテコト？」

「今は無理だ」

狐はきびすを返す。

「だが、あれがどこまで伸びるのか見届けたくなった。それは事実だ」

「素直ジャネエナア」

ぬいぐるみは瞳の光を横棒に変化させた。

三浦に抱えられたまま林を抜け、境内に出た。

「水瀬君！」

父親に寄り添っていた優希は、白亜の姿を確認するなり駆け寄ってきた。

「神風さん！」

優希の衣服はすっかり汚れ、容姿も乱れていた。それでも瞳には輝きが満ちていた。

白亜はすっかり安堵し、ようやく全身の力を抜くことができた。

「水瀬君は無事だよ」

三浦は白亜をゆっくりと降ろした。

「水瀬君……！」

突然優希はぼろぼろと涙を流し始めた。

「僕は大丈夫。神風さんこそ怪我してなくて安心したよ」

白亜は微笑みながら返すも、優希は首を横に振った。

「ほんとうに、ごめんなさいっ……！ 私、水瀬君にひどい事、したのに……っ！」

涙は絶えず溢れ続け、嗚咽も激しくなる一方だった。

「あんなの、なんてことないよ」

当然嘘である。誇張無しで死にそうなほどの痛みであった。

ポケットからハンカチを取り出し、優希に差し出す。

「だから、笑って」

優希は恐る恐るハンカチに手を伸ばした。そして、溢れる涙をそっと拭き取った。

「……うん」

満面の笑みが浮かんだ。再び涙が頬を伝った。

——ああ、本当に良かった。

己の変身能力を未だに認めたくなかった。しかしこうして誰かの笑顔を守れるのであれば、能力を拒絶してはいけないのだと思った。

「君、さっきの……」

優希の父が声をかけてきた。

「あっ……」

気まずさを感じた。本来なら、白亜はここにいてはいけない存在である。彼の警告を無視して林に入ってしまったことをどう誤魔化すべきか——

「神風さん。実はエイリアンがもう一体侵入してきましたよ」

いつの間にかガスマスクを外していた三浦が真剣な顔つきで話始めた。

「そいつは水瀬君を捕まえていたんです。なので、ついでに彼も助けました」

「ああ、なるほど」

優希の父はすんなり納得した。

「水瀬君も大変だったろう。早く帰って体を休めるといい」

「は、はい」

複雑な心境で、劳いの言葉を受けた。

「後日、現場の調査を行います。また連絡いたしますので、よろしくお願いいたします」

「いえいえこちらこそ。優希を助けていただいて、本当に感謝して

おります」

大人同士が深々と頭を下げていた。

「さ、優希。帰ろうか」

「うん」

優希は父親に返事をして、白亜の目をじっと見つめた。

「また明日、学校でね」

にこりと微笑んで、白亜の前から去っていった。

優希たちの姿が視界からなくなった後、白亜は三浦に頭を下げた。

「ありがとうございました」

「いいってことよ」

三浦はへらへらとした調子で返した。

「君も疲れてるだろうから早く休みな。さっきの話、あたしから上田センセに報告しとくから」

「いいん、ですか？」

「へーきへーき。ていうか、君をいちいち支部まで引っ張っていくと手間かかるから。本当は今日、休日だったのよ。なのに、人がみんな出払ってるとかって朝っぱらから電話あってさあ。もう勘弁してほしいわあ」

実に嫌そうな表情で愚痴をこぼし始めた。

「……すいません」

「あ、いや、君はなんも悪くないのよ。むしろ勝手に愚痴ったのはこっちだから。ごめんね」

三浦は本当に申し訳なさそうに苦笑した。

「じゃ、帰ろうか。送ってくわよ。車、そこにあるから」

「本当に、色々ありがとうございます」

「いいってことよ」

三浦とともに、LGOのマークがプリントされた一般乗用車に乗って帰路についた。運転手は初めて見る男性だった。

「あの作戦の時、俺もいたんだがなあ」

二十代後半とおぼしき線の細い男性は乾いた笑い混じりに呟いた。そう言われても思い出すことはできず、返事に困った。それを見ていた三浦は爆笑した。

家に到着した時、時刻は未だに正午を回っていなかった。先ほどまでの出来事が半日かかったのではないかと思うほど長く感じていたので、意外だった。

「今日はありがとうございました」

「むしろ礼を言うのはこっちよ。んじゃ、楽しい休日を」

三浦は手をひらひらと振った。白亜は深々と頭を下げた。

帰宅するなり、小百合と綾に驚かれた。

「どうしたの！？ そんなぼろぼろになっちゃって」

「まさか、喧嘩でもしてきたんじゃあ……！？」

白亜は、ここでもうやく自分の格好を意識した。衣服はすっかり土や落ち葉に塗れていた。

「あっ……実は——」

「とにかくすぐにシャワー浴びてきなさい！」

「え、えっと——」

「着替えは用意しとくから！」

小百合の語気には勝てなかった。やや乱暴に衣服の汚れを叩き落とされ、浴室に向かった。

成すべき事を無事に終えた後のシャワーは実に気持ち良かった。

驚くほどに疲れが流されていく。

優希を救えた事、自身の姿が立派なものへと昇華した事——思い返すだけで心が歓喜で満ちていく。

第十八話 日常と戦場の狭間

「おはよう、神風さん」

翌日。既に登校して椅子に座る優希に声をかける。

「おはよう、水瀬君」

昨日の事件の影響など微塵も感じられぬ笑顔で挨拶を返してきた。

「怪我とか、大丈夫？」

「うん。ちよつと擦りむいちゃっただけだから」

ほつと胸をなで下ろした。ランドセルを降ろし、席に座る。

「そういえば、昨日はなんで林にいたの？」

質問を聞くなり、優希は返事を躊躇しているかのように視線をわずかに逸らした。

「あつ、ごめん。言いたくなかったら別に――」

「ううん、そんなこと、ないよ……」

そう言うも、未だに表情は陰っている。

「あのね……」

優希は白亜の耳元にそつと顔を寄せた。少女らしいほのかな甘い香りが白亜の感情をくすぐった。

「誰にも言わないでね」

「う、うん……」

二人だけが共有する秘密をこれから知らされるのかと思うと、鼓動が早くなる。さらに、優希のふわりとした囁き声と微香がそれに拍車をかける。

「林に、お守りを落としちゃったの」

「え？」

あつさり期待は裏切られた。

「……お守り？」

「うん」

優希は困った様子でこくんと小さく頷いた。この様子から、その

お守りはよほど大切なものと判断できた。

「一緒に探すよ」

気づけば、即答していた。

「だ、大丈夫だよ。林はそんなに広くないし、私一人でもなんとかなるから――」

「でも、一人より二人っていうから。ね？」

白亜は明るく笑ってみせた。

「本当にいいの……？」

「だって、友達だから」

優希は何かに気づいて、瞳を小さく見開いた。間もなく瞼をわずかに閉じて、納得するように頷いた。

「そう、だよ。白亜君は友達なんだもんね」
再び頷く。

「じゃあ、放課後神社でね」

「分かった」

二人は微笑み合った。

「でも、お守り落とすぐらい恥ずかしくないと思うのに」

「ううん、きつとみんな馬鹿にするよ。私、普段から失敗ばかりだし――」

「おっはよし、お二人さん」

背後から威勢の良い挨拶が飛んできた。二人はびくりと身を震わせた。同時に振り向くと、そこには美月がにやにやしながら立っていた。

「お、おはよう美月ちゃん」

「ふうん、どうやらその様子じゃあ仲直りはうまくいったみたいねえ」

優希は頬をわずかに紅く染めて頷いた。

一方白亜は複雑な心境だった。確かに優希とは仲直りできた。しかし、美月と会うのはあの日以来なのだ。

「なによ、水瀬はガン無視？」

「そ、そんなことないよ」

「優希の友達であたしの友達なのになあ。悲しいわね」

美月はわざとらしく顔を歪ませた。

友達——白亜は彼女の言葉を反芻する。その意味を理解するために。

「あの、陣野さん」

「なに」

「友達……でいいの？」

少女の顔が不快な感情を露わにした。

「は？　今更何言ってるのよ」

「え……でも、僕——」

「あたしは友達やめるなんて一言も言っていないんだけど」

美月はすっかり呆れてしまい、二人の前から去っていった。

白亜は現状が飲み込めず、ただ啞然とするしかなかった。

「こうして水瀬君と仲直りできたのも、美月ちゃんのおかげなの」

優希は美月の背中を目で追いながら話し始めた。

「相手が何であっても友達は友達だって教えてくれた。私は、そんなことも気づけなかった」

小さな溜息が漏れる。

「美月ちゃんは、本当にすごいなあ」

友達に友達、例えばエイリアンであっても——綺麗事を嫌っているように見える美月の言葉とは信じ難い。しかし、現に優希は人間でもエイリアンでもある白亜との仲直りを果たしている。

陣野美月——小学六年生の彼女をとて同年代とは思えなくなってきた。

放課後、白亜は一人で神風神社に向かった。優希とともに下校しても良かったが、変な噂が立っては優希に申し訳ないと思い、優希の下校を確認した後わずかに時間を置いてから校舎を出た。

今日も天候は優れていた。肌寒さは微塵も感じられない。

途中、神社に向かう足取りが弾んでいることに気がついた。このところ良い事尽くめで、かつこのような天候ではこうなるのも仕方ないと思った。

神社に着くと、参道で優希が待っていた。

「お待たせ。遅くなってごめんね」

「ううん、平気だよ。じゃあ行こうか」

ふと昨日の出来事を思い出し、足を止めた。

「どうしたの？」

「そういえば三浦さん、後日林を調査するって――」

「それなら大丈夫だよ。午前中に終わったってお父さんが言ってたから」

「そっか」

それでも何かを忘れているような気がした。しかし特に気に留めることなく林に向かった。

林は事件が起こった後でも何一つ変わらぬ情景が広がっていた。

「お守りってどういうの？」

「赤色の唐草模様で、普通に神社で売ってるような形なの」

白亜はきよろきよろと周囲を見回すも、雑草しか確認できない。

「もうここら辺は探したから無いと思う……」

優希は意気消沈した様子で教えてくれた。

見渡す限り緑葉と木々が広がっている。この中を風潰しに探すのはさすがに骨が折れそうだと思った。

「変身して何か能力があればなあ……」

変身後の視界にはリーダーらしき図形が描かれていた。あれを利用できないかと思ったが、それ以前に変身しなければならない。しかし、今の白亜の心境は驚くほど落ち着きを見せている。

「索敵能力ヲ使エバイダロウ」

片言気味の愛くるしい声が聞こえた。思わず優希に振り返るも、彼女も目をぱちくりさせるだけだった。

「ココダ」

声は樹木の根本から聞こえてきた。間もなく、ぬいぐるみのような生き物が樹木の後ろから姿を見せた。

「あっ！ あの時の……」

「知ってるの？」

「うん。初めて水瀬君が変身するのを見た日に」

ケープをまとい四肢が短いのは兎も角、頭部は一面黒に染まっている。さらにはラーメンの丼を帽子のように乗せている。これがエイリアンか否か以前に「奇妙」という感想しか思いつかない。

「今日ハアノ乱暴女と一緒にジャナインダナ」

目と思わしき二つの楕円状の光が優希に向けられた。乱暴女と聞いて、瞬時に美月と理解した。

「あなたが美月ちゃんの木刀を盗んだから、あんなことになったやつたのよ」

優希は、美月が乱暴女であることを否定しなかった。なぜ否定しないのか、今は考えないことにした。

「ソレハ誤解ダ。アイツガ構エルカラ悪インダ」

「でも美月ちゃん、襲ってくる気配がしたって——」

「子供ノ感性ナンテ当テニナラナイ」

なにやら言い争いが始まりそうな予感がした。白亜は戸惑いながらも口を開く。

「ね、ねえ、索敵能力って何？」

生き物が白亜に向いた。目の光は横長に変化していた。

「シカモ、君ハ自分ノ体ノ事ヲ把握シテイナイ。人間ハナント情ケナイ生物ダ」

精神を逆撫でされるも、ぬいぐるみの言葉は興味を引きつけられた。なぜ、索敵能力などという人外の力を知っているのか——

「もしかして君、僕がリジェネレイターってことを……」

「分カルヨ。僕モえいりあんだカラ」

ぬいぐるみはさらりと自身の正体をさらけ出した。心臓が跳ね上

がる。

「エイリアン……!?!」

「ミンナ、ボクラヲどわーふナンテ呼ンデル。ナンデカ知ラナイケド」

「……君もホメロスみたいに僕のリジェネレートが目的なの?」

「イヤ、全然」

果たして嘘か真か、金色の瞳から伺い知ることはできない。

「じゃあ何で僕の前に?」

「手助ケ、ダ。ソウダナァ……マズハ手始メニ索敵能力ノ使イ方ヲ教エテヤルヨ。ホラ、変身シロヨ」

「でも、今は変身できないんだ」

「へ?」

「今は気持ちが落ち着いてて……」

ドワーフの目が、漫画でよく見かける「ジト目」という形に変化した。

「気持ちモ何モ関係ナイ。変身シタイト思エバイツデモデキル」

「無理だよ……」

「トニカクヤツテミロ」

白亜は目を閉じ、言われるがまま変身を願った。正直、こんな事で変身できるとは思っていなかった――

「あ……!」

優希が驚きの声を上げた。

人間特有の五感が変容していく。この感覚は間違いなく変身している証拠だった。

ゆっくりと目を開く。視界には整理された文字列や図形が多く表示されていた。

両手を持ち上げる。純白の装甲に包まれた細身の手腕が映し出された。

「変身……しちゃった」

ぽつりと呟いてしまった。

「ヤッパリデキルジャナイカ。ばーじょん1ノ欠陥ハ無事修復デキ
タヨウダナ」

「バージョン、1？」

「以前ノ君ノ姿ノコトダ。今ノ君ハばーじょん2」

記憶が蘇る。確かに、変身する際視界には「Version」と
いう表記があったた。

「マア今ハソシナコトドウデモイインダ。サア、索敵能力ノ使イ方
ヲ教エルヨ。HUD^{ヘッド}右上ニれーだーが見エルダロ？」

聞き慣れぬ言葉に耳を疑った。

「ま、待って」

「ナンダ？」

「そ、その『はっど』って何？」

ドワーフはがっくりと肩を落とした。

「……オ前、本当ニ何モ知ラナインダナ」

「そんなこと言われても……」

「HUD――Head――Up Displayノ略ダ。要スルニ、
今オ前ガ見テイル視界ノコトダヨ」

「なら視界って言えばいいんじゃないー」

「駄目ダ！ ソモソモ視界トHUDハ意味ガ違ウンダゾ！」

ドワーフはがなり立てた。理不尽でしうがなかった。

「……マアイイ。ジャアレーだーヲ見ロ」

「分かった」

右上に位置する円上のレーダーに注目した。中心付近に赤と青の
点が一つずつ存在していた。

「赤ハえいりあん、青ハソレ以外ノ生命体ダ」

「うん、知ってる」

「今、れーだーノ下ニハ何テ書イテアル？」

レーダー下部には「MODE 1」と書かれていた。

「モード1って英語で書いてある」

「英語……」

ドワーフの瞳が真横に伸び、波を打ち始めた。嫌な予感がした。

「……右下ニハ何テ書イテアル」

右下の枠内には英語がびっしりと書かれており、それは常時新たな文字が追加され続けていた。

「え、えーっと、あーむゆにつと、こんでいしょんぐりーん……あ
く……ちゅえーた……きゃぱしてい………ああっ、どんどん文字
が消えちゃう」

「読ミニククナイノカ？」

「うん、とっても」

「……ダツタラ日本語ニ変エレバイイダロウガ」

日本語に変わる——そのような機能があることなど初耳だった。

「えっ、できるの」

「っ……」

ドワーフは俯き、黙り込んでしまった。よく見ると微かに震えているようだった。

「背中見セロ」

「えっ——」

「イイカラ」

抑揚のない声が聞こえた。白亜は背中を向けた。

「『Back Extension Open』ト念ジロ」

果たしてそれが何を意味するのか、尋ねる隙はなかった。言われるがまま念じた。

「ひっ」

突如、背中から精密な機械音が鳴り出した。背中をなぞられたような、ぞくりとした感触に襲われる。

「背中が開いちゃったあ！」

優希のおかげで、自身に起きた現象を大まかに知ることができた。果たして何が起こるのかまでは知ることはできなかった。

「トウッ」

ドワーフが掛け声を上げたかと思った次の瞬間、今度は服の隙間から氷を入れられたような感触に襲われる。

「なったにをしたの!？」

「コレカラオ前ノ設定ヲ変更スル。チョット痺レルケド我慢シロヨ」
後頭部間近からドワーフの声が聞こえた。後ろを確認すると、まるで白亜がおんぶしているかのようにドワーフが背中に鎮座していた。

「あくせす！」

ドワーフが威勢良く言い放つと、全身に電流が走ったような痺れに包み込まれる。

「ああああああああ——」

痺れに耐えきれず、思わず喚声を上げてしまった。

「水瀬君っ！」

優希の心配そうな声が聞こえた。しかし、それに答える余裕はない。

HUDがノイズで覆われる。もはやどれが文字でどれが図形なのか判断できないほどの荒れ様だった。

徐々に痺れが抜けていく。同時にHUDのノイズも解消される。

「マ、コンナモンカ」

背中の違和感も消えた。そして再び機械音が鳴った後、ようやく平常体に戻った。

「——あれ？」

HUDに変化が生じていた。文字や図形のハイライトは変わっていない。よく見ると、先ほどまで英語で書かれていた部分が全て日本語表記になっている。

「少しハ見ヤスクナッタダロ？」

「うん。ありがとう」

「ジャア、続キイクゾ。今、オ前ノれーだーハもーど1ニナツテルハズダ。ソレヲもーど2ニ変更シロ」

「どうやって？」

「念ジロ。大抵ノ事ハ念ジレバイイ。ヨク覚エテオケ」

早速、モード2になるよう念じてみた。一瞬でレーザー下部の表記が「モード2」に変わった。

「本当だ！ 変わった！」

「マダ続クゾ。今れーだーニハ何モ映ツテナイハズダ」

確かにレーザーから点が消失していた。

「探シタイモノヲ鮮明ニ思イ浮カベロ」

「鮮明に……」

優希の言葉を思い出す。赤色の唐草模様、普通に神社で売ってるようなお守り――

レーザーにぼんやりと点が浮かび上がってきた。

「点が出てきた！」

「ソコニオ前ノ望ム物ガアル。行ッテミロ」

点はレーザー中心より右上に位置している。

「神風さん、こっち」

白亜は点を目指して歩き始めた。優希も誘いに乗って後をついていく。そしてドワーフもぴょんぴょんと跳ねながらついてきた。

三分と経たぬ間に目標にたどり着いた。点はレーザー中心部に浮かんでいる。

「恐らくここらへんに……」

周囲は相変わらず雑草で覆われている。白亜はしゃがみ込んで草をかき分ける。

「あっ」

緑の中に、一際目立つ朱色のお守りが落ちていた。唐草模様で、地味ながらも風雅な作りをしていた。

「あったよ！」

白亜はお守りを拾い上げ、優希に見せた。

「うん、これだよ！」

優希の表情が照明を灯したように明るくなった。

お守りを優希に手渡した。受け取る少女の手は機人のそれと比べて一回りも二回りも小さかった。

「ありがとう、水瀬君」

優希はほんのりと頬を染め、柔らかな笑みで礼を述べた。その様を見ていると甘美に包まれ、嬉しくもあり恥ずかしくもあった。

「う、ううん、気にしないで」

照れ隠しで両手を振りながら謙遜に返した。

「それにしても、とても綺麗なお守りだね」

「うん。私も気に入ってるんだ」

「自分で買ったの？」

「ううん。お父さんとお母さんが、十歳の誕生日にくれたの。あつ、もちろんプレゼントはこれだけじゃなかったよ」

二人は揃って笑い合った。

「でも十歳の時ってことは、結構経つんだね。なのに、すごく状態がいいよ」

「……これはね」

優希の口調が落ち着きを見せ始めた。

「お父さんとお母さんが、絶対に手放しちゃ駄目だって言ってた。なんでって聞いたら、これは優希を災いから守ってくれる大切なお守りだからって答えたの」

「きつとすごい御利益があるんだよ」

「そうかもね。だから、無くしたなんて知られたらすごく怒られちゃうと思う。見つけてくれて本当にありがとう」

綾の時といい、人に感謝される度変身能力の有り難みを実感する。

「見ツカッタヨウダナ」

二人のやりとりを無言で見つめていたドワーフがようやく口を開いた。

「ドワーフもありがとう。君のおかげだよ」

「イヤ、感謝サレルヨウナ事ハシテイナイ。ソレヨリモ……」

ドワーフは白亜の感謝などどうでもよいといった様子で、淡々と言葉を続ける。

「コノママダト、オ前死ヌゾ」

「えっ」

和やかな空気をぶち壊す宣告だった。

「どういう、こと――」

「それすらも分からぬか。姿は変われど愚かなのは変わらないな」

聞き覚えのある、低い声が聞こえた。そして、胸の高まりが激しくなる。

優希やドワーフとは違う気配を感じ取り、振り向く。ごく普通の狐が白亜を凝視していた。

「も、もしかして……」

二日前の恐怖が蘇り、虹色の狐に切り裂かれた部位が疼く。

「確か私は言ったはずだ。二度と目の前に現れるな、と」

威圧的な声色に怖気付きそうになるも、心を強く持った。

「で、でも勝手に現れたのはそっちじゃないか」

狐はただでさえ細い目をさらに細め、卑屈に笑った。

「その通りだ。分かっているじゃないか」

恐らく試されていたのだと、すぐに理解した。あっさりと釣られてしまい、悔しかった。

「まあよい。そのドワーフが言うように、このままでは貴様に待つ先は地獄だ」

「どうして……」

「貴様はやりすぎたのだ」

やりすぎた――思い当たる節はない。

「オデュッセウスが抱える四機の上級エイリアン、その内の一機であるホメロスを手にかけてしまった」

「四機……!？」

初めて知らされる、認めたくない現実だった。しかしよくよく思い出してみれば、ホメロスは仲間がいることを示唆していた。

「まさか奴の手先がホメロス一機だけとは思っていないだろうな。ホメロス以上の実力を持つ、三機の上級エイリアンが残っているのだぞ」

「その三人も、リジエネレイトを……？」

「だろうな。なんせ、格下とはいえホメロスを自爆に追い込むほどの実力を持つリジエネレイトだ。喉から手が伸びるほどだろう」

愕然とした。これで一区切りついたかと思いきや、むしろ戦いの火蓋を切ってしまったのだ。

「でも、君はなんでそんなに色々な事を知ってるの？」

「その辺をふらふらしていると嫌が応でも情報が入ってくるのだ。無駄に索敵能力が高いせいだな。例えば、オデュッセウスの求めるものとか」

胸部の内側に違和感を覚える。驚きで心臓が跳ねた時と類似していた。

「あいつは、水瀬綾という人間の小娘を探している。果たして何が目的かまでは分からないが」

「みな、せ……？」

優希が口を開いた。さらにどきりとする。

「もしかして、水瀬君……」

狐が牙を剥いて笑った。

「ふふふ。先ほどからその小娘が水瀬などと言っていたから、もしやとは思ったがそういうことか」

狐は白亜の様子のおずかな変化に気づいていた。出来れば誤魔化したかった。虹色の狐が何を考えているのか分からない以上、信用はできないからだ。ひょっとするとオデュッセウスの仲間である可能性も否定できない。しかし、もう隠し切れる状況ではなかった。

「……水瀬綾は、僕の義理の姉だよ」

「義理の……!？」

驚きの声を上げたのは優希だった。それもそのはず、彼女にはまだ白亜の家庭事情を話していない。

「これは愉快だ！ リジェネレーターであり、オデュッセウスに近い人間でもある。なんという数奇な運命！」

狐は実に喜々としていた。

「これはなるべくしてなった結果ということか。益々面白くなってきたな」

「あ、あの……なにを？」

何故狐がここまで喜んでいいのか、何一つ理解できない。

「ドワーフ！」

「ナ、ナンダヨ」

「この愚か者をしっかりと導いてやれ」

「何ヲ言イ出スカト思エバソナコトカ。言ワレルマデモナイ」

「ふふ、楽しくなってきたぞ」

狐は踵を返した。

「小僧」

恐らく白亜を指している。腑に落ちないものの、反応するしかなかった。

「な、何」

「貴様が更なる進化を果たし、私を打ち負かす日が来るのを楽しみにしているぞ。その時、私は貴様の力になろう」

「え——」

聞き返す間もなく、狐は走り去ってしまった。

「どういう、こと……？」

「ツマリ、アイツハオ前ヲ認メツツアルツテコト。ガンバレヨ」

「がんばれって言われても……」

「ボクガイル。安心シロ。デモ、ビシビシイクカラナ」

溜息を吐こうにも、肺が無いので呼吸ができなかった。

「僕、どうなっちゃうだろう……」

新たな敵と味方、そして自身の変化。水瀬白亜の日常はより異

質なものへと変貌してしまったのか。

「水瀬君」

優希が声をかけてきた。振り向くと、困惑混じりの真面目な顔で迎えられた。

「私、何が起こってるのかよく分からないし、全然役に立てないと思う。それでも、私は水瀬君の友達だから」

変貌を食い止めてくれる存在がいる。彼女たちがいる限り、日常は崩れない。だからこそ――

「うん、ありがとう」

皆を守る――白亜は大きく頷きながら、心に誓った。

関東総合病院、関係者のみが立ち入りを許される上階。人気のない廊下に、総司と上田がいた。二人は互いに顔を合わせることなく、窓の向こうの沈みつっある夕日を眺めている。

「……やはり、こうするしかないですね」

「状況が状況です。上層部からも許可は下りています」

「失礼ですが、義父のあなたとしてはどういうお気持ちなのかお聞きしてもよろしいでしょうか」

「辛い、ですよ。子が戦場に赴くことを喜ぶなど、百年以上昔の間がやる事です」

総司は沈痛な面持ちで苦々しく溜息を吐いた。

「蓮に対しても、この気持ちを持ってあげるべきだった。そうすれば、今の結果に繋がらなかった」

「水瀬さん、今は今の事を考えましょう。それに過去を悔やむにはまだ早すぎます。蓮さんと話し合う――あなたがまずすべき事はこの一つです」

わずかな沈黙。紅の輝きは照明に打ち消され、廊下は白光に包まれている。

「すいません、若造が調子に乗りました」

「いえ、構いませんよ。あなたも相当参っているんですね」

「……分かりますか」

「普段のあなたとは思えぬ残酷さでしたから」

今度は上田が深く溜息を吐いた。

「……リジエネイトはこんな事をするために作られたのではないのに」

「どんな時代も、作り手の意思は軽視されてしまうものですよ」

上田は悔しそうに拳を握り締め、眉をしかめた。

「すいません、仕返しにしては少しばかり酷過ぎました」

「いえ……」

総司は苦笑いを浮かべるも、上田の様子は変わらなかった。

第十九話 エピローグ 「始まり」へもう一歩

ドワーフと狐に出会ってから五日後。白亜、そして水瀬家の人間は正装に身を包んで早朝からLGO関東支部へと向かった。総司曰く、重要な話があるとの事だった。

道中の車内は緊張に満ちていて、皆口数が少なかった。白亜にしてみれば、せっかく家族が揃ったにも関わらず活気のない今の状態が実に重苦しく残念でしやうがなかった。

支部の正門は工業施設のように殺風景で、かつ厳重な警備が敷かれていた。警備員の着用するバニラは通常のものより装甲が多く取り付けられており、重厚なフォルムをしている。

白亜たちを乗せた乗用車と正門との距離が近づき、守衛たちが身構えた。遮断機の上部には球体状のカメラが備え付けられており、レンズが車を捉えていた。総司以外の人間はすっかり固まってしまった。

総司は近づいてきた警備員に員証と思わしきカードを見せた。警備員は守衛室に手を振ると、遮断機が道を開けた。

警備員の冷ややかな視線に見送られながら、正門を抜けた。車内が溜息で満たされた。

施設内は一般的な会社のような雰囲気で、正門ほどではないにせよ緊張に包まれた。受付に向かうと、LGO指定の制服に身を包んだ女性が受付嬢と会話に花を咲かせている。白亜にとっては三度目の出会いとなる人間、三浦絵里香だった。

「三浦隊員」

総司が声をかけると、三浦がこちらに向き直って姿勢を正した。

「お待ちしております」

顔を白亜に向けるとにっこり微笑んだ。

「久しぶりだね、つってもまだ一週間も経ってないけど」

「あの時は、ありがとうございました」

白亜のみならず、水瀬家の人間が全員でお辞儀をした。林の事件は周知済みだった。

「お構いなく。人々を守るのがLGOの仕事ですから」

「君の口からそんな言葉が出るとはな」

「やっぱり違和感強いですかね」

三浦はへらへらと笑った。場の緊張がわずかに解れた。

「では、こちらへどうぞ」

三浦に案内され、エレベーターで上階に向かった。

しんと静まりかえった階層。廊下は暖色のカーペットが続くのみで、装飾などない無機質な作りだった。

標識に「第一会議室」と書かれた部屋に入った。

まずは長いU字型テーブルが、続いて前方の巨大なスクリーンが目飛び込んできた。白亜にとって、どれもドラマでしか見たことがないものだった。

スクリーンの前に、二つの人間が立っていた。一人は白衣を纏った上田だと分かった。しかしもう一人――スーツ姿で髭を生やした、スキンヘッドの老人は誰だか分からなかった。

「支部長、お連れしました」

三浦は険しい面持ちで老人に報告した。

「ご苦労。下がってくれ」

高齢で重みのある低い声が部屋に響いた。まるで部屋の空気が一瞬にして凍ってしまうような威圧的な声だった。

三浦は一礼した後、退出した。表情は険しいままで、白亜たちに見向きもしなかった。

「掛けたまえ」

もはや命令にしか聞こえなかった。総司に続いて三人は歩きだした。

徐々に老人の詳細が明らかになる。

一言で表すなら「軍人」である。

閉じた左目には斜めに伸びる深い傷跡、凝視するだけで生物を仕留められるのではないかと錯覚するほどの殺意を放つ右目、岩盤のような顔つき、頭部を支える筋骨隆々とした首筋――白亜にしてみれば恐怖の対象以外の何者でもない。

そして、背骨が鉄で出来ているかのようにわずかな歪みも感じられない姿勢と逆三角形そのものである肩幅が恐怖に拍車をかける。

三浦はこの老人を支部長と呼んだ。つまり、ここでは最も偉い人間である。震え上がりそうになった。

四人は席についた。

「お忙しい中お集まりくださいます、ありがとうございます」
未だに椅子に座らない上田が慎み深く頭を下げた。

「では、支部長」

「うむ」

支部長の瞳が白亜を捉えた。「蛇に睨まれた蛙」と化した。

「私はLGO関東支部長の東郷と申す。では、結論から述べる。水瀬白亜、いや、リジェネレーター01ゼロワンを本日付けよりLGO特別隊員に任命する」

青天の霹靂である。白亜は何を言われたのか分からず、思考が停止した。

思わず、周囲の人間を見回した。綾も小百合も口をわずかに開き、血の気が引いていた。一方総司は奥歯を噛み締め、眉間にしわを寄せ目を細めていた。

「な、何故白亜がそのようなっ」

最初に口を開いたのは小百合だった。その声はわずかに震えていた。

「まずは落ち着いていただきたい」

東郷は微動だにせず呟いた。

「皆様は、水瀬白亜が関わり合った事件について既にご存じのはず

だ。始まりは、ホメロスによる水瀬綾誘拐事件。彼とLGO隊員が協力し、無事人質は救出された」

綾をちらりと見ると、彼女は伏目がちにきゅっと唇を締めていた。「これ以降、少年が関わる事なくオデュッセウス一派を殲滅できれば問題はなかった。しかし、少年は再びホメロスと相見えた。さらに彼はホメロスを撃破してしまった――更なる進化を遂げて」

「つまりどういう事……なんですか」

小百合は不安そうに尋ねた。

「これまでの白亜はリジエネレイトの存在を狙われるだけの存在であり、仮に変身しても戦闘能力は低い。例えば悪いのかもしれないが『兎』のようなものだったんだ」

総司が質問に答え始めた。

「しかし、進化を遂げてしまえば戦闘能力が格段に上がってしまった。『兎』から『狼』になったんだ。『兎』と『狼』、戦うのに強大な力が必要となるのはどちらか言うまでもないだろう」

「……要するに、これからお兄ちゃんたちは白亜を全力で狙ってくるってことでしょ」

綾は不愉快そうに口を開いた。

「その通りだ……」

総司はその現実を認めたくなさそうに顔を渋めた。

大人たちが言っていることは、狐の言葉とほとんど同じだった。

「それに備えて、少年が我々とすぐにコミュニケーションを取れるようにし連携を計れる環境を整えなければならない。そしてもし少年が一人で対峙しなければならなくなった時、生き残れるだけの戦闘技術と知識、そして経験を取得せねばならないと考えている」

「その結果が、特別隊員ですか」

ようやく落ち着きを見せ始めた小百合が冷めた様子で答えた。東郷は重々しく頷いた。

「しかし、あくまで『特別』隊員だ。少年にはこれまで通り義務教育を続けてもらい、いくらかの空き時間を利用して訓練を受けても

らう。そこまで深刻に考える必要はない。『習い事』に通ってもら
う程度のものだ」

「程度、ですか……」

小百合の口調から、納得などしていない事がはっきりと分かる。

「それに、ホメロスを倒せるだけの実力がある白亜を従順な手ごま
にしたいんですよね」

綾は氷の刃を思わせる言葉を吐き突けた。瞳には憎悪の色がぎら
ぎらと宿っている。

「綾、お前——」

「水瀬綾、君の言う通りだ。ご両親から立派な教育を受けているの
だな」

総司は沈痛な面持ちで深々と頭を下げた。

「申し訳ございません」

「構わん。ほぼ事実だからな」

東郷は顔色一つ変えていない。心の内は怒りに満ちているのか、
それとも本当に怒っていないのか、白亜は見抜くことができなかった。

「近年、下級エイリアンの活動が目立つ。オデュッセウス一派を初
めとした上級エイリアンの仕業だ」

東郷の瞳が再び白亜を捉えた。

「君は既に知っているはずだ。ホメロスの能力を」

「あ——」

林で戦ったナナフシ型エイリアンは、明らかにホメロスの能力で
意識を操作され襲いかかってきた。そして、活動を止めたはずのナ
ナフシを再び起動させたりもした。

「下級エイリアンの操作、それこそがホメロスのAFだ」

AF——ステイシス・フィールドもそう呼ばれていた。未だにA
Fが何であるのか分からない。

「あの……」

白亜はおずおずと挙手した。

「なんだね」

「AFって、なんですか……？」

東郷は総司に目配せした。

「AF——Alien Functionの略称さ。一体のエイリアンが最低一つは持っている固有機能の事で、身体能力を上げたりバリアを張ったりホメロスのように何かを操ったりと、多種多様な機能なんだ。中には原理が説明できないものも存在し、まさに魔法のような力だよ」

総司は柔らかな口調で教えてくれた。

「バリア……」

「ん？」

「僕の能力は、それかもしれない」

総司のみならず、上田も興味を示し始めた。

「そういえば、白亜君の能力について考えたことはなかったわね。それはどんなもののなの？」

「その、説明しにくいんですが、飛んできたもののスピードを——」

東郷が咳を一つ鳴らした。

「上田先生、今はその事を聞く状況ではない。後々リスニングの間を設けてくれたまえ」

「あっ、す、すいません」

上田は気まずそうに顔を伏せた。

「続きを話そう。ホメロスは自身の能力を誰でも扱えるよう、特殊なプログラムを作成した。その結果、一派はより多くの下級エイリアンを手中に収めることに成功した」

白亜は自身が誘拐された日を思い出した。螭螂型エイリアンが動き出す直前、男たちは携帯電話を操作していた。正にそれがプログラムだったのだと確信した。つまり、男たちはオデュッセウスの協力者であった。

「本来下級エイリアンは人前に姿を見せることはない、自然界の動物のようにな。それ故に現在のLGOでも未確認の個体は多い。し

かし、最近是新種の報告が相次いでいるのだ」

つまりオデュッセウス一派は精力的にエイリアンを発見し、配下に加えているのだと理解できた。

「新種には手強いものが多く、戦闘を重ねる度に被害は増える一方だ。新型A2の開発をメーカーに依頼しているが、それにも時間がかかる」

「そこで白亜の順番、ということですか」

小百合の声は冷めていた。

「主力になってもらうつもりはない。サポートに徹してもらおう。もちろん彼の身の安全を最優先に考える」

決して慣れることのない、三度目の東郷の凝視。

「話は以上だ。今後の予定については上田先生か君の父親に確認してくれ。最後に、何か質問があれば答えよう」

拒否権は与えられなかった。しかし、仮にあったとしてもそれを使用する気は皆無だった。

それよりも、先ほどから抱いている疑問をぶつけたかった。

「あの、リジエネレイター01ってどういうことですか」

「君の変身体の名称だ。最初に変身を確認されたリジエネレイターだからな。他には？」

返答は実に単純明快だった。故に話は続かない。

「い、いえ特には……」

「うむ」

東郷は席を立ち、白亜の元に歩み寄った。そして表情こそ変わらぬものの、恭しく左手を差し出した。木の幹のようにごつごつとした皮膚に覆われている。

「えっ」

「では、これからよろしく頼む」

握手を求めているのは明らかだった。しかし、まさか小学生の自分がこのような対応をされるとは思ってもいなく、戸惑うしかなかった。

「は、はい」

不安げに左手を伸ばし、東郷の左手を恐る恐る握った。外見通りの肌触りだったが、決して恐怖は感じなかった。むしろ父性を感じさせる温もりは恐怖を消し去っていく。

握手はわずか十秒足らずで終了した。

「では、私は予定があるのでこれにて失礼させてもらう」

東郷は水瀬家に向かって深々と頭を下げ、退室した。それでも部屋の空気は冷えきったままだった。左手に残った温もりだけが唯一の熱であった。

一階休憩室。質の良いソファとテーブルが並び、セルフサービスの飲食物も品揃えは豊富だった。

一つのテーブルを、水瀬家の人間と上田が囲んでいた。三つのホットコーヒーと二つのアイステイー、そして中央にはクッキーやパウンドケーキといった洋菓子を載せた皿が置いてある。口がつけられたのは一つのアイステイーのみだった。

「本当に申し訳ありません。私が至らないばかりに……」

呟くように謝罪する上田は膝に手を乗せ、すっかり意気消沈していた。

「上田先生、あなただけの責任ではない。いや、誰の責任でもない。なるべくしてなった結末だ」

総司は沈痛な面持ちを崩すことなく言った。

しばしの無言。小百合は口を開くことなく、じっとコーヒーを見つめていた。漆黒に吸い込まれていきそうな様子だった。

「……白亜はさ」

沈黙を綾が破る。

「この事についてどう思ってる？」

皆が白亜に注目する。

「嫌なら嫌って言うてもいいんだからね。その時は、お父さんや上田先生がきつとなんとかしてくれるから」

二人は苦虫を潰したような、困っているのか笑っているのか判断しかねる表情を浮かべた。

答えは、決まっていた。

「僕、戦うよ」

誰もが息を飲み、目を大きく見開いた。

「喧嘩するのは嫌だよ。痛いし苦しいから。でも、目の前で苦しんでる人を見るのはもっと嫌だ。それが、自分の力不足のせいだったら尚更……」

「白亜？」

「あの時だってそうだ。もし僕がちゃんと戦えていれば、お姉ちゃんを早く助けられた」

「あれはあなたのせいじゃない。気にする必要なんか――」

「それにこの間だって、もし進化しなかったら神風さんを助けられなかったかもしれない」

一旦、きゅっと唇を締めて間を置く。視線はグラスの結露に向けたままだった。

「これから周りの人がもっと危険になるかもしれない。もうこんな思いはしたくない。だから僕、一生懸命勉強するよ」

「白亜……」

誰もが複雑な感情を顔に表していた。果たして喜怒哀楽のどれに合致するのか、判断は難しい。

「白亜君、本当にごめんなさい。あなたをこんな事に巻き込んでしまったって……」

「上田先生は悪くないです。それに、ちょっとだけ感謝してます」
「えっ……？」

上田は狐に摘まれたような顔をした。

「もしリジェネレイトがなかったら、お姉ちゃんや神風さんが苦しんでる時に何もできなかったと思います。リジェネレイトのおかげ

で、僕は人を助けることができた。そして、これからも助けたい」

白亜は顔を上げ、全員を見渡す。皆真摯な様子で耳を傾けていた。「だから僕、頑張るよ」

目力を込めて、はつきりと言い放った。

休憩室はしんと静まり返った。何かまずいことを言ってしまったのではないかと思い、白亜は焦燥感に襲われた。

間もなく、小百合がくすくすと笑い始めた。

「白亜も男の子なのね。昔の蓮にそっくり」

「母さん？」

総司は気の抜けた声を上げた。

「あの子も言ってたわよね。強くなってLGOに入って、お父さんやお母さん、綾を守るって。あのきらきらとした目、忘れられないわ。今の白亜の目がほんとにそっくり」

「ま、まあ言われてみれば……」

小百合が優しげな眼差しを向けてきた。

「白亜」

「な、何？」

「あなたがこれからやろうとしていることは、すごく大変なことよ。それは分かってる？」

「うん……」

分かってはいた。しかしそれは漠然とした理解でしかないのは、自身の声の覇気からも明らかだった。

「……きつと逃げ出したくなる時もあるわ。でも、あなたは一人ではない。その事は忘れないで」

小百合は言い切った後、軽く息を吐いた。そして自身を納得させるように小さく頷いた。

「もう決まってしまったことをうじうじと悩んでも仕方ないものね。どんな形であれ私たちも白亜と一緒に戦う、ただそれだけの事よ」

総司は小百合の言葉を聞くなり、脱力しながら笑った。

「ははは、やっぱり母さんに良いところ取られてしまうな。確かにそうだ……これは白亜一人の戦いではないということを忘れそうになっていたよ」

「私たち家族の戦い……」

綾は確かめるように呟いた。

「そう、だよ。私、何勘違いしてたんだろう。特別隊員になろうがならまいが、白亜は戦わなきゃいけないんだ……お兄ちゃんがいる限り」

水瀬家の理解が進む中、上田だけは未だに浮かない顔をしている。

「上田先生」

「――あ、はいっ」

「リジエネライトが白亜を不幸にしたのか……結論を出すのはまだお早いと思います。この子の第二の人生は、まだ始まったばかりなんですから」

小百合の言葉に、上田は頷いて返した。

「……世界で一番白亜君を愛しているのは秋月夫妻です。彼らの託したものが不幸を呼ぶことなど、ないですよ」

上田は自身の言葉を反芻し、白亜に微笑みかけた。

第十九話 エピローグ 「始まり」へもう一歩（後書き）

白の機人編はこれにて終了となります。お読みいただきましてありがとうございます。

序章ということもあって、自由のない展開になってしまったと思います。そのため、窮屈な印象を与えてしまったかもしれません。

第三章はこれらの反省や読者のご意見を参考に構成していきます。

これからよろしくお願いいたします。

第二十話 歪み続ける世界

###

宵闇が包み込む時間。都市部の繁華街は昼間以上の輝きに満ちて、賑わいを見せている。若い男女は溢れんばかりの精気を発散させ、社会の歯車と化した壮年は酒で疲労を濁らせる——例えどんなに技術が発展しようとも、この光景は何一つ変わらない。

光と闇は互いに欠けることを許されない。繁華街裏通りには、表の華やかさとは正反対の光景が広がる。性欲を金で解消させる者、非合法の薬物を取引する者、汚物にまみれて這いつくばる者——「負」が蔓延する世界。

男どもの呻きで満ちる細道もその一つである。

「——なっ、なあもういいだろ？ 俺は何も知らないんだってえ」
数人の男が無惨な姿で転がっている。どの人間も年齢は若く、質の良い衣服やアクセサリを身につけている。

唯一、頭のとっぺんを天に向けている男がいる。金色の染まったソフトモヒカンが特徴的である。

彼は苦痛と恐怖で顔を歪めている。その原因から逃れようともがくも、それは叶わない。むしろ、首を絞める金属の太い指がより圧力を増す。

「嘘を吐くな」

重厚なフェイスガードから、くぐもった中性的な声が発せられた。
「うそ、じゃねえよ……もうあいつとは会ってねえっ」

金髪の男は地面から浮き上がっており、行き場のない両足が頼りなくぶら下がっていた。

「ちっ」

悪態を吐いた後、男を投げ捨てた。

「げはっ——」

男はコンクリートの壁に叩きつけられ、倒れ伏せた。微塵も動く気配はなかった。

「人間の屑が」

男の所有物と思われるタッチパネル型携帯電話が地面に転がっている。純白の装甲に包まれた巨人のように太い足がそれを踏みつけた。液晶と機械部品の破碎音が一度鳴った。

###

ゴールデンウィークが終わり、「日常」という戦争が再び始まる。それは社会人のみならず、学生も同様である。

『大学生連続暴行事件の続報です』

女性アナウンサーが新たなニュースを読み始めた。登校までソファでくつろぐ白亜は、それをじっと見つめていた。

『昏睡状態にあった被害者の一人が無事目を覚まし、警察は事情聴取を行ったと発表しました。聴取の結果、被害にあった大学生たちは同じ高校の同級生であり、親交も深かったことが明らかになりました。しかし、大学進学後は連絡を取り合っておらず、彼らの現状については何一つ分からないとのことです。被害に合われた時の状況について、全身が白い装甲に覆われた体格の大きい人型生物に襲われたと説明しています。これを受けて警察は、A2を着用した人間もしくはエイリアンが関与していると予測し、LGOと共同で捜査を進めています』

「白い、か」

白亜は不安そうに呟き、灰色のパーカーの首元から垂れる紐をいじった。

「間違えられないように気をつけないとね。でも、白亜は細身だから大丈夫か」

後ろから綾の声が聞こえた。振り向くと制服で身を包み、身支度を終えた義姉が立っていた。すっかり見慣れた姿だが、女子高生にしては長身で細い体は何度見ても綺麗だと思ってしまう。

「しかし、最近こういう事件多いよね」

「……リジェネレーターも関係あるのかな」

「それは分からない。でも、ここ最近私たちの周りでは何も起こってないね。一番可能性が高いはずなのに」

白亜は綾の意見に同意し、こくと頷いた。

神風神社近くの林でホメロスと交戦して以降、白亜や綾の周りでは何一つ事件が起こっていない。おかげで彼らは悠々自適な学生生活を送り、ゴールデンウィークも家族揃って旅行に出かけ親睦を深めることができた。

しかし、白亜にとっては逆に気味が悪くしうがなかった。綾も間接的に状況の不気味さを語っているのが分かった。

狐の言葉を思い出す。オデュッセウスに荷担するホメロス以外のエイリアン、彼らは三人おり、いずれも白亜のリジェネイトを狙っている可能性が高い。にも関わらず、なぜ彼らはすぐにでも白亜を襲ってこないのか――

「色々考えたくなる気持ちは分かるけどね」

キッチンから小百合が話し始めた。

「少なくとも今は、学生らしく過ごさない。その辺の事はお父さんやLGOの人たちが調べてくれてるから」

食器洗いを終え、タオルで手を拭きながらリビングにやってきた。

「白亜も綾も、もっと青春を満喫なさい」

「なによそれ」

綾は呆れたように笑って見せた。

「ほら、もう時間でしょ」

「ああ、そういえば」

テレビ画面左上に表示されている時間を見て、学生の二人は若干慌て気味に動き始めた。

「白亜、行くわよ」

綾がくりりと身を翻した。

一般的な女子校生のスカート丈は短く、綾も例外に漏れない。陶磁器のように白く肉付きの少ない太股の露出面積は広く、少しスカートを舞うだけでも下着が見えそうである。白亜は脈を早くしながら、その様をまざまざと見つめてしまった。

「――あつ、待ってよ！」

不意を突かれ、出発が遅れてしまった。

玄関で急いで靴を履く。

「白亜」

小百合が妙に落ち着いた声をかけてきた。

「LGOの特別隊員になったとしても、あなたは小学生よ。勉強して、友達と遊ぶことを専念していいんだからね」

「うん」

白亜は特に考えるまでもなく、即答した。数週間前から答えは決まっているから――

白亜の学校生活は、他の生徒と何一つ変わらなかった。普通に授業を受けられるし、教師からも特別な扱いをされることはなかった（今のところ事情を知る人間は優希と美月のみなので当然だが）。そして、リジエネライターだからといって能力が格段優れているというわけでもなかった。座学の見解度と体育における運動神経も、人並みもしくはわずかに上回る程度であった。

放課後。

何故か、美月が一日中不機嫌である。いつも以上に顔つきが陰しく、いつ怒鳴られてもおかしくない状態である。

「ねえ美月ちゃん、これから――」

「パス」

優希の誘いを最後まで聞くことなく、一瞥とともに怒気のこもった一言を返した。遠目から見ても、彼女たちの周辺だけ威圧的な空間が出来上がっているのが分かる。

何があつたのか問いたくなつたが、行動にできなかった。理由の第一に、美月が年頃の少女であるからだ。この歳になれば、学校教育で男女の違いを教えられる。どうして年頃の少女が頻繁に苛立ちを見せるのかという事でもある。そして第二に、純粹に美月の様子が恐いからである。

「な、何かあつたの？」

優希がようやく核心を突いてくれた。白亜は気づかれぬよう下校準備を整えるふりをしつつ、こっそりと聞き耳を立てる。

「別に」

冷たくあしらひ、ランドセルを背負って席を立つ。

「じゃ、また明日」

「あ、え、うん、また明日……」

優希はすっかり萎縮してしまい、美月が教室から出ていく様をただ見送るだけだった。間もなく席に戻ってきた。

「大丈夫？」

「うん、私はね。美月ちゃんはどうなのか分からないけど」

優希は作り笑いを浮かべた。

「ゴールデンウィークに何かあつたのかなあ……」

少なくとも、連休前の美月は通常通り「暴君」であつた。

「確か、陣野さんは稽古試合があるとか言ってたよね」

「うん。私は家族で旅行に出かけてたから、応援に行けなかったの。もしかしたら、試合に負けちゃったのかな……？」

林で出くわした時、美月は木刀を携えていた。もしかと思い後日尋ねてみれば、案の定彼女は剣道を習っていた。それだけならともかく、家が道場と聞いて色々——美月の性格や言動について——納得がいった。

「何にせよ、しばらく関わらない方がいいかも」

「そうだね……」

優希は心配そうに頷いた。

優希と別れた後、白亜は体育館に向かった。須田たちと遊ぶ約束をしていたからだ。

館内はスポーツ系のクラブ活動に勤しんでいたり、ただ自由気ままに戯れている生徒で活気づいていた。さらに、窓から差し込む陽光との相乗効果で館内はすっかり輝きに満ちていた。

一角のバスケットゴール前に、数人の男子生徒が固まっていた。その一人である須田が、入り口の白亜を見つけ手を振った。

「おう、きたな。じゃあ始めようぜ」

放課後こうしてスポーツに興じたり、一緒に宿題をやったりとすっかり打ち解けていた。グループの顔ぶれも分かるようになってきたが、今日は一人不足している気がした。

「あれ、村雲君は？」

間もなくその一人の名を出して尋ねた。グループの中でも一際気が弱くおっとりとした少年、村雲司郎がいないのである。

「ああ、当分参加できないってさ」

「そうなんだ」

「理由ぐらい教えてくれないのになあ」

須田が不満そうに愚痴を漏らした。

「塾、とか？」

「だったら尚更隠す必要ねえじゃん」

確かにそうだと、白亜は困ったように首を捻った。

「まあいいや、バスケやろうぜ」

「うん」

司郎の事で後ろ髪引かれつつも、バスケットボールを始めることにした。

陽光に紅が混ざり始め、白亜たちは解散した。須田たちとは家へ
の方向が異なり、唯一途中までの帰路を同じくしていた司郎も不在
であるため、校門を抜けた後は一人となった。

紅色に染まりつつある町並みを観賞していると、ふと頭の片隅か
ら記憶が引き出される。

「消しゴム……」

小声で呟いた。消しゴムは小さくなってしまい、とても使いにく
くなっていた。そこで、帰りに消しゴムを買っていこうと心に決め
ていたにも関わらずすっかり忘れていた。

普段は商店街をぶらつくのだが、一人では楽しくないため家への
最先端ルートを選んでいた。面倒くさいと思いつつも進行方向を商
店街に向けた。

夕方の商店街は最大の賑わいを見せていた。夕飯の食材を買いに
来た主婦はもちろん、帰宅途中の学生や散歩中の老人など、老若男
女が勢揃いだった。

白亜は白いビニール袋を提げて、文房具店を後にした。他に特別
な用事もないので、まっすぐ商店街出入り口に向かった。

「白亜ー」

突然自分の名前を呼ばれたのできよろきよろと周囲を見回すも、
知っている人間は見当たらない。

ティンクルアイスクリームという、全国展開している店に目がつ
いた。カウンターには十人足らずの女子学生が列を成していた。そ
の傍らで、既に購入を済ませた二人の少女が立っている。第二高等
学校の制服を身につけており、共に白亜に注目していた。一人は綾
だったが、もう一人は初めて見る顔だった。

小走りで二人の元に駆け寄る。

「今日はちょっと遅いんだね」

「うん、友達と遊んでた」

綾はくすくすと笑った。

「へー、君が白亜君かあ」

隣に立つ見知らぬ少女が話しかけてきた。茶髪のポニーテールと健康的な顔つきから、快活そうな印象を受けた。

「この、ちよい太めな子は村雲命。前話したわよね」

「あっ……もしかして、村雲君のお姉さん？」

言われてみれば、司郎と顔が似ているように見える。

「あたしも司郎から話は聞いてるわ。うん、確かに司郎の言うとおりスペックは高そうね」

「えっ？」

「司郎、君の事すごく気に入ってるみたいだから」

気に入っている。司郎は性格もあってか、そこまで会話を交わしていない。それでも彼が白亜を慕っていたことに、少し気恥ずかしさを覚えた。

「それはともかく、何よ太めって」

「べーつにー」

命はわざとらしく怒った。対して綾は視線を逸らして実にどうでもよさそうに返した。

命が白亜に振り向いた。どこか含みのある笑みを浮かべていた。

「白亜くーん」

「は、はい？」

「健康的な女の子と病弱そうな女の子、君はどっちが好きかなー？」突然の質問、しかも好みの異性について。わずかに体温が上昇する。

「え、えっと、どういうことですか……？」

「んー、分かりやすく言えば、いい体つきで明るい女の子と、体の線が細くて物静かな女の子、ってどこだね」

明らかに目の前の二人を指していた。命の体格は確かに逞しい。短いスカートから伸びる太股は綾のそれよりもふっくらとした肉つきをして、肌色も濃い。そして、ブレザー胸部の盛り上がりが、綾とは比較にならない。「山と平地」そのものだった。

むらむらとした色欲が芽生え、ぼつと顔全体が熱くなるのを感じた。

「ありゃー、色々考えすぎちゃったかなー？」

命は実に楽しそうな様子で白亜を眺めていた。

「ちよつと、ミコ。人の弟にあまり破廉恥な事しないでもらえる？」

「もー、過保護だねえ。これぐらいの歳になればこんなの日常茶飯事でしょうに」

白亜も年頃の少年である。異性に対して一種の感情が芽生えるのも当然である。普段は気にせずとも、今のようになつた会話で異性を意識してしまう。健康である何よりの証拠であつた。

「ほら、白亜」

綾が手元のアイス差し出してきた。コーンに乗ったアイスは半分近く食べられており、わずかに黄色がかった白色だった。

「え、いいの」

「もう私は堪能したから。それに、熱を冷まさなきゃ」

どうやら放熱は周知されているらしい。慌てて綾のアイスを受け取り、かじった。苦みを含んだ柑橘系の甘みと香り、微細の氷で構成されたシャーベット特有の歯ごたえ、そしてひんやりとした感触で熱が収まり始めた。

「柚？」

「好きじゃなかった？」

「ううん、おいしい」

再びかじる。普段食べ慣れない果実の香りは新鮮で、すっかり虜と化してしまった。

命がにやつきながら口を開いた。

「お姉ちゃんと間接キスだあー」

「っっ!!??」

アイスが気管に入ってしまった、むせてしまった。

「ミコっ！」

「姉弟なんでしょー？ 別に気にすることないじゃない。あたしも

司郎としよっちゅうしてるし」

「あのねえ――」

二人は口論を始めてしまった。白亜はただひたすら咳き込むことしかできなかった。

ようやく鎮まった頃には、二人も口論を終えていた。

「……白亜も落ち着いたみたいだし、そろそろ帰るわ。まったく」

「そっかぁー、残念だなー」

綾はすっかりげんなりしていた。反面、命はとても満足した様子で胸を張っていた。

「じゃあねー、白亜君。司郎の事、よろしくね。あの子最近元気なさそうだから」

耳を疑う。司郎の元気がない、それはどういう事かと。

「元気がないって……」

「あ、そっか。クラス違うからそこまで分からないか」

司郎は隣の二組所属だった。そのため、顔を合わせるのは昼休みや放課後に遊ぶ時がほとんどだった。

「いつも通りに見えるんだけど、一瞬陰りが差すっていうのかな。そんな感じ」

「原因は分かってるの？」

綾が心配そうに尋ねてきた。

「うーん、聞きたいには聞きたいんだけど、どうも近頃避けられるような気がしてねえ」

命は苦笑いを浮かべた。寂しさを感じているのは明らかだった。

「そういえば、今日から放課後遊べなくなるって言ってました」

「今日から？」

「はい」

命は不安そうに眉をしかめた。

「うーん、変な奴らに絡まれてなきやいいけど……。あの子いじめられそうな気配してるからなあ」

「弟の事、よく知ってるのね」

「うん、まあね。私がいじり過ぎたのが原因かなあ」

「あんたかよ」

綾はあきれながら突っ込みを入れた。

「とにかくありがとね、白亜君。あたしも気をつけるけど、白亜君も何か分かったら教えてもらえないかな」

「はい」

「ごめんね、出会ったばかりなのをお願いしちゃって」

「いいえ、気にしないでください。村雲君は友達ですから」

白亜は自身の言葉に違和感を覚えた。友達。言葉を通して友達になったのは優希と美月だけである。共に遊ぶ須田や司郎、その他の男子も確かに友達ではあるが、それは暗黙の了解によるものだった。果たしてそれは本当に友達と呼べるのか。些細な疑問がささくれとなって心に刺さる。

命と別れ、綾と並んで商店街を歩き始めた。

綾はちらちらと白亜に目配せしていた。

「どうしたの？」

「白亜って落ち着いてるなあって思ってた」

「僕が？ 全然そんなことないよ。さっきだってちょっと変な風になっちゃったし」

「……あれはいいの。私が言ってるのは、ミコのお願いを受けた時の返しよ」

「えっ」

「今時の小学生にしてはなかなかスマートだったわ」

「スマート……」

白亜としてはごく自然に返したつもりだった。しかし、それが誉められた。確かに嬉しいが、あまり納得はいかなかった。

「利口な弟もいいものね」

綾は自分に言い聞かせるように呟いた。口角をわずかに上げてい

る。

その様子を見ながら歩いていると、正面から衝撃を受けた。

「いたっ——」

すぐに向き直ると、目の前にセーラー服を着た小柄な少女が立っていた。紺と白を基調とする中、真紅のスカートの自己主張が激しい。

髪は黒のショートカットで、前髪は分けられていた。中性的な顔立ちをしており、表情の温度は低い。

苛立ちを込められた凝視が白亜にまとわりつく。

「す、すいません」

畏怖ですっかり固くなった体を折り曲げ、謝罪した。しかし、顔を上げて少女の様子は何一つ変化が生じなかった。

「……邪魔」

不快そうに呟いて、歩き出した。ぶつかりそうになり、慌てて体を除ける。

少女は振り返ることなく人混みに消えていった。それでも、思わぬ出来事で胸の鼓動が止まらない。

「大丈夫？」

「う、うん、ちょっとドキドキしただけ」

綾は不安そうに白亜を心配し、間もなく怪訝な様子で後ろをちらっと見た。

「……『第一』の生徒ね、あのセーラーは。顔立ちからして、中等部かしら」

「第一？」

「中高の一貫校で、ここらで一番でかいところよ。高等部の偏差値は第二とどっこいね。まああんなのもまともな子もいる普通の学校よ」

「よく知ってるんだね。友達がいるの？」

「まあ何人か。というか、私も中学はあそこだったのよ」

「そうなんだあ。あつ、でもお姉ちゃんの高校は第二なんだよね。」

どうして第一にしなかったの？」

綾は懐かしむように目を細めた。

「お兄ちゃんが第二だったのよ。だから、私もって思っただけ。単純でしょ？」

どうにも「単純」という言葉からネガティブな印象を受けてしまい、白亜は慌てて首を振った。

「う、ううん、そんなことないよ」

「いいのよ。私からすれば第一も第二も同じようなものよ。お兄ちゃんがいたかいないか、それが全てだったしね」

「全て……」

綾が兄の蓮を好いているのは先月の事件で明らかだった。そして、今の言葉でそれはより色濃いものへと移り変わった。

「でも、今は白亜がいるから」

綾は右手を白亜の頭に軽く乗せた。間もなく、細身の指で癖のない柔らかな髪を梳き始めた。

心地良いのは事実だったが、羞恥と興奮が一気に高まってしまいそれを甘美する余裕はなかった。

「は、恥ずかしいよっ」

弱々しくそう言うのが精一杯で、振り払うことなどできるはずもなかった。

「ふふっ、ごめんごめん」

悪びれる様子もなく、くすくすと笑って手を退けた。

翌日。授業を終えた白亜はすぐにランドセルを背負い校門に向かった。本日はLGOで訓練を行う日であった。

訓練日は学校の予定と照らし合わせ、決定された。現在の予定では週に三、四日となっている。

送迎車が自宅に来るまで、時間の余裕はさほど多くない。特に用事もないため、白亜はまっすぐ家へと歩いていた。ほぼ真っ先に教室を飛び出したため周囲に同学年の生徒は見当たらない。

交差点の信号待ちをしていると、斜め反対側の歩道に同学年と思われる生徒が見えた。はっきりと確認はできないものの、どこか見覚えのある後ろ姿であった。脳裏に司郎のシルエットが過ぎった。もしか、と思い尾行したくなる衝動に駆られるも、自身が成さねばならない事を思い出してすぐに断ち切った。

しかし、司郎の秘密の手がかりを掴んだのかもしれない。訓練がない明日、尾行を行おうと決意した。

LGOのマーク以外は一般車両にしか見えない送迎車の乗り心地にも、林の事件の帰りにも運転してくれていた運転手の森にも慣れた。しかし、正面口の嚴重な警備は未だに慣れない。

「こんなものに慣れる必要なんてないさ」

駐車場に向かう途中、森は穏やかに話してきた。

「いや、慣れちゃいけないって言った方がいいのかな。君は一般人でいるべきだからね」

森の言葉が意図するものが何であるのか、白亜には理解できなかった。

森に礼を述べ、施設に向かった。

受付には二人の女性隊員が座っていた。着用するLGOの制服は共に事務員用のもので、三浦のものよりきっちりとしていた。

「こんにちは、白亜君」

背の小さな方が立ち上がって、鈴を鳴らしたような愛らしい声で迎えてくれた。主張の少ない胸には「星野」と書かれたネームプレートが下がっていた。

「星野さん、こんにちは」

白亜は星野の声を聞くなり、嬉しそうに挨拶を交わした。体型も顔つきも綾と同年代にしか見えない彼女には、不思議と心が許せる気がした。

あらかじめ首にぶら下げておいた隊員証を差し出す。すると星野はスキヤナーでICチップを読み取った。これで、白亜は入館中の

身となった。

「今日は実技なんです」

「そうなんだあ。御堂さんに怒られないようにしなきゃね」

星野は綿毛を思わせる雰囲気を漂わせながら忠告してきた。白亜は苦笑するしかなかった。

星野の隣に座る女性をちらりと見た。星野よりかは主張している胸には「君島」と書かれたネームプレートがつけられている。

君島は白亜の存在など感じていないかのように、一心不乱にキーボードを叩いている。

「こんにちは、君島さん」

明らかに社会人と分かる容姿だった。髪が短く、裸眼である点を除けば、仲良くなる前の綾と雰囲気似ていた。

指が静止し、鋭い瞳が白亜に向けられた。

「……お疲れ様です」

温度の低い、義務的な挨拶だった。君島はすぐに視線を画面に戻し、キーボードを叩き始めた。苦手な相手であるが、さすがに避けるわけにもいかず毎度戸惑ってしまう。

「アキちゃんも本当は白亜君が好きなんだけどねえ」

君島の指が再び止まる。そして星野を冷たく睨んだ。

「ほらあ、そういう目してると白亜君に嫌われちゃうよ」

君島は細い眉をぴくりと動かし、逃げるようにディスプレイに目を背けてしまった。

「あ、あの、嫌ってなんかいません」

自身の責任だと感じてしまい、慌てて謝る。しかし、君島は二度と動きを変えることはなかった。

「この子なら大丈夫だから。ほら、もう行かないと」

「は、はい」

苦笑する星野に言われて受付を後にするも、気持ちは晴れぬままだった。

施設は複数に別れていた。白亜が目指す訓練施設は、一階の渡り廊下を使用しなければ入場できなかった。

待合室には多くの隊員がいた。ここに来るのは初めてではないため、数人とは面識があった。誰もが白亜の姿を確認するなり気さくに挨拶を交わしてきた。当然白亜も笑顔で返した。

ミーティングスペースに、一人の男が腕を組んで立っている。体つきは他の隊員ときほど変わらぬ屈強ぶりだが、坊主頭で凜々しい顔つきは他と一線を脱していた。この男こそ、実技担当の御堂伸也である。

「こんにちはっ」

白亜はより緊張を高め、挨拶を交わす。

「おう、きたか」

御堂は成人男性特有の太く落ち着きのある声を返した。

「本日も、よろしく願います」

「こちらこそ、な。さて、今日は前回同様スレイブ・ボット相手の訓練だ。しっかりやれよ」

「は、はい」

御堂に連れられ、男性用の準備室に入った。

空間は黒と灰色で構成され、殺風景である。壁際には訓練用防具が整列していた。各々に隊員の名前が刻まれており、その中には白亜のものもある。

自身の防具はすぐに見つかった。新品同様の上女性用のサイズであるため、名前を確認するまでもなかった。

洗濯され綺麗に畳まれた戦闘服に着替え、防弾ジャケットを纏う。続いて手袋、ブーツ、ヘルメット、そしてゴーグルと、本格的な装備を施した。最初の二、三日は戸惑ったが、今ではすんなり着用できるようになっていた。

着替え終わるなり目を瞑り、深呼吸を行う。模擬戦場に向かう直前、気を落ち着けるために必ず行うようにしている。

よし、と心の中で呟いて準備室を後にした。

第二十一話 機人と機械

車線の多い道路、緑豊かな街路樹、そびえ立つ高層ビル群。大都会に迷い込んでしまったのかと錯覚してしまう。そして、これら全てが作り物でしかないことも衝撃の一つである。

「水瀬、始めるぞ」

マイク付き小型ヘッドフォンから御堂の声が聞こえた。

「はい」

白亜は返事一つで、身構えた。そして念じる――

――変身――

人間特有の五感に変容し、肉体が変化していく。身長が伸びたことで、視界の位置に変化が生じる。

間近の建物は壁一面がガラス窓になっていた。そこに映りこむ自身の姿を確認する。

陶磁器のように白く輝く装甲を纏った機人――それが今の白亜である。ようやく160センチ半ばに達した身長は、今や2メートルを越えている。ロボットアニメの主役機を思わせるヒロイックなデザインは、自身の肉体でありながらも大変気になっていた。

小さく頷き、もう一人の自分と別れた。そして歩道に設置されたカーキ色の箱の元へ向かう。

腰ほどの高さの長方形で、艶のない金属で出来ている。端にいくつかのボタンがついている以外に何の装飾も施されていないかった。「OPEN」と書かれたボタンを押す。すると天板がスライドし、中身が上方に射出された。プラスチック製の台に固定された銃器である。

その内の一つを手取る。三浦やLGOの隊員が用いるアサルトライフルの一種だった。それといった特徴が見当たらないそれにつ

いて白亜が知っている情報は、アメリカ軍が過去に採用していたことと取り扱いに優れていることだけである。しかし今の白亜には一体何が優れているのか理解することはできなかった。今の彼がこうじて記憶している突撃銃はこれだけであり、比較対象が存在しないのだから。

「もう一度言う。ボットを停止させろ」

「はい」

「プログラムを忘れるなよ」

これまで訓練のみに時間を費やしてきたわけではない。上田や総司たちによって、今の肉体について調査がなされてきた。全身の構造、内部データ、性能限界――謎が次々と解明されるにつれ、自身の可能性も飛躍的に拡大してきた。

御堂の言うプログラムとは、全身の被弾率を調べることができるものであった。元々インストールされていたもので、データ解析中に見つけだされた。

早速プログラムを起動させる。

――Shock-sensor Program start――

念じた瞬間、体毛が逆立つようなぞくりとした感触に襲われる。

HU Dの全身図にいくつかの項目が追加された。

準備は整った。

無音の都市は正にゴーストタウンである。生物は存在せず、ビルも車も信号機もハリボテでしかない街なのだから当然である。ただ聞こえるのは徐々に大きさを増す、車のものとは異なる走行音のみである。

射撃方法をセミオートに変更する。そして足を開いて腰を落とし、左手の銃を構える。アイアンサイト越しに遠くのT字路を眺めた。

間もなくT字の左右から走行物体が合流し、白亜に向かってきた。

視界を拡大する。車輪付きの三つ足を生やした、濃い灰色の円筒が見える。その数は二。丸い頭部には全方向に対応可能な速射砲を搭載し、円筒中央部には目玉状の赤いカメラアイが取り付けられている。このカメラアイにペイント弾を当てること、活動を停止させることができる。

周囲を見回すも、姿を隠せるような遮蔽物は一つも存在しない。このままでは正面からぶつかることになる。それでは当然被弾率は高くなり、御堂から言葉の砲撃をもらってしまう。如何に攻撃を避け、短時間で目標を鎮圧できるか――それが全てだと教わった。

後退しようと思った瞬間、後方からも走行音が響き渡る。音の数から、こちらも二体であると判断した。挟み撃ちである。

「今日はきついなあ……」

思わず不満を漏らしてしまう。

「現実はおつときついぞ」

御堂の声が脳内に響いた。場の音声は全て監視室に筒抜けであることを忘れていた。

小さく溜息を吐いた後、再び周囲を見回す。やはり役に立ちそうなオブジェは存在しない。上方を見上げる。無点灯の信号機と電光掲示板が寂しげに佇んでいた。

訓練のルールをいくつか思い出す。その中には「レーザーガンでターゲットを射撃してはいけない」というものがあった。それを反芻した後右手を腰に伸ばし、レーザーガンを握り取る。

量産されている銃器とは明らかに異なるデザイン――悪く例えるなら玩具じみた作りに見える。しかし、その性能の高さはホメロスとの戦いで実証済みである。

銃口を電光掲示板に向ける。照準は板のちょうど真ん中にロックされている。わずかに念じると、照準が動き出して板を支える柱をロックした。

モードが通常型であることを確認する。

そして、引き金を絞った――

機械に意志はない。彼ら、いやそれらはただプログラムを実行するだけの無機物ではない。

多くの科学者が機械に意志を持たせようと試行錯誤した。しかし、どの「意志」も結局はプログラムの結果でしかなかった。自発的に感情を起こす行為こそ「意志」なのだから。

現在ハリボテの大会を走行する四体のスレイブ・ボット「TT-01」もその一つである。それらは「設定された目標を攻撃する」というプログラムを実行するだけの、全長150センチ前後の円筒状金属物質である。

設定された目標にはビーコンが取り付けられていた。そこから発信される電波を掴んだ後予め登録された周辺マップを照会、目標までの最短ルートを模索・決定する。そして発見次第攻撃を行う。ごくシンプルな手順である。

二体が一つの道路を走っている。その先に目標がいるためである。そして、目標の先にはもう二体が接近してくる。TT-01には「連携」などという高度なプログラムは搭載されていない。故にこれは偶然でしかなかった。

円筒中央部のカメラアイが遙か先の目標を補足した。

目標は、黒い板――ひび割れた液晶パネルが取り付けられた電光掲示板である。本来信号機の横に存在するはずの物体が、道路上で直立しながらわずかに浮き上がっている。

機械は疑問を持たない。信号を出す目標を攻撃するのみ。当然補足物体の姿形に興味を示さない。

円筒上部に備え付けられた9mm速射砲が微動する。装填された弾はペイント弾である。

TT-01と板の距離が縮まる。TT-01はもちろん、板も動いていた。板は上下に激しく揺れながら迫ってきている。それでも機械に異常は理解できない。

間もなく速射砲の射程距離に入る。砲口が板の中心に向けられた。すると板はぴたりと動きを止め、ゆっくりと着地した。

一体のTT-01は空葉莢と破裂音を吐き出しながら、無数のペイント弾を射出した。液晶パネルは何の抵抗もなく弾を受け入れた。血のような赤色の液体がパネルに飛び散り、スプラッター映画さながらの残虐的模様が広がった。

すると、掲示板の後ろから人型の物体が左半身を覗かせた。純白の装甲に覆われた細身の機人だった。左手には突撃銃が握られ、アイアンサイトの奥ではカメラアイがライトグリーンの輝きを見せている。

機人の銃口が光り、弾が射出された。弾は発砲したTT-01のカメラアイに命中し、艶のある青い液体をまき散らした。間もなくTT-01は三つ足の車輪を止め、活動を停止した。

機人は銃口をもう一体に向け、引き金を引いた。弾はカメラアイ横の装甲をかすった。飛び散った液体はTT-01の後方へ流れていき、やがて道路を濡らした。

「外したっ!？」

機人の発する音声は、十代前半の人間男性のものだった。戦慄を覚えたであろう事が明確な声である。

電波は機人から発信されていると分かるなり、残ったTT-01は速射砲を機人の半身に向け乱射した。機人は慌てた様子で身を引っ込めペイント弾を交わした。掲示板の縁に流れ弾が当たると、板はぐらりと揺らいだ。

「うわわっ」

またもや驚声が上がった。金属同士の軽い衝突音が響いて、間もなく板の揺らぎは静まる。

「ふう……」

安堵の声。機人は、機械とは思えぬほど感情豊かである。否、それは――彼は機械ではない。エイリアンである。

TT-01は射撃を止め、板に向かって走り始めた。その様子に躊躇は見られない。何故なら機械だから。

円筒左右の装甲が開き、腕が伸びた。三本の角張った指がついただけの簡素なマニピュレーターである。

腕を前方に構え、衝突。パネルはさらに破碎され、板が傾いた。

「ちよっ、ちよっ」と

TT-01の指はパネルを穿ち、板を掴んでいた。そのまま板を持ち上げ、数回左右に揺らした後放り投げた。

TT-01のカメラアイは正面を捉えたままだった。板の後ろにエイリアンはいない。続いて足下に向けた瞬間、カメラアイは青に染まった。活動停止。

「危なかったあ……」

TT-01の足下で、エイリアンが仰向けに倒れていた。上方に向いた銃口から吹き出た灰色の煙は緩い風に乗って流れていた。

間もなくエイリアンの周辺に、幾重もの液体が勢いよく飛び散った。二体のTT-01が走行しながら彼に向かって速射砲を乱射していた。

「やば」

エイリアンは次の行動に戸惑っていた。TT-01の有効射程距離は間近に迫っていた。逃げようと試みたのか後ずさるものの、停止したTT-01にぶつかってしまった。

「そうだ！」

閃きを感じさせる歓声を上げるなり、TT-01の脚部を掴んだ。そして、機体丸ごと前方に放り投げた。

TT-01は飛来物を探知した場合、回避行動を取るようプログラムされている。二体は射撃を止め、飛来する機体をかわした。機体は道路に叩きつけられ、ただ虚しく転がっていった。

エイリアンはすかさず後方へ駆けだした。彼の向かう先は、もう

一体の停止したTT-01だった。

回避を終えた二体は再び射撃を始める。エイリアンは機体の後ろに回り込んで、腰を下ろした。

無数のペイント弾が停止したTT-01に命中、まるで血塗れのような醜態と化した。

射撃が止まり、TT-01からいくつかの金属音が鳴り始める。速射砲のリロードだった。

エイリアンは半身を出して、二体に連続して射撃を行った。一体は見事カメラアイに命中、しかしもう一体はカメラアイ下部の装甲を汚すだけで終わった。

リロードを終えた最後のTT-01は攻撃を再開する。エイリアンは慌てて体を引っ込めた。

「うまく当たらない……」

射撃能力の低さを悔いる呟きは、射撃音にかき消された。悔いを振り払うように首を軽く振った後、バリケードと化したTT-01を押し始めた。接地した三つの車輪がゆるやかに回り始め、前進する。

バリケードからはみ出した鋭角状の肩部先がわずかに赤く染まっていた。しかし、エイリアンはそれに気を留める様子を見せずに前進を続ける。

TT-01は射撃を止め両腕を展開し、バリケードに突進した。例えばそれが自身と同型かつ同士であっても動きに躊躇はない。そして、TT-01には「回り込む」という高等プログラムは組み立てない。

バリケードへの衝撃がエイリアンにも伝わり、両肘関節のモーターが負担を訴えるように唸りを上げる。

「ぐっ」

このエイリアンに歯があるのかは定かではない。しかし、明らかに噛みしめるような音を漏らした。

エイリアンは拮抗しながら突撃銃を握り締め、脇からTT-01

を覗いた。カメラアイが目の前に存在していた。同時に、TT-01頭部から駆動音が鳴り始めた。

慌てて頭を引っ込めた。間もなく頭があった位置にいくつものペイント弾が通過していった。

エイリアンは射撃方法をフルオートに変え、銃身をバリケード脇からそっと差し出して引き金を押し込んだ。ペイント弾が乱射され、カメラアイのみならず円筒部一面が真っ青になった。

最後のTT-01が活動停止し、バリケードへの圧力は収まった。エイリアンは特に喜ぶでもなく、ただ無言で俯いていた。

数人の隊員が遠巻きにミーティングスペースを眺めている。注目先の机には着替えた白亜と御堂が向かい合って座っていた。場の誰もが口数を減らし、見守っている様子だった。

二人は間に置かれた二枚の用紙をじっと見つめている。一枚には「実技訓練考査」と書かれ、数十の項目が並んでいた。項目の横には二つの記入スペースがあり、◎や×といった記号が片方だけ埋まっていた。それは白亜によって書かれた字であり、自身の評価を表していた。後に御堂が片方のスペースを埋めていく。

もう一枚にはリジエネレイター01の全身図が描かれ、頭の前からつま先までびっしりと文字と数値が書かれていた。訓練開始前に起動したプログラムの結果である。

御堂は厳しい面持ちで表を注視している。白亜はただ御堂が口を開くのを待つしかなく、この時間は緊張に満ちていた。

「よし……」

御堂は目を上げて切り出した。白亜も慌てて顔を持ち上げた。

「まず聞きたいことがある」

「は、はい」

「なぜ、レーザーガンを使った？」

「ターゲットに対して使ってはいけない事は知ってます。しかし、ターゲット以外に使ってはいけないと言われてません」

あくまでレーザーガンを使用したのは、電光掲示板を落とすためである。事情を知らぬ者からすればただの屁理屈だった。

「そうだ。お前が撃ったのはターゲットではないからな。これは違反ではない」

御堂はわずかに表情を緩ませた。白亜も緊張を解いた。

「だがな」

思わぬ付け足しで、冷や汗が吹き出した。

「世の中そんな屁理屈だけで生きていけると思ったら大間違いだらな。人間は時としてルール以上のものを守らなければならない。それだけは覚えておけ」

御堂の言葉を小学生が理解できるのか。視線は定まらず、戸惑いに満ちた表情が答えである。

「つと、ちと説教染みたな。悪い」

「いえ、そんな」

果たして本当に悪いのはどちらなのか——白亜はそんな疑問を持ったが、心の隅に押しやった。

「ところで、だ」

「はい？」

「お前にはオートロック機能があると聞いている」

オートロック。リジエネレイター01に搭載された武装のみに適応される機能で、名の通り自動で照準を合わせてくれる。レーザーガンを使う際非常に世話になっている、というよりもそれが当たり前であるかのように使っているのが現状である。

「もうあれは使わない方がいい」

「何故ですか」

「何かしらの障害でオートロックが使えなくなった時、お前はマニュアルでレーザーガンを撃つことになる。その時に備えておくべきだ」

レーザーガンにもアイアンサイトが備わっているの、不可能ではない。しかし白亜にしてみれば便利な機能を何故禁止せねばならないのか、御堂の理由を聞いても納得がいかなかった。

「それにもう一つ。ロックオンの時間がもったいない」

「え？」

「マニュアルなら狙って撃つ。ただそれだけだ。しかし、オートロックでは手順が増える。まずターゲットのロックを待たなければならぬ。そしてロックオンを確認した後発射。コンマ以下の時間だろうと、それは明らかロスだ」

まるで白亜の心中を察したように御堂は説明した。それでも白亜の心は晴れない。「コンマ以下」を理解できる小学生はほとんどいない。

「不満そうだな」

「は、はい……」

「今すぐ理解しろとは言わない。けどな、嫌でも理解せざるを得ない時がくる。心の片隅に留めておくだけでいい」

白亜はこくりと頷いた。

その後は、考查表について話し合った。順応性、被弾率、実銃の命中率……数多くの項目があり、御堂は一つ一つ丁寧に、そして厳しく言及を重ねた。白亜は自身の実力の無さを噛み締めつつ、御堂の言葉を受け入れた。

考查を終え、白亜は安堵の溜息を漏らした。

「お疲れさん」

「ありがとうございます」

「課題の一つは、レーザーガンのマニュアル射撃だな。LGO、いや世界のどこも未だに光学兵器を正式採用していない。だから俺たちから教えられる事は少ない。出来ることと言えば、せいぜい射撃場を用意してあげることだけだ。すまないな」

「そ、そんな」

思わぬ形で御堂の謝罪を受けて、白亜は慌てて返した。

「ははは、そう真に受けるな」

御堂は穏やかに笑った。

「おっ、真面目にやっとなるようだね」

三浦が二人の間に割って入ってきた。

「まあ、おかげさまでな」

「あんたじゃないわよ」

「だろうと思った」

隊員同士で仲良さげに笑い合った。そして、三浦は白亜に顔を向けた。

「学校帰りだったのに、毎度お疲れ様」

「いえ、そんな」

「不満があつたらなんでも言つてよね。よほどの無理難題じゃなければ叶うから。例えば、担当教官がムカつくとかさ」

三浦が目を細めて御堂を凝視すると、彼は無言で睨み返した。

「だ、大丈夫です。御堂さんは優しく教えてくれます」

「どうかなあ」

「本当ですよっ」

「まあそういう事にしといてやるか」

三浦は思惑ありげに口端を吊り上げた。

「でも、すぐに分かるわよ。この男が如何に狂っているか」

「なんとでも言え」

そう言う御堂は特に怒るでもなく、かといって喜んでもいない。ただ、ふっと息を漏らしたただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2423u/>

リジェネレーター

2011年11月13日21時52分発行